

日本への回帰

第51集 平成27年 富士合宿レポート



大学教官有志協議会
公益社団法人国民文化研究会

日本への回帰
(第五十一集)

——第六十回全国学生青年合宿教室（富士）の記録より——

昨平成二十七年九月、集団的自衛権の「限定的な行使容認」を含む安全保障関連法が成立した。尖閣諸島（沖縄県石垣市の一部）への領土的野心をいよいよ露にする中国の度重なる領海侵犯など、波高しの現況にあつては半歩前進であつたが、国会審議の様子を伝へる紙面や主要メディアの論調などを見てみて、戦後七十年にしてなほ「国防努力忌避の戦後体制」下にあるわが国の病理を思はざる得なかつた。そこには自国の手足をどう縛るかが議論の前提とされてゐたからである。

集団的自衛権とは、分りやすく言へば、国防衛に最善を尽す中で足らざるところを他国との協力で補ひ、さらに万全を期すといふことにならうが、その根本に自国の防衛には先づは自らが全力を傾けるといふ確固たる信念がなければならぬ。その肝心の覚悟の程が感じられなかつたのである。「専守防衛」「一部容認」「限定行使」「憲法上の制約」といった言葉が当り前のやうに行き交つてゐた。世界中で、自らの手足を縛ることから安全保障論議が始まる国は他にはないであらう。かうした「国防努力を忌避する観念」が日本国憲法前文の「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意し

た」との文言に由来することは、既に多く指摘されてきたところである。ここには、われら日本国民は「公正と信義に背いて平和を攪乱した」悪しき者である。それゆゑ自らのために計^{はから}ふ資格はありません」との自己卑下、自虐の寓意が潜んでゐる。

そもそも日本国憲法の草案は、主権喪失の被占領期に連合国軍総司令部（GHQ）のスタッフによつて一週間で練られたものであつた。前文は麗々しくも「日本国民は……」で始まつてゐて、さらに途中で何度も「日本国民は」が繰り返され、「われらは」が幾度となく出てくるが、GHQが「日本国民は」「われらは」と騙^{かた}つたにすぎないもので、わが方は何ら関与してゐないのである。ただし、大日本帝国憲法第七十三条に基づく「帝国憲法の改正」との擬態^{ぎたい}を施すことで辛うじて法的連続性（正統性）が加味された形にはなつてゐる（昭和二十一年十一月三日公布、六ヶ月後の翌年五月三日施行）。しかし、純法理から見れば独立喪失の敗戦国が外国権力（GHQ）によつて受容を強要され、呑まざる得なかつた政治文書に他ならない。このことを否定することは何人たりともできないはずである。

即ち「国防努力を忌避する日本」とは、「弱体化した日本」「立ち直り不能な劣化した日本」のことであつて占領統治の目的そのものだが、その状態を法定化する政治文書が「日本国憲法」だったのである。第九条二項の「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国

の交戦権は、これを認めない」との文面を読めば、日本国憲法がポツダム宣言第九項からくる「日本国軍隊の武装解除」状態の常態化を目論んだものであることはいよいよ明らかであらう。主権回復（昭和二十七年四月、平和条約発効）後、速やかに改廃されるべき、この「屈辱の政治文書」が最高法規、法の中の法、「憲法」として、立法者意思^{そんたく}を付度することなく、公的なあらゆる場面で奉じられ、気づいてみれば、与野党間はず「憲法の平和主義の尊重」を言ひ、さらには「平和憲法」と賛称するやうになつてゐる。主客顛倒の極みといふ他はないが、かくして自尊自立の国民的信念は蝕^{むしば}まれてしまつたのである。

現行の文部科学省検定済の教科書を見ても、前文や第九条に記された「自立努力否定の文言」「武装解除の規定」を讀へて止まない。一例を挙げてみよう。

「…憲法前文で…諸国民の公正と信義に信頼してみずからの安全と生存を保持しようという決意を明らかにした。…この決意…を具体化した規定が、第九条である」

「…日本国憲法は、戦争放棄を確実なものとするために、軍備廃止を宣言している点で、いっそう徹底した平和主義にたつ画期的なものといえる。そして、この点に、日本国憲法の平和主義の世界史的な意義を認めることができる」

生徒は、かうした教科書から何を学べばいいのだらうか。

安保関連法案の審議の際、国会前に集って「違憲の戦争法案反対！」を声高に叫んだ真面目な人達は、日本国憲法の申し子と言ふべきで、もの見事に日本国憲法の本質を示してゐた。端から国防努力を批判し否定して、敵視さへしてゐるかに見えたからである。

ともかく安保関連法は成立し、並行して総理大臣が憲法改正の必要性を口にするやうになつた。国政選挙の公約に憲法改正が掲げられるやうになつた。憲法見直しの動きは、中国による尖閣諸島上空を含む防空識別圏の設定、中国軍艦の対馬海峡及び宮古海峡通過、北朝鮮の累次のミサイル発射等々、近年の直接的な脅威が後押ししてゐることは間違ひないが、憲法改正の眼目は、長年にわたる「日本国憲法」体制の下にあつて、深く広く染み込んでしまつた「国防忌避の観念」の克服にある。しかしながら、それは容易なことではない。現に今なほ前記の教科書のやうな授業がなされてゐるのだ。「戦争法案反対！」と叫んだ人達を笑ふわけにはいかないのである。自尊自立の国民的精神を欠いては如何なる防備も機能するはずがない。国防は単に物理的な備へに留まるものではなく、教育のあり方から国民の精神生活まで深く関連してくるのである。

(GHQは日本国憲法によって日本人の国防意識にくさびを打ち込んだが、その主要勢力は言ふまで

もなく米国であった。その米国との安保条約によってわが国は米ソ冷戦の国際場裡を生きてきた。さらにまた軍拡中国の海洋進出などを念頭に、米国との防衛協力を強めなければならぬ局面にある。冷厳なる国際社会の現実を思ふばかりであるが、米国にはまた独自の思惑や戦略があるはずである。それゆゑにわが国自身が自尊自立の矜持を取り戻すことが何より大事なこととなる。米国との防衛協力の実効性を高めるためにも、一目置かれる国になることが不可欠なのである。憲法改正はその第一歩である。

右のやうに考へる私共は「誇りある日本」を取り戻すべく、昨年も、例年と同じく宿泊研修を営んだ。「第六十回」の、私共にとって記念すべき「全国学生青年合宿教室」であった。本冊子には、霊峰・富士を仰ぎつつ実施されたその研修内容が収められてゐる。行間からも私共の願ふところをお汲み取りいただけたら幸甚である。

最後にあたり、長谷川三千子先生には御講義の要旨掲載をお許しいただいたばかりか御懇篤なる御加筆を賜つたことに深く感謝申し上げます。

平成二十八年二月十一日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日目（八月二十九日）

より良く生きるために―『教育勅語』を思ひ出さう―

（株）寺子屋モデル代表世話役 山口 秀 範… 1

第二日目（八月三十日）

三種の神器の謎を解かう！

埼玉大学名誉教授 長谷川 三千子… 29

古典は楽しい 小林秀雄『本居宣長』

昭和音楽大学名誉教授 國 武 忠 彦… 75

第三日目（八月三十一日）

御製に仰ぐ天皇のお心と日本の国柄

興銀リース（株）執行役員 小柳 志乃夫… 99

講話

「花燃ゆ」と小田村伊之助 元皇宮警察本部長 小田村初男... 133

学生体験発表

小林秀雄先生のお言葉から学んだこと 日本大学法学部三年 名和長高... 143

会員発表

国文研での友との付き合ひ (株)ロゼッタ 高木雅史... 153

短歌入門

短歌創作導入講義

..... 三菱地所(株)都市開発二部専門調査役 青山直幸... 165

創作短歌全体批評 熊本市役所環境局主任技師 折田豊生... 181

一年の歩み FTIコンサルティング 伊藤俊介... 195

合宿教室のあらまし 215

合宿詠草抄 241

あとがき

講義

—合宿導入講義—

より良く生きるために

—『教育勅語』を思ひ出さう—

(株)寺子屋モデル代表世話役

山口 秀 範



王貞治さんの家訓

家訓と国訓

東宮御学問所

倫理御進講の趣旨

教育勅語の授業

—「父母ニ孝ニ」・「朋友相信ジ」—

帝王教育の実際

終戦時の御製

新日本建設に関する詔書

より良く生きるために

王貞治さんの家訓

この合宿の案内パンフレットに「時代の転換期に生きる私たちは、どう生きるべきか。日本はどうあるべきか！」と呼びかけがありました。私たちはどう生きるべきか、人生の目標、夢の実現など言ひ方はいろいろありますが、誰しも「より良く生きたい」と願ってをられるに違ひないでせう。では、より良く生きるためには何を手掛かりにすればいいのか。一例として「家訓」といふものがあります。

参加者の皆様で我が家には家訓があるといふ方、手を挙げて下さい。無いですね。現代日本で家訓を持つてゐる人には殆んど出会ひませんが、王貞治さんをご存じですか。世界一のホームラン王、王貞治さんには家訓があるのです。壁に貼つてあつたわけではなく、お父さんがいつも王さんとお兄さんに語り聞かせてゐたものです。

- 一、人に迷惑を掛けない。
- 二、人のために尽しなさい。
- 三、時間厳守。
- 四、朝ご飯を必ず食べる。

五、負けた相手のことを考えなさい。

六、外出するときは、新しい下着を着用しなさい。

七、みなさんのおかげですを忘れない。(かな遣ひママ)

どうですか、とても平易で具体的ですね。現役時代の王さんは、ホームランを打ってもほとんどボディアクションをせずに、スーっとベースを一周してホームに戻って来ました。ハック・アローンの世界記録を破った七五六本目のホームランの時だけ、万歳をしてホームインした、それがとても珍しい事としてニュースになったほどです。「五、負けた相手のことを考えなさい」といふお父さんの教へをプロ野球選手になつてからも守り続けた、つまり王家の家訓は生きてゐたのです。

「六、外出をするときは、新しい下着を着用しなさい」はどういふ事かわかりますか。交事故に遭ふかもしれない、喧嘩に巻き込まれるかもしれない。怪我して病院に担ぎ込まれた時に、汚い下着ぢや恥づかしいぞとお父さんは言つてゐたのでせう。

『葉隠』をご存知ですか。江戸時代に鍋島藩の山本常朝が著した武士の心構へです。「武士道とは死ぬことと見つけたり」といふ一節が有名ですが、現代に通用する生き方も随処に



示されてゐます。その一つに「朝毎に懈怠けたいなく死して置くべし」があります。「けたいなく」は遅れることなくの意味で、外出したら何が起るか分からない、ひよっとしたら生きて帰れぬ事態も起こり得るので、毎朝死ぬ覚悟をした上で日々を過ごせと書いてあります。王さんのお父さんは中国大陸から日本に渡って来られた方ですが、ご苦労の中から体験的に実感され、家訓に加へられたのでせう。

家訓と国訓

あちこちで家訓作りを提唱してゐますが、家訓を作るとは自らの価値観の点検に他なりません。自分が何を手掛かりに生きてゐるかを、二つの面から点検してみるのがいいです。

一つは、ご先祖様が自分に何を伝えてくれたか、皆さんの父母、祖父母、曾祖父母までも十四人。この方々がなければ、あなたはこの世に存在しない。そんな大切な方々の願いや祈りを、私たちはどこかで感じる事が出来るのではないか。具体的には子供の頃に両親や祖父母から口をすっぱく言はれたことを思ひ出してみませう。さうして甦って来る言葉は、家訓作りの大きなヒントとなります。

もう一つは、偉人と呼ばれる先人の生き方にふれて、その中から光る言葉を選び出すことです。ここでもその言葉をよすがとして、百年前、千年前に生きた人の姿を思ひ浮かべてみませう。そしてご先祖様と偉人の言葉を融合して心の中で温めていくと、自分の中の価値観が自づと点検できるのです。私は何を大事にしつつ生きてゐるのか、何を美しいと感じて日頃過ごしてゐるのかと、普段は意識しないことが少し見えてくる、それこそが家訓を作る効用だと思ひます。

家訓があるからには、国民が挙つて守るべき「国訓」もあつて良いでせう。実はあつたのです。明治二十三年（一八九〇）から昭和二十三年（一九四八）まで、約六十年間は日本の国に国訓と呼べるものがありました。それは『教育勅語』です。そこで『教育勅語』を思ひ出してみようといふのが今日のお話の主題です。

東宮御学問所



東宮御学問所入学時(満 13 歳)皇太子裕仁親王

思ひ出すためにちょうど良い手掛りがあります。かつて皇太子裕仁親王が中学生の頃に学ばれた『教育勅語』の講義案が残されてゐるのです。この坊主頭のお写真は満十三歳の裕

仁親王、のちの昭和天皇です。凛々しいお顔をしてをられますね。

昭和天皇は明治三十四年(一九〇一)にご生誕、明治四十年に学習院初等科にご入学なさいました。当時の学習院長は乃木希典陸軍大将です。乃木院長が初めて裕仁親王にお目にかかるため宮中に参内

した時、「今日のように寒い時や雪などが降って手のこごえる時などでも、運動をすればあたたかくなりますが、殿下はいかがでございますか」と尋ねられ「ええ運動します」とお答へになったと、最近刊行された『昭和天皇実録』に記されてゐます。質素儉約の気風は乃木大将を通じてしっかりと身につけて行かれました。

中学校四年と高校三年の七年間は、東宮御学問所で一貫して学ばれました。裕仁親王と五名のご学友だけのため大正三年に設けられた御学問所の総裁は、東郷平八郎海軍大将（元帥）でした。第一年次の時間割は、

（月曜日）一限・倫理。二限・外国語。三限・漢文。四限・習字。五限・武課及び体操。

（木曜日）一限・倫理。二限・漢文。三限・歴史。四限・馬術。

（金曜日）一限・算術。二限・外国語。三限・国語。四限・地理。五限・武課及び体操。

などとなつてをり、それ／＼の科目担当は当代一流の学者や旧制中学高校教師の精鋭を集めて始まりました。

ところが、かんじんがな肝心要の「倫理」の科目——人の道を学び、より良く生きるための教へ——を担当する先生だけは、四月の開校時には決まりませんでした。東京帝大総長、京都帝大文学部長といふ日本を代表する学者に要請しましたが、二人とも、「将来天皇になられる方の人

の道をお教へする自信はとてありません」と固辞しました。そして「民間に一人だけゐます」と抜擢されたのが、次の写真の人、杉浦重剛先生です。日本中学校といふ私立中学校の校長を長く務める人物でした。

幕末に膳所藩（滋賀県）の儒学者の家に生まれて藩校で秀才の誉れ高く、維新後は大学南校（東大の前身）で理学と外国語を専攻しました。二十二歳でイギリスに留学し、化学や数学の研究に没頭しましたが、神経衰弱で志半ばにして帰国、その後は教育者・言論人として身を立てます。江戸時代の学問と西洋の科学を両方修め、国際経験も豊富で独特の教育の実践者として、六十歳にして帝王教育の重鎮に据ゑられたのです。

倫理御進講の趣旨

杉浦先生は七年間で恐らく五百回近く教壇に立ったでせう。その概容は先生の没後、お弟子さんたちによって『倫理御進講草案』といふ大部の書物にまとめられました。一年次の終り頃十一回に亘って講じられた「教育勅語」授業案も、その本に収められています。

同書の冒頭には「倫理御進講の趣旨（大体の方針）」と題して、倫理の科目を多感な皇太子

裕仁親王とそのご学友の少年たちに教へるに当たって、東郷総裁へ提出した基本方針三項目が掲載してあります。

一、三種の神器に則り皇道を体し給ふべきこと。

(三種の神器及び之と共に賜はりたる天壤無窮の神勅は我国成立の根柢にして国体の淵源また實に此に存す)

『古事記』、『日本書紀』に登場する三種の神器については、明日の長谷川三千子先生のご講義に譲り、ここでは「天壤無窮の神勅」にふれておきます。「天壤」とは天地、大自然のことです。その天壤が無窮とは「悠久の自然」と言ひ換へても良いでせう。高天原といふ神々の世界で、その中心的存在である天照大神は、お孫さんの瓊瓊杵尊を「葦原の千五百秋の瑞穂の国」(水辺に葦が繁って生物を育み、毎

先生重剛浦杉掛御所問御東宮



年秋になると豊かに稲が実る国、即ち日本の国土）へ下すに当たり、「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治せ」（この国は私の子孫たちが治める国だから、皇孫のあなたがおいきなさい）と命じられます。そして「宝祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮無かるべし」（『日本書紀・神代卷上』）と宣言なさったのです。

歴代の天皇方が次々と御位を継承する国に住む日本民族は、大自然と共に悠久の繁栄を享受するであらうと、皇孫が国を治める心構への象徴として、天照大神からこの神勅と三種の神器を授けられたのです。日本人の倫理感、神話を正しく学ぶことから始まるといふのが杉浦先生の信念でした。

班に戻ってこの「神勅」を繰り返し返し声に出して読んでみて下さい。内容は難しいかもしれないが、とてもいいリズムでせう。何かじわーっと伝はって来るとすれば、それこそが民族の記憶と呼べるものでせう。古典を素読してみると、祖先の経験を思ひ出すことが出来ます。自分が直接経験してゐなくても思ひ出せる。遠い祖先たちが自分の国の成り立ちを想像したところから「宝祚の隆えまさんこと、まさに天壤と窮無かるべし」といふ言葉が生まれたのです。これを読んで何かを感じるのは、祖先の思ひを皆さんが思ひ出してゐるといふことで

す。民族の成り立ちを知ることが、現代をより良く生きるために必須だと杉浦先生は言ひたかつたのでせう。

二、五条の御誓文を以て将来の標準と為し給ふべきこと。

(御一新の政を行はせられんとするに当り先づ大方針を立てて天地神明に誓はせられたるもの即ち五条の御誓文なり)

新しい時代、明治日本の出発点に当たり、若き明治天皇が天地の神々に誓はれた「五箇条の御誓文」こそが、今を生き将来に向かふ青年たちの拠り所であるべきだと杉浦先生は考へたのです。御誓文の内容については後でふれます。

三、教育勅語の御趣旨の貫徹を期し給ふべきこと。

(明治初年より我国は盛に西洋の文物を輸入して事事物物皆彼を学びたるが為め国民思想混乱し道德の帰趨を知らざるの様となれり。明治天皇深く之を憂慮し給ひ：教育勅語を下し給はりぬ。是れ即ち我國民に道德の大本を示されたるものにして爾來臣民徳教の標準となれり)

黒船来寇から明治維新を経て急速な近代化が始まります。周囲のアジア諸国のやうに植民地とならないためには、全速力で西洋に学び、追いつくことが国家的命題でした。しかし

そのために「国民思想混乱し」、道徳をどう教へたらよいか分からなくなったといふのです。例へばベルツといふドイツ人医者は、日本滞在中に克明な日記を付けてみました。明治九年のある日にかう書いてゐます。自分の所に教養ある日本人たちがやつて来ては口々に「いや、（これまでの日本は）何もかもすっかり野蛮なものでした」とか「われわれには歴史はありません。われわれの歴史は今からやつと始まるのです」と言つたと。にはかには信じられない内容です。

明治時代は自国の歴史を大事にし、日本人の誇りを持って生きてゐたと思ひがちですが、現実には相当困つた状況でした。このことを一番憂慮されたのは明治天皇です。明治十九年には東京帝国大学に行幸されますが、「設る所の学科を巡視するに、理科、化科、植物科、医科、法科等は益々其の進歩を見る可しと雖も、主本とする所の修身の学科に於ては曾て見る所無し」と、日本人の倫理、道徳は、東京帝大のどこを探しても教へられてゐなかつたが、こんなことで大丈夫かと側近に仰おつしやつてゐます。そのご心配がやがて『教育勅語』に結実したと言へませう。

明治二十三年に出された『教育勅語』——先ほど国訓と言ひましたが——を、すべての国民の規範とすることと、神話の精神と、「五箇条の御誓文」の三つを併せて、倫理教育の

大方針として授業は始まりました。

教育勅語の授業——「父母ニ孝ニ」・「朋友相信ジ」

さて、『教育勅語』を読んでみませう。杉浦先生の御進講草案の中からいくつかご紹介いたします。勅語の原文を掲げてみます。

「朕^{わが}惟^{ただ}フニ、我ガ皇祖皇宗、国ヲ肇^{はじ}ムルコト宏遠ニ……」と冒頭の三行には、日本の国の成り立ちが述べられてゐます。先程の神話に繋がるやうな内容で、「建国の初めから歴代の天皇様は道徳心を重んじる国作りを進められ、国民の方も国家と家庭のために心を合はせて尽くして来たのが我が日本の国柄である。教育の根本もここから発してゐる」とあります。そして四行目には「爾臣民、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信ジ」と国民一人ひとりととって身近な人との付き合ひ方、両親・兄弟・夫婦といふ家族同士や親しい友人とあるべき関係を、極めて簡潔にかうあつて欲しいと挙げてをられます。

杉浦先生は「父母ニ孝ニ」のところ、中江藤樹の親孝行を紹介してゐます。中江藤樹は、江戸時代の初め、近江—琵琶湖のほとり—で生まれました。父親は士^しを捨てて農民に

なりますが、幼少から非凡な才能を発揮する藤樹は、四国伊予（愛媛県）の大洲藩に仕へる祖父の許で武士として育てられます。その後父が早く亡くなり、故郷で一人寂しく暮す母を見かねた藤樹は大洲へ引き取らうとしますが、お母さんは「この齢になって知らない場所で住みたくない」と断ります。そこで今度は藩主に辞職を願ひ出ますが、藩主もその才を惜しみ許されません。遂に決心し、孝を実践出来なければ自分のやって来た学問は本物ではないと、家財を売って借金を返済し、残りは使用人たちに分け与へて、藩の役目を捨てて故郷に逃げ帰りました。

それからの中江藤樹は、僅か百銭の手持ち資金で細々と酒の小売をしながら、お母さんに孝養を尽くしました。その上で、自宅に農民や馬子たちを集めて人の道を説き聞かせ、近江聖人の名を後世に残したのです。杉浦先生は「父母ニ孝ニ」を、偉人伝と共に六名の生徒たちの心に植ゑ付けていきました。

○
次に「朋友相信ジ」については、古代ペルシャの親子の物語を引きながら理解を深めようと試みました。

十五歳になった息子が「お父さん、私も自立すべき時を迎えました、まだく経験不足

教育勅語

朕惟ふに、我が皇祖祖宗、國を肇むること宏遠に、徳を樹つること深厚なり。我が臣民、克く忠に克く孝に、億兆心を一にして、世世厥の美を濟せるは、此れ我が國体の精華にして、教育の淵源、亦実に此に存す。

爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし、学を修め、業を習ひ、以て智能を啓発し、徳器を成就し、進で公益を広め、世務を開き、常に國憲を重じ、國法に遵ひ、一旦緩急あれば、義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如きは、独り朕が忠良の臣民たるのみならず、又以て爾祖

です。一年間お暇をください。諸國を修業して参ります」と申し出ます。すると父は「それはいい事だ。将来お前が一本立ちするために最も大事なものは親友だぞ。本當に信じ合へる友を探して来い」と忠告して家から送り出しました。

丁度一年経って帰宅した息子に「お前、遅しくなつたな。どうだ、友人は出来たか」と父が尋ねると、「出来ましたとも。あちこちで沢山の友だちを作りました」と答へます。それを聞いた父は「お前、大丈夫か。そんなに簡単に出来たのか」と心配になり、「よし、それでは本當の友かどうかをこれで試さう」と、飼つてゐた豚を屠りその肉を大きな布

先の遺風を顕彰するに足らん。

斯の道は、実に我が皇祖皇宗の遺訓にして、
子孫臣民の俱に遵守すべき所、之を古今に通
じて謬らず、之を中外に施して悖らず。朕、
爾臣民と俱に拳拳服膺して咸其徳を一にせ
んことを庶幾ふ。

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

友」を訪ねますが、結局誰も相手にしてくれませんでした。

「本当の友はさう簡単には出来ないと分かったか。よし、それでは俺に付いて来い」と今度父が袋を担ぎ、息子を連れて父の親友の家に行きました。そして「俺の息子が殺人を犯して難儀してゐる」と告げました。すると親友は「おい、直ぐ家に入れ。人目に付かないやうに早く。そしてどうすればよいか一緒に考へよう」と応じたさうです。

袋に入れて息子に担がせました。袋からは血が滴り落ちてゐます。「お前が得たといふ親友の家に行つてかう言ひなさい。『実は俺の親父が人を殺して捕まりさうだ。しばらく匿つてくれ』と」

訪ねた友はこの袋を見ると、中には父親の殺した相手が入つてゐると思ひます。そして「何とか力になりたいが、うちも今、取り込み中なんだ。余所へ行つてくれ」と答へました。息子は次々と「親

ペルシヤは今のイランで、イスラム教圏です。「目には目を、歯には歯を」と、被^{こうむ}ったことは即座に同じ行為で報復する掟です。かつて私は西アフリカのナイジェリア北部で仕事をしてみました。ナイジェリアも北の方はイスラム教が支配的でしたから、日本人は決して運転してはいけないと言はれました。万一事故を起こしたら、即座に引っぱり出されて、同じやうに足を折られるからです。ペルシヤでも同様な習慣でしたので、お父さんの親友は「早く中に入れ、復讐を受けないやうに」と二人を匿^{かくま}ったのです。息子は父の付き合ひの深さに感心してしまひました。

「朋友相信ジ」を、杉浦先生はペルシヤの親子を例を取りながら、将来の天皇に教へたのです。なんと楽しい授業だったでせう。この物語にはオチがありまして、お父さんは親友に「やあ、済まなかった。実はかくくしかくで……」と事情を話したところ、親友は怒りもせず「良かった、そんなことだったのか。よし、ではその袋の中の豚肉を焼いて酒盛りしよ」と無事を喜んださうです。

帝王教育の実際

七年間の倫理の授業は「教育勅語」以外にも様々なテーマが取り上げられました。「和魂漢才」とか、「正義について」など修身的なものから、「富士山について」、「相撲の歴史」など楽しさうな話題もありました。昭和天皇のお相撲好きは、この授業に興味を持たれて高じたのかもしれない。

人物も色々登場しました。我が国古今の英雄偉人はもとより、外国人ではジョージ・ワシントン、ジャン・ジャック・ルソー、ナポレオンからモハメットまで多岐に亘りました。ヴイルヘルム二世といふプロシアの皇帝——この代で王政を廃止される悲劇の主人公——も俎上に乗りました。皇帝は若く聡明でしたが、先代からの重臣を次々に排除して耳の痛い諫言を遠ざけ、側近をイエスマンばかりで固めたことから、破滅へと突き進んで行きました。皇太子裕仁親王に、将来の反面教師として学んで頂きたいと願って授業をしたのでせう。

さて、勅語原文の後半は「恭儉己レヲ持シ、博愛衆ニ及ボシ：義勇公ニ奉ジ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」と国民各自の生きる姿勢、あるいは生き方の目標が具体的に綴られてゐます。

「徳器ヲ成就シ」では、二宮金次郎が少年時代に薪を背負って本を読みながら山道を往復した逸話から、逆境にあっても勉強を欠かさなかつた金次郎を、道徳的品性を磨き続けた好

例として紹介しました。

この後で杉浦先生は、特に皇太子殿下に向つて語りかけます。「二宮金次郎の偉人伝から、それぐの国民は多くを学ぶことが出来ませんが）殿下の御修学は、いかにせば、臣民が学を修め、業を習ひ、智能を啓発し、徳器を成就し得られるかにご着眼あらせられるを要す」。つまり五人のご学友は、国民の一人として『教育勅語』の一つ一つを身に付ける努力をすれば十分であるけれども、皇太子殿下はやがて天皇にお就きになるお立場として、国民一人一人が『教育勅語』をしつかり守れるやうなご治世を目ざして、ご自身のお心を豊かに養つて行かれることが大事ですよと述べて次のやうに続けます。

「これ殿下の天職なれば、徒いとづに枝葉に流るるごときこと、あらせ給ふべからず。「殿下の天職」といふ、まさに日本の国柄に關わる杉浦先生の言葉は、この後の班別の時間に皆さんで囁み締めて頂きたいとあります。

勅語本文の最後の一文「朕ちん、爾なんぢ臣民ト俱ともニ拳けん々けん服庸ふくようシテ咸みな其徳そのとくヲ一いつセンコトヲ庶こひねが幾ねがフ」は、先づ天皇ご自身が勅語の内容を率先垂範するので、どうか国民も心一つに合はせて実行してもらひたいと、明治天皇が直接国民に語りかけてをられるのです。杉浦先生は皇太子がご生涯を通じて、「御自身御実行あらせらるると同時に、いかにすれば臣民をしてこの道

に進ましむるを得べきか、の一事に御留意あらせられんことを望む」と、国民の先頭に立つてのご自身の実践と、国民を指導教化する天皇としてのお立場の両方を、若き皇太子に求め、「教育勅語」の十一回連続授業を締めくくったのです。

杉浦重剛先生の授業の雰囲気をお伝えしながら、「教育勅語」の内容にふれてみました。

終戦時の御製

大正十年（一九二二）の東宮御学問所ご卒業と同時に、裕仁親王殿下は半年間欧州ご視察。ご帰国後は摂政となられ、大正天皇の崩御と同時に皇位をお継ぎになりました。それから六十二年余の御在位中、常に国民と喜びも悲しみも共にしようとお努められました。

戦争と平和の様々な局面で、杉浦先生から受けた薫陶をご治世の随所に発揮なさいました。が、殊に敗戦といふ未曾有の危機に際して、国の運命をお一人で担はれたご事績を二つご紹介します。

一つは終戦時の御製、天皇のお詠みになった和歌三首を次に掲げます。

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らるといばら道すすみゆくともいくさとめけり

最近上映された「日本の一番長い日」によく描かれてゐる通り、ポツダム宣言の受諾を巡る御前会議は紛糾し、遂には天皇に御聖断をお願いするしか術がなくなりました。昭和二十年八月十四日に玉音放送を録音され、翌十五日の正午にそれは全国民の聞くところとなりましたが、昭和天皇はこれ以上国民を戦火にさらすわけにはいかないと、ご自身を投げ出さんばかりにして戦を止められたのです。その時のご心境をうちつけにお詠みになった右のお歌が国民の知るところとなったのは、戦後随分年月が経ってからです。侍従次長を務められた木下道雄さんが、ご公表のご意思の無かった天皇に特にお願ひして発表したのが真相です。木下さんはこの歌について「鳥にたとへては、甚だ恐縮であるが、猛鳥（鷹や鷲など）の襲撃に対し、雛まもる親鳥の決死の姿を、涙して想ふだけである」と感想を述べてをられま

す。「天壤とと共に窮り無き、日本の国がら」を守るために、国民の先頭に立って、「一旦緩

急アレバ義勇公ニ奉ジ」(一大事といふ時には義と勇とを奮ひ立たせて公のために全力を尽くす)を
実践された昭和天皇は、「殿下の天職」といふ杉浦先生の教へを間違ひなく身につけてをら
れたと拝されるのです。

新日本建設に関する詔書

いま一つは、敗戦の翌年、昭和二十一年の元旦に出された『年頭、国運振興の詔書(新日
本建設に関する詔書)』についてです。敗戦の無念さ、悲惨な食料事情、占領軍による価値観
変革等々で、力を落としてゐる国民を励まし、新年を期して国家再建に向かつて欲しいとの
願ひを込められた昭和天皇のメッセージです。

冒頭「茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ、明治天皇明治ノ初国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ
給ヘリ」と、絶望のどん底にある日本人に、「五箇条の御誓文」を思ひ出して自信を取り戻
せと呼びかけられます。

一、 広ク会議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ。

二、 上下心ヲ一ニシテ、盛ニ経綸ヲ行フベシ。

特に最初の二箇条に注目して下さい。先人たちがこれまで時代を越えて積み重ねた歴史と伝統を全否定して「日本に新たに民主主義を植ゑ付ける」と傍若無人なGHQの施策の前に、戦争に負けて誇りと矜持を失なひがちな日本人でしたが、明治の初めに出された御誓文には、日本流の民主主義が堂々と謳つてあるではないかと、昭和天皇は静かに覚醒を促されたのではないでせうか。

しかもこの「五箇条の御誓文」は、明らかに聖徳太子の「十七条憲法」の精神を反映してゐるのです。第十七条には「夫れ事は独り断ずべからず。必ず衆と与に論ふべし」さらに「衆と相弁ずれば、辞即ち理を得む。」とあります。公の場で議論すれば、皆が納得できる結論を得るといふ太子の教へは、まさに「万機公論ニ決スベシ」ではありませんか。

また憲法の第一条冒頭、有名な「和を以て貴しと為す」のあとには、「上和ぎ、下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ」と続きます。上に立つ人が和らぐ心を持ち、下の人々が上と睦び合ふといふ互ひの信頼関係を醸し出しながら議論すれば、自然と結論が導き出される。「何事か成らざらむ」は聖徳太子の強いご確信の表現で、御誓文第二の「上下心ヲ一ニシテ、盛ニ経綸ヲ行フベシ」そのものでせう。「経綸」、つまり国家の重要事項も、上下の信頼感にゆるぎない限り次々と実行に移されるといふので

せう。

明治の始めに示された「五箇条の御誓文」を「将来の標準」となさるやうにと、かつて杉浦重剛先生は皇太子裕仁親王に御進講しました。それを身につけてをられた昭和天皇は、敗戦に打ちひしがれる国民を「明治天皇のお心を思ひ出さう、そしてそのお心は一四〇〇年前に聖徳太子が示された道につながってゐるのだよ」と元気づけられたのでせう。

詔書では、五箇条を引用された後に「えいし勅旨公明正大、又何ヲカ加ヘン」とあります。これだけはつきり明治天皇が述べてをられるのだから、もうこれ以上一言も加へる必要はなからう。ここから出発すれば日本はきつと再建出来ると強い確信が示されたのです。残念ながら多くの国民は昭和天皇のこのメッセージをしっかりと受け止め得ず、俗に言ふ「天皇の間宣言」が現代まで定着してしまひました。しかしそんな薄っぺらなものではないことがお分かり頂けたかと思ひます。

より良く生きるために

さてここで、この時間の最初にふれた「合宿パンフレット」の呼びかけ文——「時代の

転換期に生きる私たちは、どう生きるべきか。日本はどうあるべきか」に立ち返ってみませう。参加者の皆さん方ひとり一人が、どう生きるべきか、より良く生きる意味をこの合宿中に班の友らとの語らひの中から、何かきっかけを一つでも掴んで頂きたいのです。

しかしその「きっかけ」は、自分自身が生きることには止まらず、ご先祖様がどう生きて来て、子孫のあなたに何を願ひ何を託さうとしてゐるかに思ひを馳せたり、私たちの祖国日本はどういふ歴史を紡いで来たのかを辿ることによって、きっと皆さんの生きるヒントを得られることでせう。縦に繋がってゐるご先祖様、或いは聖徳太子や二宮金次郎、そして明治から昭和にかけて活躍した偉人たちを思ひ出す作業に、同世代の仲間と一緒に取り組んで下さい。自分一人では味はへない世界を、これからの四日間の共同作業で実感して頂けたらと願ひます。

この合宿で私も、高校の同級生や大学時代に寮生活を共にした友人と本当に久しぶりに再会しました。その懐かしい友らは、会場の後ろで今私の話を聴いてくれています。学生時代の友と一生付き合へるとは実に有難いことです。そしてその友らは、私がベルシャの親子のやうに血まみれの布袋を背負ってゐたら「おい山口、困ってゐるのか、何とかするよ」と声をかけてくれると信じられる男ばかりなのです。

そんな友を、この合宿で皆さんが得る番ですよ。どうか「合宿が終はった後も付き合はうね、一緒に勉強しようね」と言ひ合へる、そんな友を一人でもいいから見つけてください。それが、この合宿を六十年続けてゐる主催者の願ひです。ご清聴に感謝します。

講義

三種の神器の謎を解かう！

埼玉大学名誉教授

長谷川 三千子



一、神話とは何か？

二、『古事記』と『日本書紀』

三、「記紀」をどう読むか？

四、『記』『紀』のテーマ

五、「記紀」神話全体のテーマの中で、

三種の神器はいかなる意味を持つか

六、三種の神器が持ちうる意味を考へてみよう

〈質疑応答〉

一・神話とは何か？

今日お話するテーマは「三種の神器の謎を解かう！」といふことですが、実は私自身は、「日本の神話」については、齢を取ってから学び始めた人間で、いはば晩学の初学者といつたところでは、それでもつて先生面をして、お講義をするといふのものをこがましい話ですが、初学者にはそれなりの利点があります。旺盛な好奇心と何だらう、何だらうといふ素朴な目を持ち続けているといふこと。これは初学者ならではの利点であつて、この点ではみなさんとも通じるところがあるのではないかと思ひます。

今回のこの演題も、私自身の初学者としての、素朴な疑問から出発してゐます。まづそこから始めることにいたしませう。

皆さんご承知のとほり、わが国の神話の大きな特色の一つは、神々の物語としての、文字通りの「神話」——この「神話」とは何かといふことについても、あとであらためてお話しするつもりです——と、わが国の人の世の歴史が一直線につながつてゐる、といふことです。そして、その最も重要な結節点となる「天孫降臨」を描いた『日本書紀』の一節のうち、おや、これはどういふことなのだらう、と素朴な疑問がうかんだ部分があつた。それ

が、私をとらへた「三種の神器の謎」だったのです。

三種の神器のなかでも、「宝の鏡」は或る意味でもつとも重要なものとされてゐて、今も伊勢神宮に御神体として祭られてゐますが、その「宝の鏡」を天照大御神がお子さまに授られた時のことを語つてゐるのが次の一節です。

是の時に、天照大神、手に宝鏡を持ちたまひて、天忍穗耳尊に授けて、祝きて曰く、
「吾が児、此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。与に床を同じくし殿を共にして、齋鏡とすべし」とのたまふ。

ここで私がひつかかつたのは、「与に床を同じくして殿を共にして」といふ言葉なんです。いま述べたとほり、この「宝の鏡」は、今も伊勢神宮に大切な宝として祭られてゐて、伊勢のご遷宮の時にもこのご神体は、厚くくるまれて、誰の目にも触れないやうにして、新しく作られたお社に大切に、しまはれるといふ秘めた「宝の鏡」です。

ところが、これが授けられた時、天照大御神は、これを「床を同じくして、殿を共にして」いはひのかがみとせよとおつしやる。といふのはつまり、地上に降り立たれるお子さん



の生活空間の中に、いつでも置いておけといふ、さういふ言葉です。たとへば、皆さんも朝、起きると、洗面所の鏡を見ながら、「ああ、寝ぐせが…」とか言ひながら鏡を見るわけですが、そんな感じで、この「宝の鏡」を何時も自分の生活空間に置くやうにといふ言葉なんです。これはどういふことなんだらう。なんで大切な鏡を無造作に自分の生活空間に置いておけといふお話になつてゐるのか。多分皆さんもさう言はれてみれば、これつて、ちよつと不思議かなと思はれるのではないでせうか。この初学者の素人くさい疑問が「謎」の出発点だつたのです。

ところで、世の中にはよく「○○の謎を解く」と称して、神聖なものを実につまらない話にしてしまふ場合が多々あります。

例へば、鏡との関連でいふと、テレビか、新聞記事かで見たと記憶があるのですが、古代の古い鏡を調べてみると、微妙に表面に凹凸あり、そこに光を当て、壁に照らしてみると、何か模様が浮び出て来る。つまり、古代の鏡はシャーマンの巫女さんが自分の威力を維持するための仕掛けトリックに使つたのだらうといふ話です。これも、ある意味では、古代の謎を解くことの一種と言へなくもないですね。でも、そんなふうにして謎を解いて、我々の、我が国の「神話」に対する理解は深まるか、といふと、むしろ、「神話」の世界を壊してゐる。さうすることをよつて謎を解けたと勘違ひをしてゐる。そんな例が世の中には多いのです。

本日の演題は、うつかりするとさうした落し穴にはまる危険をひめてゐるわけですが、本当に神話の謎を解くことは、神話を壊すことであつてはならない。

あくまでも、「神話」には「神話」としての間ひかけをすることが必要です。そのためには、まづそもそも「神話」とは、どういふものなのか。それについてきちんと考へることから始めなければいけないだらうと思ひます。

「神話」と「歴史」

わが国の「神話」について、一番しつかりと語つてゐる二つの文献、『古事記』と『日本書紀』ですが、これはどちらにも世界には珍しい特色があります。「神話」の話と「現実の

歴史」の話とがひとつつながりにして語られてゐます。そのどちらも、後半の、我が国の代々の天皇の話の部分といふのは、様々な歴史検証から、本当にあつた歴史の記録として間違ひないといふことが確かめられてゐます。

しかし、やはり「神話」と「歴史」といふものは違ひます。どこが違ふかといふと、「歴史」といふものは必ず実証されなければいけない。本来、「歴史」といふものは近い歴史も、古い歴史も、できるかぎり、現実の物に即して、或いは現実に残されてゐる文献に即して、確かめることができないといけないといふ、これが歴史といふものの考へ方の基本となつてゐます。

しかし、「神話」については、さういふことをするのは不可能です。例へば、日本の神話の一番の主役になつてゐるのが、天照大御神ですが、では天照大御神とはどんな人だつたのか？ 天照大御神といふ神様の遺骨がどこにあるのか？ そのやうな探求の仕方そのものが、とんちんかんといふことになります。「神話」といふものは、「歴史」とは違ふ。実証され、物によつて証明されるものではない。そこが一つ大きい違ひなのです。

「神話」と「小説」

それでは、「神話」とは「小説」のやうなものなのでせうか。我が国の古典の中には、

『源氏物語』といふ、時代の古さから言つても、小説としての完成度から見ても、世界に誇る文学作品がありますが、この『源氏物語』の主人公の光源氏が、実際にどこでどう生活してゐたのか、物証によつて確かめる、といふことはできません。また、そのモデルとなつた人物がゐるかどうかといつたことも、『源氏物語』を読む上では全く本質的ではありません。我々が『源氏物語』から汲み取るべきことは、その中に、様々に描かれてゐる魅力的なイメージ、例へば、光源氏のお母さんである桐壺の実家に、宮中の女御が訪ねていく。その時の、秋のものさびしい、「もののはれ」の情景。そんな様々の情況が刻みこまれ、この物語り全体から何を汲み取るかといふことは、様々で文学者、文芸評論家によつて意見は分れますが、長い時の流れと、そして人間の運命のはかなさがさういつたものがしみじみと感じられます。そんな全体として、浮き上がる生き生きとした情景、それらを受け取ることが小説を読むといふことになるわけです。

これからご紹介する『古事記』、『日本書紀』に描かれる日本の「神話」を我々がどんな風に受け取るのか、その受け取り方は小説を読む時に非常に似てゐます。ただし、「神話」と「小説」とでは、決定的に違つてゐるところがあります。

それは何かといふと、小説は、ある一人の作者がゐて、その一人の作者が創作する。と

ところが「神話」は作者がゐない。言つてみれば民族全体が作者と言つてもいい。そして、この場面をどうしようかと一所懸命、一人の人間が想を練つてこしらへ上げるのではなくて、何時、誰が語り始めたともわからない形で、遠い昔から伝承されて来て、そしてそれが民族の口から口へと伝へられてゐるうちに、その民族の心そのものになつてゐる。それが「神話」だと言へます。さういふ点ではどんなすばらしい「小説」も「神話」にはかなはない。そこが大きな相違です。

「神話」と「昔話、伝説」

遠い昔からの口伝へといふ意味では、いはゆる、各地方に伝へられてゐる「昔話」や「伝説」は、これも神話に非常に似てゐます。何時、誰れがそれを思ひ付いたか、作者はわからない。でも、その物語といふのは、それが伝はつてゐる地方の人間にとつては、非常に親しみ深い大切な物語として記憶に刻まれてゐる。

しかし、世界がどのやうにして出来上がったのか、世界の秩序はどういふふうに出て来たのか、さういふ大きい「物語」について語つてはゐない。ほほゑましい、またある時はとても恐ろしい様々なエピソードを伝へるものが「昔話」、「伝説」と言はれるものです。そこが「神話」とは区別されます。

「神話」と「聖典」「経典」

それでは、さういふ世界の始まりとか、世界の秩序といふものについて、語つてゐる古くからの伝承、あるいは、まさに「神話」と呼ばれてゐる「神々についての物語」は、すべて「神話」なのか？

例へば、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三つの元となつてゐると言はれてゐる『旧約聖書』、これも様々な古い言ひ伝へが集められて出来上がつてゐます。これを「神話」と呼ぶ人もをります。

ただし、これには我が国の「神話」と大きく違ふ所がある。何が違ふかと言ひますと、例へば、「創世記」といふ旧約聖書の冒頭の一章。これは、ユダヤ教、キリスト教の信者にとつては、動かしてはならない「教義」なんです。

「創世記」の第一章には、神が、六日間で宇宙を創造をしたといふ物語が語られてゐます。まづ、「光あれ」と言ふと、光が生じ、「光」と「闇」の区別ができた。ここからスタートして、魚や鳥や陸上の生物が作られ、六日目の最後に、そのすべてを統合する人間が作られたと語られてゐる。

かういふ「聖書」を持つ人間にとつて、すべては単細胞動物から始まつて進化してきた

と言ふやうな現在の自然科学による説明は、すべて、けしからぬことなるのです。現に、つい最近まで、アメリカでは、公立の学校で進化論を教へてはいけないといふ州がいくつかかりました。

これはもうさういふ「創世記」を「神話」として楽しむといふか、「神話」として味はふのではない。彼らにとつて、これには信じて、疑つてはならないといふ、教義の書なんですね。

かうしたものと比べると、我々の「日本の神話」は、明らかに違つてゐる。我々にとつて確かに、これからお話しする『古事記』、『日本書紀』に語られてゐる「神話」は大切な物語です。我が国の文化の中核にある言ひ伝へです。ただし、それは信じて一筋も違へてはならないといふやうに、我々を縛つてゐるものではない。はなはだ自由に、我々が『源氏物語』を楽しむのと同じやうな仕方で接することが可能な物語です。「日本の神話」は心の糧になるものとして存在してゐます。決して教義ではない、香りゆたかなもの——これが「日本の神話」だと言つていいかと思ひます。

「民族の文化の原核」

今、神話とは何かとお話しするのに、これではない、これではないといふ所からお話し

ましたが、これを積極的な形で語つてゐるのが、『はじめて読む「日本の神話」』（展転社）といふ高森明勅先生のご本の中にある次の言葉です。

「神話は民族の原初的な想像力が生み出した、世界の意味を解説するための物語」。

「神話はそれぞれの文化の原核をおのずから映し出すもの」。

私が晩学の初学者として、因幡の白兔の話とか、黄泉の国を訪ねた伊邪那岐神が恐ろしい光景を見て命からがら逃げ帰つた話とかを断片的には知つてゐましたが、「日本の神話」としてしつかりと向き合つて読むことがなかつたと、反省して、初めて読んだのが、この『はじめて読む「日本の神話」』だつたのです。

これからお話していくことの骨格は、すべてこの高森先生のご本を私なりに消化した所から出て来てゐます。高森先生はこの本のはじめに、われわれが神話にあひ対するときの大切な心構へをいくつか示されてゐるのですが、なかでも大切なのが「神話の『ふところ』に飛び込む」といふ姿勢だと思ひます。これは決してただ盲目的信じ従ふといふことではない。我々自身の心の深いところで響き合ふものに耳をかたむけつつ神話を読む、神話と対話する、といふことです。そのやうにしてわれわれの神話と生き生きとした関係を結ぶとき、『古事記』も『日本書紀』も、博物館のケースに収まつた死物ではなく、現代のわれわれに直結し

た物語になる——高森先生の語るかうした姿勢は、まさに今日、私が皆さんと共有したいと思ふ姿勢なのです。

「口伝へ」

ここでもう一度より道をして、そもそも現代のわれわれに、わが国の神話がこれほど正確に、生き生きとした姿を保つて伝へられてゐることの稀有な幸運といふことを、しつかりと見つめておきたいと思ひます。

いまお話してきた「神話」といふものは、どんな民族もそれぞれに持つてゐる。神話を持たない民族はない、と言つても過言ではありません。しかし、現代において、われわれのやうに自分たちの神話を持つてゐると言へる民族はきはめて僅かなのです。何故か？ それは神話が「口伝くでん」によつて伝へられるものだからなのです。「口伝へ」と言ひますといふ加減な物だといふのが現代人の感覚ですが、古代の人々にとつての「口伝へ」はさういふものでなかつた。これは全身全霊をこめて語られ、全身全霊をこめて聞き取られ、そして親から子へ、子から孫へと伝へられていく。さういふ形で、すべての民族の間で伝へられて行つたものであり、そこに神話の生命があつた。

ところが、この「口伝へ」は、その言語が死に絶えてしまふと、その言語で伝へられて

来た口承の物語そのものは消えてしまひます。また、たとへ言語は生き残つてゐても、口伝を支へてきた生活様式が失はれてしまふと、口伝はもはや不可能です。

二十世紀の前半から、いはゆる文化人類学、民族学が非常に盛んになりました。どうして、盛んになつたかと言ひますと、その時期、非常に多くの民族の文化が死に絶えつつあつたのです。言語の数も大変なスピードで減つて、今も減つて行つてゐます。そして、それと一緒にさういふ貴重な数々の民族の伝承も失はれていく。その失はれて行く伝承を、なんとかして記録しようといふことで、おもに欧米の学者達を中心となつて、世界各地で神話や伝説を採集して、記録に残していくといふことが行はれました。しかし、なんとやつても、外国人が、自らの母国語ではない言語で採集した物語といふのは、その民族自身が伝へて来た、香り豊かな神話とは、全く違つたものになつてしまつてゐる。まさに、博物館のケースに入つた死物としての神話でしかなくなつてゐるのです。

ところが、わが国においては、わが国の人間自身が自らの手で書き残すといふ形で神話を保存することが出来てゐる。これは非常に貴重なことなのです。『古事記』についての大部の研究書『古事記伝』を残した江戸時代の国学者、本居宣長は、わが国の先人が、今から千三百年前、「口伝へ」の物語を文字にして残すといふ大変な事業をした、その苦勞といふ

ものを絶えず思ひやるといふ仕方、『古事記』を研究してゐます。皆さんもご存知のとほり、かつてわが国には（世界中に大多数の民族におけると同様）文字といふものがなかつた。わが国の神話は、文字を持たない時代の口伝として伝はつてきたものです。そこに中国大陸から漢字といふ異国の文字が入つてきた。その異国の文字でもつて、わが国の口伝への神話を、その文学的な香りをとどめたま、そつくりと記録しえた——これが『古事記』なのです。このことが世界の歴史を見渡しても、いかに稀有な出来事であつたかといふことは、心に留めるべきことだと思ひます。

二、『古事記』と『日本書紀』

ここで、『古事記』と『日本書紀』がそれぞれが、どのやうなものなのかについて、おほまかな紹介をしたいと思ひます。

『古事記』も『日本書紀』も、ほほ今から千三百年前に出来あがつた書物であるといふ点では共通してゐます。様々ないくつかの小さい物語の相違はありますが、大筋はどちらも同じ話を収めてゐますし、書かれた時期は非常に近い。『古事記』は、西暦七百十二年に、

『日本書紀』は西暦七百二十年に、編纂されてゐます。

このやうに、時を近くして編纂されてゐますので、昔は『古事記』といふのは書かれてみたけれども、あまり、きちんとしてゐないので、あらためて『日本書紀』が正式のものとして編まれたのだと解釈され、いはば「公式日本神話歴史書」として尊ばれて来ました。これに対して、さうではない、『古事記』といふのはそれ自体として、完成された立派なものだと主張して、それを細かく一語一句に至るまで考証を重ねて、解説したのが本居宣長だったのです。

言ふならば、『古事記』も『日本書紀』も、どちらも立派に日本の神話・歴史を伝へてゐる書物なのですが、たしかに両者の個性の違いといふものはあります。

まづ、文体を見てみますと、今述べたとほり、どちらも漢字といふ異国の文字を用ゐながら、わが国の日本語による伝承を記録してゐる。その点は同じなのですが、『日本書紀』が（和歌の部分を除いて）ほぼ正統的な漢文で書かれてゐるのに対して、『古事記』の方は、きはめて変則的な漢文で書かれてゐます。「漢文」の形はとつてゐても、中国語ではなく完全に日本語の記述であることがはつきりしてゐる。さらに、和歌だけでなく、文章の要所所で、漢字の音だけを用ゐる、いはゆる万葉仮名の表記法を使つてゐます。たとへば、最初

の方の「海月なす漂へる」時を「久羅下那州多陀用弊流」之時、と書いたり、伊邪那岐神、伊邪那美神が、おのころ島をつくるのに、「こをろこをろに」かき回したといふ時の表記を「許々袁々呂々邇」と書いたりしてゐる。いはば漢文形式と万葉仮名形式がごちやませになつてゐるのです。

これを書いた太安萬侶は、その苦勞をこんな言ひ方で語つてゐます——「訓によりて述べたるは、詞心に逮ばず、全く音をもちて連ねたるは、事の趣更に長し」。つまり、漢文だけで書いてしまふと、日本語としての香りが伝へられなくなつてしまふ。かと言つて万葉仮名だけで書いたならば、一目見ただけでは何のことやら解らない、ものすごい長さの文章になつてしまふ。だから適当に両者を混ぜたのだ、といふのです。実はこれは、現在われわれが使つてゐる「漢字かな混り」といふ日本語表記の原型をなしてゐるとも言へるのですが、かうした苦勞をして変則的な表記をあみ出した、その根本には、できるかぎり生き生きした形でわが国の口伝の伝承を残したい、といふ強い意志があつたと思ひます。

そして、このやうな苦勞を取へてするだけあつて、『古事記』はその全体が、一つの物語として興味深く読める。ぐいぐいと人をひきつける力をもつてゐます。いろいろ現代語訳が出てゐて、なかにはくだけ過ぎの感があるやうなものもありますが、そのくらゐ、『古事

「記」は文学としての魅力をもつてゐる、といふことでもあるのです。ですから、初めて「日本神話」を読む人には、まづ『古事記』がおすすぬめ、と言へるでせう。

そこから見ると、『日本書紀』といふのは正直に言つて、読みにくいところがある。実は私自身、そんな風に思ひ続けて来たのです。例へば、「国譲り」や「天孫降臨」の物語りにしても、なるほど、かういふふう「国譲り」があつて、「天孫降臨」があつてと思ふと、また、もう一回、同じ話が繰り返される。ですから小説として読もうとすると、「明石の巻」が終つてゐるのに、また明石の巻きかよ」といふそんな感じになつてしまふのです。

しかし、ある時、ふと、『日本書紀』といふのは、さうか、高森先生がおつしやるやうに、公の形で、天皇のご命令によつて、正しい記録、文献資料をしっかりと残さなければいけない。さういふ問題意識に基づいて編纂されたものなんだ、と気がついて見ると、これはとつても良心的な書き方なんです。つまり、これ自体、実は一つの資料集といふ意味を持つてゐる。

いまでも述べたとほり、こちらの方は中国語としても読みうる、正統派の漢文で書かれてゐます。この『日本書紀』といふこの題名も（当時つけられた題名がその通りだつたと研究者の調べで分つてゐるのですが）、明らかに外国を意識してゐる。今も、我が国は、外国に向けて日本発信をしなければ、いけないと言つてゐるところなのですが、この『日本書紀』は、ま

さに元祖、日本発信の書なんです。しかも、日本発信するに当つて、非常に正確に、かき集められるだけの文献をかき集めて、こんな文献もある、あんな文献もある、それを正確に記録してゐるといふものなんです。

一方、歴史家によつては、この『古事記』も『日本書紀』も、西暦八世紀における日本国家統一といふ、政治的課題に当つて、皇室の威力を増すために、人々を説得するために書かれた、言はば、政治的プロパガンダであるといふ研究者もゐます。もちろん、さういふ政治的意図は当然有つたに違ひありません。しかし、だからと言つて、伝へられたものを、ねじ曲げるやうなことは『古事記』を見ても、『日本書紀』を見てもされてゐない。どちらも非常に真剣に、片方では文学的な香りをそのまま伝へようといふ、さういふ真剣さがあり、もう片方では、残つてゐる文献をできるかぎり正確に、集めて、残して置かうといふ真剣さがあつて、どちらも、正面から我が国の口承、神話を保存しようといふ、真率な意図によつて編纂されてゐる。政治的意図を強調する研究こそ、政治的意図の産物だと思ひます。

三、「記紀」をどう読むか？

さて、このやうにして私たちの先人が残してくれた貴重な遺産である、日本神話を、我々ほどのやうに受け取つていつたらいいのか？

前述の高森先生のご本にもしろいことが書かれてゐます。〔古事記〕の「記」、〔日本書紀〕の「紀」、その両方併せて、「記紀」と言ひますが、記紀をどう読むかについての大切な心得の一つは「それぞれの部分は有機的につながつて、体系を形づくり、全体として意味を持つてい」といふことだといふ。

有機的といふ言葉は、他の場合でもやたらに使はれる言葉ですが、ここでは、ほんとうに生物を指すその有機的と同じ意味で使はれてゐます。例へば、大きな銀杏の樹の葉つば一枚を取つても、銀杏は確かに銀杏なんですね。あるいは銀杏の葉をちよんぎつても、銀杏のその葉つばの細かい断片は、やつぱり銀杏の細胞の特色を表してゐる。つまり〔古事記〕でも〔日本書紀〕でも、どの部分にも、全体を貫くテーマが響きわたつてゐる。ここが非常に特色あるところだ、といふことなんです。

四、〔記〕〔紀〕のテーマ

では、どういふことなのか、具体的な例として、「別天つ神」、「神世七代」といふ『古事記』の冒頭の部分をあげてみます。

天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主。次に高御産巢日神。

次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。

次に国稚く浮きし脂の如くして、海月なす漂へる時、葦牙の如く萌え騰る物によりて

成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。この二柱の神もまた独

神と成りまして、身を隠したまひき。

上の件の五柱の神は、別天神。

次に成れる神の名は、国之常立神。次に豊雲野神。この二柱の神もまた、独神と成り

まして、身を隠したまひき。

次に成れる神の名は、宇比地邇神、次に妹須比智邇神。次に角杵神、次に妹活杵神。

次に意富斗能地神、次に妹大斗乃弁神。次に於母陀流神、次に妹阿夜訶志古泥神。次

に伊邪那岐神。次に妹伊邪那美神。

この出発点に、いつたいどんなふうにもこの神話全体を貫くものがあるのか。一読しただけでは、なんか、やたら神さまがいつぱい出て来て、出て来たかと思ふと「身を隠したまひき」、「身を隠したまひき」で、何だかよく分らない——これは、私が最初に、『古事記』の冒頭を読んだ時の印象なのですが、おそらくさう感じる方も多いこととせう。ところが、これから紹介するやうに、ここには、非常に深い、ほとんど形而上学的と言つていい、我が国の神話の世界観があるのです。まづはそこからお話いたしませう。

いまの冒頭の一節について、丸山真男さんが「歴史意識の古層」といふ論文のなかで、たいへん面白いことを指摘してゐます（この人はいはゆる戦後左翼知識人の親玉に祭り上げられてゐた人ですが、トンチンカンな軍国主義批判などせず、純粹に学問的なことをしてゐるときは、なかなか頭の冴えたところを見せる人でもあります。『忠誠と反逆』に収められたこの論文もその一つです）。丸山さんはまづ、この一節で何度も何度もくり返される「次々」と「成れる」といふ二つの言葉に注目します。そして、ここに、日本の神々とユダヤ・キリスト教の神——「創世記」の神——との根本的な相違があると見るのです。

たしかに、「創世記」の神は「成る」神ではありえませぬ。宇宙創造の以前から存在してゐて、宇宙のすべての存在物を作り出す神。自らは永遠の存在として「在りつづける」神。

これが「創世記」の神であつて、さういふ神を中心に置くことで西洋文明は形成されてきたのです。

それに対して、わが国の神々はまつたく異つた在り方を見せてゐます。たとへば最初に登場する「天之御中主神」は、名前だけを見るといかにも偉さうで、「創世記」の神に近いもののやうにも思はれます。でもこの神も「成れる」神であつて、出現してすぐ身を隠してしまふ。永遠存在としての神などではないのです。

では、わが国の神々はいつたいどんな神々なのか？ いまさらつと次々に連なる神々の名を見てみますと、これらの名が、まさに「成る」こと——生成——のはたらきそのものを表してゐることがわかります。たとへば二番目と三番目に登場する「高御産巢日神」「神産巢日神」。どちらも「産巢」といふ言葉が中心となつてゐる。「むす」とは、古語で「生成する」といふ意味の語です（いまでも「苔むす岩」と言つたりする、その「むす」です）。

さらに、この「産巢」の力をそのまま、具体的なイメージをもつて表現してゐるのが、次の「宇摩志阿斯訶備比古遲神」です。つまり「葦牙の萌え騰る」さまをそのまま、名前にしてゐるわけなのですが、泥沼の中から葦の芽が牙のやうにすつくと萌え上がる、その見事さを体現した殿方の神——これが「ウマシアシカビヒコチノカミ」なのです。

次の「天之常立神」あめのとこたちのかみ「国之常立神」くにのとこたちのかみは、どちらも、生成を支へる「とこ」(底・根元)を表

はし、「豊雲野神」とよぐもののかみはものが集まり(「くも」増大する(「とよ」ことを表はす。「角杵神」つのかまは

「つぬ」(何かが角のやうに生え出す)のことを表はす、といった具合に、生成のはたらきの詳細を、神の名に託して、ていねいに語つてゆくのです。

そして「於母陀流神」おもだるのかみに至つて(顔のある神)が出現します。「おもだる」とは「面足る」といふことです。そしてその出現を驚き喜ぶ声が「妹阿夜訶志古泥神」いもあやかしこねのかみです。「まあ、なんとすばらしいこと!」の感嘆がそのまゝ、神の名になつてゐる。

かうした長い生成のプロセスを経て、やうやく、われわれにもおなじみの伊邪那岐神、いざなぎのかみ妹伊邪那美神が登場するのです。

このやうにしてふり返つてみると、わが国の神話は、まづ(生成への讚嘆)に始つてゐるといふことが言へるでせう。あの「創世記」の神を抱へ込んでしまつた西洋の哲学史は、ヘーゲルの哲学にも見られるとほり、「生成」を正しくとらへるのに四苦八苦することになるのですが、わが国の神話は、まづ最初から「生成」へと真直ぐに視線を向けてゐる。

最初の神々が「独神」ひとりのかみとして身を隠してゆくのに対して、「宇比地邇神、妹須比智邇神」うひちののかみ、いもすひちののかみ(これは砂や泥のさまを表す神名です)以降の神々が身を隠さないのも面白いですね。言ふなら

ば、有性生殖が始まつてはじめて生物はいま見るやうな多様な種への道を歩み出した。この地球生物の歴史を、見事に描き出してゐます。ちなみに、我が国の神話にとつては、生物学の進化論も全くオーケーですね（笑）。

このやうに、生成の歩みの中に登場してきたのが日本の神々であるといふことは、このあとの物語の展開にも大きな影響を与へてゐます。（これも高森先生のご本から学んだことなのですが）日本の神話の神々は、天照大御神にしても、速須佐之男命すさのせのみことにしても、決して最初から完成してゐる神ではない。出来事の展開のなかで、段々に成長し、成熟してゆく神である——これが重要な特色です。そして、これはまさに「成る」神ならではの特色だと言ふことができるでせう。

それともう一つ、この最初の一節には、日本の神話を読みとくうへで、忘れてはならない重要なテーマが示されてゐます。それは、あの冒頭の一言「天地」です。

実は、メソポタミア神話でも「創世記」でも、宇宙の創成を語る神話はほとんどすべて「天地」についての話として始まつてゐる。ただ、日本の神話においては「天地」といふ構造が、単なる与へられた構造、あるいは敵対的構造（「創世記」では明らかに天が地を敵視し、その敵視の上に物語が展開してゐます）ではなく、（いかにして天と地を結ぶか）といふ課題と

してあらはれてゐるのです。ですから、登場する神々のうちにも、すでに「天」の系列の神々と「地」の系列の神々——「国」の名が付いてゐるのがその神々です——がある。そして、当然のことながらそこには様々な葛藤が生じるのですが、それは決して単なる決裂、あるいは単なる征服とはならない。常に、天と地の調和といふことが目指されてゐる。これも日本の神話の大きな特徴です。

かうしたことを念頭におきつつ、「天孫降臨」に至る日本の神話の道筋を辿つてみることにいたしませう。

五、「記紀」神話全体のテーマの中で、三種の神器はいかなる意味を持つか

「伊邪那岐神」と「伊邪那美神」の物語

次々に、成りませる神のその一番最後に登場した「伊邪那岐神」と「伊邪那美神」ですが、この二柱の神々が、日本の国土を生むといふ大切な仕事を預かります。その国を生むためには、まづ産むための場所をつくる必要がある。天上から矛はこで海水をこをろとおのこかきまぜて、その先から垂れ落ちた塩が堆積した場所が淤能碁呂嶋おのころしまです。そこに二神が降り

たつて、次々と国を産むといふ物語が始まります。

これを、よその神話との比較をしてみますと、日本の神々といふのはとても勤勉な神々なんですね。例へば、メソポタミアの神々も人間を作るのですが、なんで人間を作るかといふと、建物を建てたり、農耕したりといろんな仕事するのが、面倒臭いので、さうだ、人間を作つて労働させようと云つて、神々が人間を作つたといふ。そんな神話と比べると、日本の神々の労働をいとはぬ勤勉さが目立ちますね。

さてそこで、次々に大八洲おほやしまを産むはずなんですが、最初に生んだ子供は「水蛭子ひるこ」で、どうも鳥の体をなしてゐない。二番目の子供もどうもまくな。

そこで天の神様に相談すると、「あ、これは女神の方から先に声をかけたのがよくなかつた」といふ診断が下ります。たしかに淤能碁呂島ではじめて「みとのまぐはひ」をするとき、最初に「あなにやし、えをとこを」と声をかけたのは伊邪那美命でした。「そこが間違つてゐたらしい。やり直してごらん」とのご神託を受けて、もう一回、今度は伊邪那岐神が、先に声をかける形をとつたところ、今度はきちんとした大八洲の島々が生れます。

そして、次々に、いろいろな子供を生んでゆくなかで、不幸な出来事が起ります。船の神様、食物の神様、と人間生活にかかはりの深い神々を生んだ次に、火の神である「火之

「迦具土神」を生むのですが、この神を産むときに（当然なことながら）産道に大火傷を負つて、それがもとで伊邪那美神は亡くなつてしまふ。

ここには、ギリシャ神話とも共通した、（神の犠牲によつて人間世界に火がもたらされる）といふ原型が見られますね。ギリシャ神話では、ゼウスの禁令にそむいてプロメテウスが人間に火を与へたので、毎日ワシに肝臓を喰はれるといふ刑を受けますが、ギリシヤの神々は不死身なのでそれでも死なない。しかし日本の神々は（「神避る」とか「神あがる」と表現しますが）、人間と同様に死ぬことのある神々なのです。

この出来事にあつた伊邪那岐神のふるまひもまたきはめて「人間的」です。亡くなつた妻の頭の方に腹ばひ、足の方に腹ばつて涙にくれます。そして、この子のせいで愛しい妻が死んでしまつた、と言つて迦具土神の首を斬つてしまふのです。さらには、死んだ妻のことを思ひ切れず、黄泉国へと追ひ下つてゆきます。

しかし、そこで伊邪那岐命が大失策をしてしまひます。伊邪那美命が「地上の（生の）国」に戻れるかどうか、黄泉神（死の国の神）に聞いてみるから、「決した中を覗いてはなりません。私を見てはだめですよ」と言つたにも関わらず、やつぱりどうしても我が愛しい女神を見たいと（かういふところもとても「人間的」ですね）、櫛に火を灯して、ちらつと見ると、

蛆うじがたかつて大変な醜い姿になつてゐる。そこで「こんな姿になつても愛しい妻だよ」と言へればよかつたのですが、「きやー」と、逃げ出してしまふ。さうすると、「見くたくな」といふわけで、まづ黄泉醜女よもつしこめといふ名前も恐ろしい醜女軍団が、伊邪那岐命を追ひかける。伊邪那岐命は頭の被りかぶもの取つて捨てると、葡萄の実となる。醜女軍団がそれを食べてゐる間に、時を稼いで逃げる。雷神とその軍団が追ひかけてくるのを、また逃げる。最後には、伊邪那美命自身を追ひかけて来る。やうやく、黄泉比良坂よもつひらさかといふ黄泉の国と地上の境めまで来て、「千引ちびきの石いは」を間に立てて塞ぐことができた。伊邪那美命はその石のむかうから、「あなたがこんなことをしたから、一日千人、あなたの国の民を絞くり殺す」と言ふ。これに対して、伊邪那岐命は「さうするなら、毎日、千五百の産屋うぶやを建てると応答する。この結果、毎日千人が死んで、毎日千五百人が生れることになつた、といふのです。

『古事記』の中でも有名な物語の一つ——まるでそのまゝ、アニメにもなりさうな物語ですが、ここにも日本の神話の基本的な特色があらはれ出てゐると言へます。さきほど見たとおり、日本の神話で「生成」といふことを柱としてゐます。しかし生れることと死ぬこととは表裏一体となつてゐる。生を語つて死を語らないことはできません。ここでは「死」が大きなテーマとなつてゐます。けれども「死」は「生」によつて克服される。すなはち、死ぬ

よりもつと沢山の人間が生れる、といふ形で「死」が克服されるのです。少子化社会のわれわれがかへりみるべき教へです。

身褻

「死」の領域である黄泉の国から帰つてきた伊邪那岐神は、「生」の領域である地上の世界に戻るために、我が身を清めなければなりません。この「穢れ」と「褻ぎ」といふ発想もわが国の神話の特色の一つです。悪しきものにかかはつてしまつたとき、それを洗ひ、祓ひ、清めることができる——この感覚は現代の我々にも引き継がれてゐると思ひます。これがあるからこそ、我々は、善と悪の領域を絶対的に区分し、悪を徹底的に殲滅すべしとするやうな原理主義的思考に陥らずにすむのだとも言へる。その「身褻」の原点がここにあります。

伊邪那岐命は、まづ、黄泉国を訪れた時の持ち物をすべて投げ棄て、川の中瀬に入り、ていねいに身を滌ぎます。その時、左の目を洗つた際に生れ出たのが、天照大御神、右の目を洗つた時に現れたのが月読命、鼻を洗つた時に出てきたのが、須佐之男命。これら三神の誕生は、いはゆる「三貴子」の誕生と呼ばれてゐます。中でも天照大御神が誕生した時の様子を、『古事記』はかう伝へてゐます——「伊邪那岐命、大く歆喜よろこびて詔のりたまひしく、

『吾は子を生み生みて、生みの終はてに三はしらの貴き子を得つ。』とのりたまひて、すなはち御頸珠みくびたまの玉の緒せもゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまひしく、『汝命いづみことは、高天の原を知らせ。』と事依さして賜ひき。そして、月読命には夜の国を、須佐之男命には海原を治めるやうに、と命じるのです。

ここから解るのは、まづ、天照大御神が三貴子の中でも最も重要な位置を与へられてゐること。そして、地上から天へと派遣されるあたつて、いはばその印として、伊邪那岐神自身みづみの玉の首かざりを与へられたある、といふことです。後に、天照大御神自身が子孫を地上に派遣するときに、三種の神器の一つが「玉」であることの、いはば伏線をなしてゐると言つてよいでせう。

「須佐之男命」の物語

そして、ここから、今度は須佐之男命の物語になります。先ほども、日本の神々は最初から完璧な存在ではないのが特色だと申しましたが、この須佐之男命などはまさにその典型です。何しろお母さんがあませんから、お母さんが恋しいとわんわん泣きわめいて、おかげで青山もすべて枯れてしまった。そんな状態が、鬚ひげが胸の下まで伸びるまでと言ひますから、二十歳過ぎる頃まで続いたといふことになります。そして、お父さんの伊邪那岐命か

ら、もう、そんなんじやだめだと言はれてて勘当されてしまひます。

それで、まづお姉さんに挨拶をしてから、お母さんのゐる国に行かうと、天上に上つていくのですが、神様ですからさまざまいい音を轟かせて天にやつて来る。天照大御神は驚いて、これは乱暴をしにやつて来たに違ひないと、髪を轟かして（男の格好をして）、槍をもち刀をもち完全武装をして、どんと足を踏みならして、「おまえ何をしに来た」といふ大音声の呼ばはりで、須佐之男命を迎へます。

須佐之男命は、「いや私は汚い心があるわけではないんです。ただ母のところに行くまへに挨拶しに来たんです」と言ふのですが、では、汚い心があるかどうかを試してみようといふことになつて、それぞれ持ち物を交換し、それを歯でかみ砕いて、ぷうつと吹き出す。そこに女神ができるか、それとも男神ができるか、これで判定しようといふ、さういふ奇妙な判定をします。誓約といふのですが、実はこれがトラブルの元なんです。

大体はさうした判定をする時には、かうだつたら白、さうでなかつたら黒とルールを決めておかなければならないのですが、『日本書紀』のどの伝承を見ても、ルールが曖昧なんですね。須佐之男命の持ち物から、女神が出て来れば、それは須佐之男命の心が清らかだつた証拠、といふルールで始まつたらしいのですが、その確認がきちんとされてゐない。

実際にやってみると、天照大御神が須佐之男命の持ち物をかみ砕いて、吐き出して出来上がったものが女神で、天照大御神の持ち物をかみ砕いて出来上がった男の神様といふのが正勝吾勝といふ、私は勝つた、勝つたといふ神様なんです。須佐之男命は自分が勝つたと言ひ、天照大御神は「いやそんなことはない。私が勝つたのだ。お前のところは汚い」と言ふ。なんとも奇妙な軋轢が始まり、速須佐之男命が天上で暴れまくる有名な乱暴狼藉といふのは、どうもこの判定のトラブルから起つたらしいのです。

そしてどうやら、天照大御神にもちよつと弱みがあるらしい。須佐之男命が田んぼの畦を壊したり、新嘗の祭りの場にゲロを吐いて、「屎くそまり散らす」といつた、大変な狼藉らんざつをするのを、天照大御神は「いや酔つぱらつたんですよ」と言つて庇かばつてやる。さうやつて甘やかしてゐる内に、須佐之男命はどんどんエスカレートして、馬の皮をはいで機屋はたやに投げこむと、その機を織つてゐた女官がびつくりして死んでしまふ。そこに至つて天照大御神も、もう我慢ができないと言つて「天の岩屋戸」に籠つてしまふのです。

「天の岩屋戸」の物語

天照大御神が「天の岩屋戸」に隠れたために、葦原中国は暗くなつて良からぬことが次々に発生します。そこで神々は相談して、岩屋戸の前で天宇受売命あめのうずめのみことにストリップショー

をやらせるのですが、これを見て神々は、皆んな、わーつと大笑ひします。天の原も葦原中国も暗くなつて困つてゐるだらうに、どうして大きな笑ひ声をするのだらう、と不思議に思つて、天照大御神が少し隙間をあけると、天児屋命あめのこやねのみことと布刀玉命ふとたまのみことが「鏡」を差し出して、あなたよりすばらしい神様があるからですと言ふ。そこで、天照大御神が「いよよ奇あやし」と、岩屋戸から少し出られたところを、天手力男神あめのたぢからのおのかみが天照大御神の御手を取つて外に引き出したので、再び、高天の原もこの地上も光りが戻つて来ることになります。ここにちらりと、大事な役割をになつて「鏡」が登場してゐます。

さて一方、須佐之男命はさういふ乱暴狼藉をして地上に追ひやられるのですが、そこで、八俣の大蛇やまたをろちを退治し、蛇の腹から出てきた「草薙劍くさなぎのつるぎ」を天照大御神に献上する。そして天照大御神は、それを受け取るといふ仕方ではは完全に和解が成り立つといふことになるわけです。

いまながながと『古事記』の物語を追つてきましたが、鏡と剣と玉といふ「三種の神器」が、どのやうにして登場してきたのか、おわかりいただけただけかと思ひます。

〔天孫降臨〕

そののち、天照大御神は何度も子孫を地上に送ることを失敗した後で、最後に高御産巢

日神と天照大御神の両方の孫にあたる「天津日子番能邇邇藝命」あまつひこはのくにぎのみことを地上に遣はすことに成功する。そしてその時、三種の神器が地上へともたらされるのです。

ここで「三種の神器」(鏡・玉・剣)を渡すといふことはどのやうな意味があるのか考へてみませう。

はじめにお話したとおり、日本の神話の世界は天と地といふ構造をもつてゐます。この構造自体はほとんどの神話に見られますが、わが国の神話では、天と地の往来、天と地のつながりといふことがとても重要な意味をもつてゐる。そしてそこから考へると、「天孫降臨」すなはち神々の子孫が地上に降りるといふことは、単に、地上の人間が權威付けするために天の神様をもち出したといふやうな話では全くないんですね。「天」と「地」を繋ぐといふ、さういふ大事な課題の成就といふ物語なのです。

そして、その大事な仕事をするにあたつて何が与へられたかと言ひますと、まづは「玉」です。「玉」は一番最初に出てきました。天照大御神が地上から天に上る時に預かつた玉、それがまた、天から地上に降りる時に与へられてゐます。

また、剣について言へば、ふつう剣とは争ひと戦ひの象徴です。現に『古事記』でも姉と弟の争ひといふものがあつた。しかしこの剣は、その争ひの和解そのものになつた剣で

す。また、これは地上で発見されて天に献上されてゐる剣であつて、それが再び地上へともたらされてゐる。玉も剣も、天と地の往復を象徴するさづかりものと言つてよいでせう。

この二つと並べてみると、「鏡」の役割には、もう少し違つた要素がつけ加はつてゐる気がいたします。「鏡」の役割は、或る意味で玉や剣よりも重い。いま見たとほり、「鏡」は天の岩屋戸からの天照大御神の再出現にあつて、大きな役割をはたしてゐますが、これは象徴的には神の死とその再生といふ出来事だつたと言つてよい。つまり、「鏡」は天照大御神のお姿を映し出すことによつて、神の再生の契機となる——さういふ重要な宝なのです。まただからこそ、天孫降臨に際して、ことにこの鏡について、「これの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くが如^{いっ}拝^{こといっ}き奉^{まつ}れ」と天照大御神がおつしやつたのだと考へてよいでせう。

六、三種の神器が持ちうる意味を考へてみよう

さてここでやうやく、あの最初の問ひへと辿りつきます。この天孫降臨の物語は、『日本書紀』にもほぼ同様の筋書きのもとに語られてゐますが、その内の一書に「吾が児、此の宝

鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。与ともに床ゆかを同じくし殿ねを共にひとつして、齋鏡いはのかがみとすべし」といふ天照大御神の言葉が記されてゐるのです。

これは、いま見た『古事記』の記述と、ほとんど同じ内容と言へますね。ただ表現が、こちらは一段と具体的になつてゐる。単にこの鏡は天照大御神の魂として拝き奉るべきものである、といふのではなくて、この鏡を「視よ」と言つてゐる。それも、日々、寝起きの場において見よと言ふ。最初にお話したとおり、これはどう見ても、貴重な宝物をうやうやしく祭壇にそなへるといふことではなささうです。つまり、ここでは鏡といふものの機能が直接にかかはつてくるのです。

「吾を視るがごとく」宝鏡を視る、とはどういふことなのか？ 鏡を見れば、そこに映るのはその本人の顔以外ではありえません。それとも、これは魔法の鏡なので、心をこめて見るならば天照大御神の顔がそこに映し出されるといふことなのでせうか？ さういふ話ではないと思ふのです。

地上に降り立つ天照大御神のご子孫は、当然のことながら、(さまざまの苦難をのり越えて、天上の主神たるにふさはしくなられた)天照大御神の魂を、まっすぐに継ぐ者でなければなりません。すでに何人も神々が、地上に天の秩序をもたらさうとして失敗してゐます。それは

何よりも、清く正しい真直な魂まっすぐを保持しえなかつたからだといふことを天照大御神はよく知つてをられる。しかし、単なる訓戒は、これからの子々孫々を導くのに充分ではありませぬ。神の子孫が、日々その魂の姿勢を正し、天照大御神の子孫たるにふさはしい行ひをしてゆくためには、どのやうに導くのがよいのか——そこで考へ出されたのが、この「当に吾を視るがごとく」、日々この鏡を見よ、といふ教へだつたと思ふのです。

皆さんも毎朝鏡をご覧になると思ひますが。鏡は正直です。意気消沈してやる気をなくしてゐれば、正直にさういふ顔がうつる。明るく穏かな心持でゐれば、さういふ顔がうつる。天照大御神の魂をそのまゝに体现しえてゐれば、さういふ顔がうつるはずなのです。

そんな風に考へてみると、わが国の皇室が神々の子孫であられるといふ考へ方——神話と歴史が直結してゐるといふ、日本神話の特色——は、決して〈神がかり専制政治〉のイデオロギーなどではない。むしろ、現代に至るまで、わが国の政治思想の歴史を導いてきた、皇室を柱とする高い道徳性は、まさにかうした日本の神話を源泉とするものではないかと思はれるのです。

今日はそのほんのわづかの一端をお話いたしましたですが、皆さんも一人一人、記紀との対話を試みて、多くを学んでいただけたら、と願つてをります。

(質疑応答)

(問) 脳科学者・茂木健一郎氏の『化粧する脳』といふ本の中に、外面といふのは見える鏡によつて客観的に自分自身を見ていくけれど、日本人に足りないのは、内面を映す鏡が不足してゐるといふ論があります。日本の神話では、天照大御神様は私自身が映つてゐると思つて見なさいとおつしやつて、「鏡」を授けてをられるのですが、日本人にとつて心の鏡と言ひますか、自分自身を映す鏡として何か手がかりになるものがあればお聞かせ下さい。

(答) いや本当に、「鏡」といふものは、日本文化にとつてもものすごく大事な表象ですね。鏡をどう捉へるかといふことが、日本人の心を理解する上での大事なポイントになります。お配りしてある講義資料の最後につけてある北畠親房の『神皇正統記』の一節では、「三種の神器」はどういふ意味を持つのが解釈されてゐます。それによると、鏡といふのは、清明な心、無私の心、すべてをありのままに映しだす心、その象徴なんだといふのですが、これはとても大事な側面です。

たぶん、脳科学者の方が考へてゐるのは、心といふものは内側にあるのだ、といふ西洋

近代哲学の考へなのだと思います。しかし、むしろ東洋文化では心といふものは即、「鏡」なんです。

ことにそれが一番はつきりしてゐるのは、仏教の考へ方で、悟りとは何かを表したお釈迦様の有名な言葉に「如水中月」があります。つまり、水に映る月といふのです。水の表面が平らになつてゐればどんな遠い光もそのまま照らし出すことができる。これが悟りの境地だと言ふ。この仏教の考へ方は、実に日本人の自己理解になつてゐる。おそらく日本人がこの神話の中で「鏡」といふものを大事な表象として取り出した時にも、これがすべてを曇りない、明らかな清らかな心で写し出すといふ、「如水中月」につながる考へがあつたと思ふのです。

茂木さんの言葉を正しく言ひ直して、「心といふのは鏡でなくてはならない」と言つてみると、これは「日本人に足らない」どころか、日本人こそそれを実践してきたのだと言へるでせう。

(問) 三島由紀夫氏と石原慎太郎氏の対談集の中で、「守るべきものは何か」について、石原氏は「個人の自由」と言ひ、三島氏は「三種の神器」と言ひました。ここで、三島氏が「三種の神器」をそこまで大切に思ひ、今守るべきものは「三種の神器」だと言つた心境に

ついて、ご感想をお聞かせ願へればと思ひます。

(答) この言葉は、本当に二人の相違をよく表してゐると思ひます。石原さんといふ方は、精神的なことについては全く無知、無頓着な方ですからね(笑)。その点、三島さんは鋭い洞察力を持つていらした。おそらく「三種の神器」といふ彼の答へには、彼一流の反時代的なポーズもあつたと思ひます。あの対談の当時は、今よりもはるかに、わが国の神話や皇室の在り方についての国民的理解が妨げられてゐました。「三種の神器」と言つただけで、もう真面目には受け取つてもらへないやうな雰囲気があつた。

実は恥かしながら私自身、昭和天皇が戦争末期に、国民の生命をご心配していらしやると同時に、「三種の神器は大丈夫か」と心配なさつてゐたと聞いて、意外の感を抱いたことがあります。「三種の神器」の持つ深い意味にまだ気付かなかつた頃のことです。しかし、三島さんは、「三種の神器」の持つ深い意味を完全に理解した上で、答へてゐたのだと思ひます。

「三種の神器」とは、一言で言へば、わが国の神話が、今もなほへわれわれがそれを生あかしきることできる神話」として在ることの証なのです。先ほど、自らの神話を自らの言語で記録し、保持してゐるといふのは、それだけです。稀有なことなのだとお話ししました。し

かし、そればかりではない。その神話に語られる宝が、(当時の現物ではなく、二代目、三代目になつてゐるにせよ)今も大切な宝として継承されてゐる——これはさらに稀有なことです。しかも、今見たとほり、それは単なる權威づけのための貴重な宝物とし継がれてゐるだけでなく、もつと大切な、いはば「大御心」おほみこころの継承をを象徴するものでもあるのです。そして、わが国の政治道徳の伝統の中では、皇室の道徳は、そのまゝ、国民一人一人の手本として、万人が平等に実践すべきものでもあるのです。だから我々は、本当に一人一人、「三種の神器」の理想を生きてゐる。「個人の自由」なんていふ空っぽのお題目ではない、ずつしりとわが国の文化と歴史に根を張つた理想です。これを守らないで、何を守るんだ、と三島さんは言ひたかつたでせうね。

(問)『古事記』の上つ巻(神話)には、荒唐無稽、エログロありで、皇統の淵源である神々のいはばスキヤンダルといつたエピソードが散りばめられてゐると思ひます。太安萬侶は稗田阿礼に話をさせて、それを記録したわけですが、かう言つたものを文字に残したことの意味について、お考へをお聞かせ下さい。

(答) さきほど「神話」と「小説」は非常に近いといふことを申しましたけれども、固苦しく気取つてお上品ぶつたものは人の心を動かせないんですね。エログロあり、暴力沙汰あ

り、といふ生々しい神々の姿を見せて、初めて神々が息づく。天照大御神が天の岩屋戸から出て来るところでも、たださらさらと上品な踊りを、踊りましたでは、我々にこの「インパクト」、「力」が伝はつて来ませんよね。やつぱり盛大なストリップショーをやつて、皆んなが「わつはつは」と笑ふ——腹の底からの笑ひであつてはじめて天照大御神を天の岩屋戸から引き出す力がありえたのです。かういふ原初の力というものが表はされてゐないと、やつぱり物語に力がこもらないし、さういふ力のある物語で、初めて、我々の心に届くことが出来る。太安萬侶は、たぶんそのことを常に意識しながら、口伝へのまゝ、に書き記したのだと思ひます。

(問) お話しのなかで、日本の神様も試練があり鍛錬されて行くところのお話がありました。そこで、天照大御神は天の岩屋戸にお隠れになり、そこを出られて、再び世の中が明るくなりました。このところから、天照大御神におかれては、どういふふうに成長されたのでせうか。先生のお考へをお聞かせ願へればと思ひます。

(答) 確かに速須佐之男命、大国主神の成長物語りと比べると、天照大御神は、どんな試練でどんなふうにな成長されたか、掴みにくいところがあります。それは、これがきはめて内面的な成長物語だからだと思ひます。

そもそも天照大御神は、須佐之男命と違つて、最初から何の欠点も持たない、元気で健康な女神さまです。落ちこぼれの弟があたりをとどろかせて天上に登つてきても、脅えるどころか、男装して完全武装のうへで足を踏みならして雄たけびを上げて迎へる。弱さのかけらも見せません。

しかし、本当のリーダーとなるには、かうした若々しい元氣一杯の強さだけでは不十分です。秩序、権威、厳しさ、そしてそれらに裏打ちされた優しさといふものが必要となる。須佐之男命との誓約^{うけひ}と、それにつづく乱暴狼藉といつた一連の出来事を見るかぎり、天照大御神にまださうした資質がそなはつてゐなかつたことは間違ひありません。しかも、そこで女神は思ひがけない弱さを見せて、天の岩屋戸にこもつてしまはれます。まさに今の世に言ふ「引きこもり」です。神話学的に言ふと天の岩屋戸の出来事は貴人の死を象徴するといふのですが、事柄それ自体として見ても、これが重大な精神的危機であつたことは間違ひありません。

ではそれはどうやつて克服されたのか？　ここで重要なのは、八百万の神々がこぞつてこの危機の克服に立ち上がったことです。皆で会議をひらき、ストリップをする係、鏡をさし出す係、女神を引つ張り出す係、しめ縄を張つて後戻りさせない係——みんなのチーム

ワークで、天照大御神の再生が成り立つたのです。おそらくここで、天照大御神は本当に高天の原のリーダーになり得たのだと思ひます。すなはち、この重大な危機をのり越えることで、もはや若さにまかせた強さではない、内面の強さが得られた。と同時に、自分を助け出してくれた多くの神々への暗黙の感謝が〈チームワークで仕事をするリーダー〉としての天照大御神を作り上げます。そしてもちろん他の神々も、女神の不在の間の暗黒の世を知つて、あらためてこの神の大切さを思ひ知つたわけです。

さきにもお話したとおり、日本の神話においては、何事も一直線には成就しない。重要な仕事であればあるほど、挫折をくり返し、それをくぐり抜けてゆくことが必要とされる。天照大御神のこの天の岩屋戸の物語は、その内のもつとも大きな一例と言へるでせう。

以前、皇太子妃の雅子さまが引きこもりに似た症状に苦しめられていらした時、ある雑誌に、かうした日本神話の話を引いて、雅子さまは必ず復帰なさるし、そのときには、さらに立派な皇太子妃になれるに違ひないと書いたことがあります。伝へ聞くところによれば、まさにそのやうなご回復ぶりだといふことで、本当に嬉しく思つてをります。

講義

— 古典講義 —

古典は楽しい

小林秀雄 『本居宣長』

昭和音楽大学名誉教授

國武忠彦



はじめに

宣長の遺言書

大好きな桜

物まなびの力

古典への信を新たにする

契沖によって「目ガサメタ」

アハレノ一言ニ帰ス

人の心

物のあはれをしれる心

知ると感ずるとが同じ「全的な認識」

はじめに

「古典は楽しい」といふことで、小林秀雄の『本居宣長』のお話をさせていただきます。小林秀雄の文章は、不思議なもので、何度でも読みたくなる魅力にあふれてゐます。歌のやうでもあり、詩を読むのにも似て、感じ取らねば解らないものがあります。

「読書するとは、知識の収集ではなく、いかに生きるべきかを工夫する事」と小林は言つてゐますが、学問は知識ではなく生き方を求めることなのです。日常の生きてゐる体験のなかで知識を工夫する。知識の収集ではなく、感じて学ぶ力を求めてゐるのです。感じとる力は、小林自身が「知る事と感ずる事が同じであるやうな、全的な認識」を目指してゐるからです。全体を見る眼、情理を尽して見る眼を求めてゐるのです。

小林は次のやうに言つてゐます。

「科学的」といふ現代思想の特色は、とかく物の観察を主として、精神的事実もまた物として見て仕事にとりかかる傾向が顕著である。しかし、私たちは、物を眺める時、観察と感動とを切り離すやうな不自然な事はしてゐない。自然に対して素直に受け入れる、分析ではなく総合なのである。さうであるならば、人間の心を知るには、観察だけでは足りない。

愛情とか友情、感動とか尊敬とかが必要なのではないか。「おほらかな」、驚くほどの率直さが必要なのではないか、と。

今から五十四年前、昭和三十六年にこの合宿教室が雲仙で開かれたとき、小林秀雄は「現代の思想」と題して講義を行ひました。

現代の学問は、脳の動きは心の動きと同等に平行してゐると仮定し、身心は絶対一致するといふ仮説のもとに、科学的で客観的な観察、論理的で分析的方法をもつて、人間の非人間化、物質化、合理化、抽象化に尽してゐる。この風潮から抜け出すことは容易ではない。人間の心は、多様で複雑、混沌と矛盾の状態にあり、何一つ定かなものはない。脳がわかれば心がわかるといった、単純な考へ方は捨てやうではないか。心は動いてゐるのである、感じてゐる、温あたたかく生きてゐる。固定はなく、同じ瞬間もない、と語つてゐます。

脳科学者の茂木健一郎は、小林秀雄を「生涯の恋人」と呼んでゐます。この講義を録音テープで聴いて「生涯の恋人」に出会つたと思つたと述べてゐます。「知の巨人としての小林が必死で闘つたものは、近代の公式的世界観、近代の科学的世界観」であつたと記してゐます。

さて、現代において古典とは何か。「古くて、退屈で、読みづらい、名高い本」のことか、



と小林は言ってるますが、これは面白い表現ですね。「読みづらい」のは、当り前だといふことでせう。古典の「典」は「のり」と読み、古くても、永遠に変らぬ本質的な価値を持つ書物といふことで、中国では、「経なり」「常なり」といって機織りの縦糸たてに当るのです。

「古典は後世の鑑賞によって生き長らへる。鑑賞のない處に古典の古典たる意味はない」、「或る時代に在ったがままの性格で古典は長生きするのではない。後世がこれに付加する何ものかによって生きる。何を付与するか。後世は古典に種々の陰翳いんえいの完璧性かんぺきせいを付与するのだ」。

古典の喜びは、先づ何を措いても「鑑賞」しな

ければわからない。「読みづらい」ものであっても、読まなければならぬ。どう読んでも「完璧」であるといふ感動が、後世の人々によって伝へられ、古典は生き長らへきたのです。読めば読むほど、深い意味合ひが湧き出してくる。伝はってくる。賛嘆の声を挙げたくなる。この喜びは、読まなければわからないものです。私たちが抱懐する喜びが、心情が、「陰翳」なのです。この「陰翳」が「完璧」性をいやがうへにも高めるのです。絶対性を我が物にするのです。「及び難い規範的性格、…憧憬の産物」として、「古典が作品として完璧であるといふ仮定がなければ始まらぬ」と小林は言つてゐます。

江戸時代の本居宣長（一七三〇～一八〇一）にとっては、『古事記』が「第一の古典」でありました。「学問の本（ものまなびもと）」と言ひ、学問の基本であり、「最上（かみ）たる史典（フミ）」でした。小林秀雄の『本居宣長』もまた、現代において既に古典の趣（おもひ）きを備へてゐます。規範的な性格をもち、憧憬するものである点において、また読むたびに「陰翳」を日々新たに感じることに於いて、私は現代の古典であると信じてゐます。この本は、筆を執りはじめてから、十一年間を経て昭和五十一年、七十四歳の時に完成しました。

本居宣長は、伊勢国（三重県）松坂の商家に生れ、三十五歳から六十九歳までの三十五年間を『古事記』の注釈に費やし、『古事記伝』を完成しました。亡くなる一年前の、寛政十二年（一八〇〇）七十一歳のときに遺言書を書いてみます。

沐浴者世間並に而よろし、沐浴相濟候はば、平日の如く鬚を剃候而、髪を結び申すべき候、衣服者さらし木綿之綿入袴、帯同断、尤裕に而も単物に而も帷子に而も、其の時節之服たるべき候、麻之十徳、木造り之腰ノ物、尤脇指計に而宜候、随分匱末に而只形計之造り付に而宜候、棺中へさらし木綿之小キ布団を敷き申すべき候、随分綿うすくて宜候、惣体衣服、随分匱末成布木綿を用いべき候。

これは、宣長の長い遺言書のほんの一部分に過ぎませんが、小林はこれを読んで、「殆ど検死人の手記めいた感じの出でるところ、全く宣長の文体であることに留意されたい」と言っている。これは、どういふことでせうか。『古事記伝』の綿密、精緻な考証にも似た文体。詳しく、細かくて正確、すみずみまで揺るぎない思考が行き届いてゐる、あの文体と変

りが無いといふことでせう。小林は、宣長の文体は「綿密周到なもの」と表現してゐます。どこを切つても宣長の文体であることに私たち読者の注意を促してゐるのです。文体の統一とは、人格の統一でもあります。宣長は、何事にも徹底して考へた人で、隅々まで考へた結果を言葉で表現した人でした。

大好きな桜

宣長には、墓が二つあります。一つはご先祖や父母の墓で、これは市街にあります。他の一つは自分だけの墓で、これは山の中にあります。遺言書によると、この山の中の墓は粗末なものにせよ、後ろに山桜を植ゑよ、それも一番いい木を植ゑろ、枯れたら取りかへよ、と宣長は細かく指示してゐます。桜が大好きだったので。死んでも満開の桜が見たかったのでせう、花ざかりの桜の絵を描いてゐます。

「花はさくら、桜は、山桜の葉あかくてりて、ほそきが、まばらにまじりて、花しげく咲たるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず」(『玉かつま』)

山桜の葉が赤く照りかがやいて、なかには細い葉もまじって、花がたくさん咲いてゐるのは、比べるものもなく、この世のものとは思へないほど美しい。

先ほどの遺言書の終りの方には、命日に関する指示があります。桜の木を笏しやくにして台に立てて、諡なづなを「秋津彦美豆桜根大人」と記す事。清らかで美しい桜を根ネにした人、といふ意味でせうか。また、座敷床には像掛物を掛けろとありますが、これは六十一歳の時の自画自賛像で、そこには有名な歌が記されてゐます。

しき嶋のやまとごゝろを人とは、朝日に、ほふ山ざくら花

日本人が本来持つてゐる大和心とは、どのやうなものかと人が尋ねたならば、朝日に「匂ふ」、美しく照り映えてゐる山桜の花のやうなものだと私は答へやう、といふ意味の歌です。

小林は、「匂ふ」については一言では言ひ尽くせなかつたやうです。この合宿教室で講義をされたとき、「匂ふ」とは、色が染まること、照り輝くこと、香りがあり、匂ひもあり、

触覚、視覚を総動員しても表現できない、艶っぽい、元氣のある盛んなありさま、とも言うてゐます。宣長が「どんなに桜が好きな人であったか、その愛着には何か異常なものがあつた事を書いて置く」といふのですが、小林もまた宣長に負けぬくらゐに桜が好きだったのです。

次の文章をお読みください。これは、小林の一人娘の明子はるこさんが書いたエッセイを読んで感動した高見澤潤子さん（小林秀雄の妹）が、明子さんの文を引用しながら書いたものです。小林の死の一年前ことです。

兄は昭和五十七年三月の末、急に発病して入院したが、十何日かたつと桜の見頃になつた。自宅のしだけ桜が満開になる頃、兄があまりにも桜の花をみたがるので、主治医が特別に週末に帰宅を許してくれた。兄はとても喜んで、興奮して鎌倉に帰つて来た。ところがその前の晩、台風のような強い風雨があつて、折角の花は殆ど散つてしまった。帰宅した時には、桜の下は真白であつた。家の者はがっかりして残念がり、昨日までどんなに綺麗だったかをつぶやいていたが、兄は喜んで、くい入るように、殆ど散つてしまった桜をながめていた。

病院に帰って兄は、今年は桜がみられないと思っていたのに、おかげさまで、すばらしいお花見が出来てありがとうございましたと、何度も主治医に御礼をいった。

私はこここのところをよんで、涙が出て来てしようがなかった。兄の切なさ嬉しさが、みえるようにわかり、またすさまじいまでの兄の執念を、悲しく深く感じたからである。

私は、これを読んだとき、これが小林の全てだと思ひました。小林の全てがここに集約されてみると感じたのです。小林には、満開の桜が見えてゐたのです。桜に「魅入られた」人には、見えないものがきつと見えてゐたのでせう。この何事をも「鋭い感受性」で吸収していく「魅入られた」人が、小林であり、それはまた宣長でもあつたのです。

宣長は、死の一年前の夏から初冬にかけて、桜の歌ばかり三百首を詠んでゐます。

我心やすむまもなくつかはれて春はさくらの奴やつこなりけり

（私の心は、春になると桜に振り回されてしまつて、まったく自由を失つた奴隷のやうなものだ—

嬉しくも苦しい歎きでせうか—

此花になぞや心のまどふらむわれは桜のおやならなくに

(私は桜の親でもないのに、なぜか桜のことを思ふと心は途方にくれてしまふ。思ひ悩んでしまふ)
桜花 ふかきいろとも 見えなくに ちしほにそめる わがこゝろかな

(桜とは深い恋人でもないのに、桜を愛することが、あたかも恋人を愛するかやうに、私の心を何度でも染めて、桜の色が濃く占めるやうに、私の心は苦しくなる)

晩年の宣長は、「ものぐるほし」ほどに桜に振り回され、溺れ憑かれたやうに桜の歌を多く詠んでゐますが、これも何だか宣長の性格、学びへの取り組む姿勢と全く同じようなものを感じてしまひます。愛すること、憧憬から徹底した学びへ、そして、そのものと一体化してしまふ。宣長の学問への姿勢の一端がわかるのです。

物まなびの力

宣長は、幼いころから本を読むのが好きでしたが、十七八歳ころから和歌を詠みたいといふ心が芽生えてきたと言ひます。二十三から二十八歳までの六年間、京都に遊学。堀景山先生の弟子になって、広く読書に明け暮れました。仏教、五経・史記などの儒学、さらに万

葉集、その註釈の万葉代匠記、古事記、日本書紀など、読書は広い範囲に及んでゐます。それも、書物だけではありません。山川草木の万物をも広く愛し楽しんでゐるのです。

友人にあてた手紙を見ると、学ぶ基本の姿勢は「之ヲ好ミ信ジ樂シム」にあると書いてゐます。「僕ノ和歌ヲ好ムハ、性ナリ、又癖ナリ」。生れつきの性質で、やみつきのものであると言つてゐます。「和歌ヲ樂シミテ、ホトンド寢食ヲ忘ル」。

これらの言葉から窺へるのは、「私カニ自ラ樂シム」といふ、極めて穏やかな自発的な力が彼の学問の根本にあつたことです。「好ム」「樂シム」といふ、誰にでも備はつた自然の力は、意識的に「知る」働きとはまた違ったもので、何でも受け入れてしまふ、対象と自分が自づから一体となつていく、融合していく力ではないでせうか。

宣長の「樂シム」学びは、従来からの儒学一般の学説や解釈に不満をもたらしめます。孔子の家の馬小屋が火事になつたとき、孔子は「人に怪我はなかつたか」とは尋ねたが、馬に怪我はなかつたかとは尋ねなかつたと言ひます。「さすがは孔子だ」と多くが感心する解釈に対して、宣長は、これは反つて孔子の「不情」を表はすと言ひました。「不問馬」（馬は問はず）の三字を削るのがよいと『論語』の文章にまで文句をつけてゐるのです。

微生高といふ正直者で評判の男がゐた。或る人が酢を借りに行つたが酢がなかつたので、

隣の家からもらつて与へたといふ。孔子は、この行為を正直ではないとしたが、宣長はそれほど不直といつて咎めることではないだらうとしました。宣長は、孔子の心とは既に一体となつてゐるのですが、孔子の厳しい言葉には不満をもらしてゐるのです。「楽シム」といふ学びの力が至りつくところを、小林は私たちに考へさせやうとしてゐるのでせう。

古典への信を新たにする

中江藤樹（江戸前期の儒学者）は、十一歳のとき『大学』を読み、「身ヲ修ムルヲ以テ、本^{モト}ト為ス」の言葉に非常に感動し、毎夜これを読んだと言ひます。「読書百編、これ以外に彼は学問の方法を持ち合せてはいなかつた」と小林は推測し、そのことが「学問するとは即ち母を養う事」に至つただとしてゐます。

学問は「物知り」に至る道ではない。知的理解ではなく、人生の真実を知ることにある。人生の真実、真如を得るのは、各自の「心法」の如何による。我が心を省みて、工夫、修練するのである。そのために、中江藤樹は「書を見ずして、心法を練ること三年」、書の真意を知らんが為に書から離れ、「心法」を練つたのです。それほどまでに古典の価値は信じら

れてゐました。信じなければ疑問も湧き出ぬ、批評もできぬ。古典の完璧性、絶対性が、先づ信じられたところから学問は始まる。何事にも、「好ミ信ジ楽シム」こと、愛し好み信じることから、自然に始まるのが真の学問である。学問とは、「古典に対する信を新たにしようとする苦心であつた」と小林は言ふのです。

仁斎は「語孟」を、契沖は「万葉」を、徂徠は「六経」を、真淵は「万葉」を、宣長は「古事記」をという風に、学問界の豪傑達は、みな己に従つて古典への信を新たにすゝる道を行つた。

これらの「豪傑達」は、古典の価値を深く信頼してゐました。その完璧な価値を信じてゐた。古典を読んでみると「古言」が問ひかけてくる。それに立ち向ひ答へなければならぬ。宣長にとっては、『古事記』は「古の^{いにしへ}実の^{まこと}ありさま」を伝へたものであり、「いにしへのまことの心」を知るには、「古言」を、古代の日本人の言葉を知らなければならぬと信じた。古典への信を新たにしたのである。

伊藤仁斎（江戸初期の儒学者）のつぎの言葉を読んで見ませう。

学者苟イセツモ此コノ二書（「論語」「孟子」）ヲ取ラバ、沈潜反復、優游饜飫イウイウエンヨク、之ヲ口ニシテ絶タズ、之ヲ手ニシテ積カズ、立テバ則チ其ノ前ニ參ズルヲ見、輿ニ在レバ則チ其ノ衡ニ倚ルヲ見、其ノ警效ケイガイヲ承クルガ如ク、其ノ肺腑ハイフヲ視ルガ如ク、手ノ之ヲ舞ヒ、足ノ之ヲ踏ムコトヲ知ラズ。夫レ然ル後ニ、能ク孔孟ノ血脈ケチモクヲ識リ、衆言ノ淆乱セウランスルモ、惑ハサレザルヲ得ン。

『論語』『孟子』を読むとはどういふことか。深く心底に沈潜し、繰り返し読む。心ゆくまで鑑賞し、満足するまで読む。絶えず口にし、手放さずに読んでみると、孔子孟子が私の前に立ち現れ、車にのれば横木に寄りそつて歩いてゐる。咳せきばら払ひも聞こえてくる。心の奥底も見えるやうになり、手足が舞ひ踊るやうな喜びを感じる。そして、初めて孔子孟子の血の通つた思想の骨格を知ることができ。いろんな意見にも惑はされなくなる。

孔子と一体になつた真如感。皮膚が触れ合ひ、血が通ひ合ふやうな体験である。孔子が眼前にゐる、目の前に見える。これが「心法」である。「知る事と感ずる事が同じであるや

うな、全的な認識」が、楽しむ学問の終局の悦びである。その結果、仁斎は『論語』を「最上至極宇宙第一書」と言ひました。熟読することによって、宇宙第一の書と信じざるを得なくなつたのです。孔子の立派さを信じてゐることができた。信じてゐるとはそのやうなことであつた。体験とは切り離せないのです。

契沖によって「目ガサメタ」

宣長は、京都に遊学中に契沖（江戸前期の国学者）の書物を読み「目ガサメタ」と言ひます。古歌や古書には、その「本来の面目」があるといふことに、はつと目がさめたのです。契沖は、『万葉集』を研究して『万葉代匠記』といふ注釈書を残した。「万葉」の古言は、当時の人々の古意と離すことが出来ず、古代の言葉を知れば古代の人の心を知ることが出来る。そのため、憶測を排して、「古書によりて、その本を考へ」て行かうとしたのです。

「すべて人は、かならず歌をよむべきものなる内にも、学問をする者は、なほさらよま
ではかなはぬわざ也、歌をよまでは、古への世のくはしき意、風雅のおもむきは、しり

がたし」(宣長「うひ山ぶみ」)

後世の私たちが、古代人の考へた心、行為したことを知って、その時代のありさまを正しく知るには、古代の歌や言葉を学ばなければなりません。「ソノ詞コト一ツヒト、ワガモノニセント思ヒテ見ルベシ」(宣長「あしわけをぶね」)。宣長は、「考へる」とは「かむかふ」、むかへる意味に捉へた。相手を私の胸の内に迎へ入れるのです。小林は「親身に交わる」「身にかけて生きる」(「考へるという事」)ことだと言つてゐます。宣長が契沖から得た学問の極意は、言葉の意味の心の深いところまで徹底する、言葉と親しく交はる他に道はない、といふことだったのでせう。

アハレノ一言ニ帰ス

「和歌ミナ、アハレノ一言ニ帰ス、∴伊勢源氏ソノ外アラユル物語マデモ」。宣長は、和歌にも、「源氏物語」にも、「アハレ」といふ感情が、感動の根本であると感受したのです。

「あはれ」とは、感じ動く、動いてやまない、生きた心の働きをいふのでせう。想へば、私

の一日も、「あはれ」の一言に尽るのかもしれない。ああ雨が上がった。ああ木の緑が美しい。ああ嬉しい。ああ悲しい。ああ遠かった。ああ疲れた。ああまた雨か。「ああ、あはれ」の感情の揺れ動くなかで一日を過してゐるのです。

「あはれといふはもと、見るものきく物ふる、事に、心の感じ出る、歎息なげきの声にて、今の俗言よことばにも、あゝといひ、はれといふ是也、たとへば月花を見て感じて、あゝ見ごとな花ぢや、はれよい月かななどいふ、あはれといふは、このあゝとはれとの重なりたる物にて、漢文に嗚呼などあるもじを、あゝとよむもこれ也」(『源氏物語玉の小櫛』)

「あはれ」とは、歎なげきの言葉なのでせうか。ため息にも似た感情の裸の姿をしてゐます。歌の言葉を剥ぎ取り剥ぎ取って、行きついた底にあるものが「あはれ」といふ感情なのでせう。

「阿波礼あはれ」とは、「見る物、聞くこと、なすわざにふれて、情こころの深く感ずることをいふなり。俗にはただ悲哀ひあいをのみあはれと心得たれども、さにあらず。すべてうれしともをか

しとも楽しとも悲しとも恋しとも、情こころに感ずることはみな阿波礼なり」。

宣長によれば、「あはれ」とは、深く情こころに感ずるものなのです。物に感じて心は動く。「事にふれて感あはれく」感情、それは感動ともいっていいでせう。人の心は動いてゐる、生きてゐる。「よろづの事にふれて、おのづから心は」感じ動いてゐる。「あはれ」といふものを考へていくと、心といふものの不思議さをつくづくと感じます。「あはれ」の発見が、宣長の学問の基本になつてゐることに気づかされるのです。

人の心

「すべて人の心といふものは、からぶみ(漢籍)に書かくたかたたに(一方的に)、つきざりなる(簡単に割り切れる)物にはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくだしく(くどいほど)、め、しく、みだれあひて、さだまりがたく、さまざまのくま(隠れてゐる)おほかる物なるを、此物語には、さるくだくだしき(わづらはしい)くまぐままで、のこるかたなく、いとくはしく、こまかに書カキあらはしたること、く

もりなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくにて、大かた人の情ココロのあるやうカキテを書るさまは、やまと、もろこし、いにしへ、今、ゆくさきにも、たぐふべきふみはあらじとぞおぼゆる」(『玉の小櫛』二の巻)

宣長は、『源氏物語』を絶賛してゐます。それは、この物語を読んで、人の心といふものを発見したからでせう。私は、右の箇所が好きなのです。何度も読みました。人の心とはこのやうなものなのかと、改めて知った思ひがするのです。人の心の実相を見事に表現してゐる所だと思ひます。「人のまことこころの情といふ物は、女童めのむすめのごとく、みれんに、おろかなる物也」とも言つてゐますが、この心の発見が、彼の人間観の基本となるのです。

物のあはれをしれる心

「作りぬしの(作者自身が)、みづから、すぐれて深く、物のあはれをしれる心に(知った心で)、世ノ中にありとある事のありさま、よき人あしき人の、心しわざを、見るにつけ、きくにつけ、ふる、(触れる)につけて、そのこゝろをよく見しりて、感ずることの多か

るが、心のうちに、むすほ、れて（溜まり燻ぶり）、しのびこめては（忍び込める）、やみがたき（出来ない）ふしぶしを、その作りたる人のうへによせて（作中人物に寄せて）、くはしく、こまかに書頭かきあらはして、おのが（自分が）、よしともあしとも思ふすぢ、いはまほしき（言ひたい）事どもをも、其人に思はせ、いはせて、いぶせき（鬱積した）心をもらしたる物にして、よの中の、物のあはれ（感情）のかぎりは、此物語に、のこることなし（すべて書かれてゐる）（『玉の小櫛』二の巻）

『源氏物語』の作者である紫式部は、優れて深く「物のあはれ」を知った人であったといふ。それは、「人のまことの情こころといふ物」をよく知った人であったといふことでせう。「人情のありのままを書き記して、見る人に、人の情こころはかくのごときものであることを知らするなり」（『紫文要領』）とも言つてゐます。

宣長は、『源氏物語』を愛読し、「紫式部にあひて、まのあたり、かの人の思へる心ばへを語るを、くはしく聞くにひとし」とまで言つてゐます。紫式部が心の中を語るのを、つぶさに聞く思ひがするといふ、嬉しい体験を語つてゐるのです。

知ると感ずるとが同じ「全的な認識」

「目に見るにつけ、耳にきくにつけ、身にふる、につけて、其よろづの事を、心にあぢはへて、そのよろづの事の心を、わが心にわきまへしる、是事の心をしる也、物の心をしる也、物の哀をしる也、其中にも、猶くはしくわけていはば、わきまへしる所は、物の心、事の心をしるといふもの也、わきまへしりて、其しなにしたがひて、感ずる所が、物のあはれ也」（『紫文要領』卷下）

「其しなにしたがひて、感ずる所が、物のあはれ也」とは、その物や事の種類に従って、それに相応しい感情が動くのが、物のあはれといふものである、といふことでせう。宣長にとつては、「あはれをしる」ことと「事の心、物の心をしる」ことは、同じことだったので、事や物にぶつかって、共感する。「あはれをしる」には、情理共に心が働かねばならない。すみずみまで心が行き渡る。配慮される。「その感ずべきころばへをわきまへしりて、感じ」なければならぬ。君は悲しむべきことにあたりて、悲しむことができてゐるのか。喜ばしきことにあたりて喜ぶことができてゐるか。そんなことを宣長に問われてゐる気

がするのです。そんな単純なことかと言って、笑ってはいけない。これが学問の基本であり、もっとも大切にしなくてはならないものだ、と言はれてゐる気がするのです。

小林秀雄は、「知る事と感ずる事が同じであるやうな、全的な認識」を説きたかつたのだと、私は冒頭でお話しましたが、これが、「物のあはれをしる」といふ道なのです。小林は、「物のあはれを知る道」を語った思想家、とも言へると思ひます。

講義

御製に仰ぐ天皇のお心と

日本の国柄

興銀リース(株) 執行役員

小柳 志乃夫



一、はじめに

二、天皇のお祈り

三、偕楽

——君臣上下互に其の楽しみを樂しむ——

四、「まごころ」、「まこと」、「すなほなるをさな心」

——しきしまの道——

一、はじめに

かつて、この合宿教室に何度もご出講いただいた福田恆存先生は、シェークスピアの翻訳・演出や評論活動で有名な方ですが、福田先生の合宿教室での講義録が、今春、文藝春秋社から出版されてゐます（『人間の生き方、ものの考え方』）。その中で僕らが歴史にどう向き合ふべきかといふことについて、以下のやうに話されてゐます。

《過去を保持すること、その一貫性、連続性というものによつて、個人の場合には一つの人格を持ち得るのです。国家もそれを保持することによつて、国柄、国体というものを保ち得るのです。これを否定したらもうすべておしまいです。諸君にしてみれば生まれる前の戦争ですが、あの戦争を境にして、この一貫性、連続性はかなり危なくなつた。…（略）われわれの場合は、まだ過去を保持してありますし、経験として過去を背負っている。あるいは過去に背負われているからいいのですが、諸君の場合は何とか努力して、過去を経験しなければだめだと思います。》

私たちは、両親のもとで生れ育ち、楽しいことや悔しいことなど、様々な経験をして大きくなつた。さういふ過去との連続性があるから、過去の記憶があるから、私たちは自分自

身でゐられる。国も同様で過去との連続性を失ふと国柄もなくしてしまふ。第二次大戦の敗戦後の占領下、日本は二度と米国の脅威でなくなるやうに、文化・伝統の大切な部分を否定されてしまった。だから、福田さんは私たちに對して、過去の日本を経験しなければだめだと仰おっしゃるのです。

ここで、過去を経験するとは、過去を知るといふこととは違ふのでせう。経験するといふからには自分もその場に居合はせたやうに感じるものが求められるのでせう。その点で、最も身近で確かな手段は先人の残した言葉を読み味はふことです。

今日の私のお話は日本に続いた国柄の中心にあるご存在である天皇について、天皇の残された御製を通して、天皇方の思ひを少しでも感じうる時間になればと思つてをります。

天皇は日本の連続性の象徴的なご存在です。今の天皇陛下は初代の神武天皇以来数へて百二十五代です。皇紀では二千六百七十五年、中国の文献などで年代がはつきりしてくる雄略天皇のころからでも千七百年ほどと世界最古の国です。雄略天皇は万葉集の冒頭の歌を作られた方で、その後のほとんどの天皇が歌を作られてゐます。今日は江戸中期以降の天皇方の御製を取り上げたいと思ひますが、実は、初代の神武天皇にも歌が残されてゐるのです。それは古代の英雄に相応しい戦ひの歌と愛の歌です。愛の歌をご紹介します。



あしほら
葦原のしけしき小屋に菅すが置たまいや清敷さやきて我が
ふたりね
二人寝し

神武天皇は、大和でイスケヨリヒメといふ美しい乙女を皇后に選ばれますが、そのヒメを狭井河のほとりの家に訪ねて一夜を過ごされたときの歌です。葦の茂った川のほとりの粗末な小屋に、菅で編んだ敷物を、さやかに清らかに敷いて、愛しいヒメと一夜を過したことよ、といふお歌です。声に出して読むとサ行の音がすがすがしく響いて、新妻を得た天皇の喜びが伝はってくるやうです。

新婚の御製をもう一首紹介しましょう。江戸時代の桃園天皇の二十一歳のときの御製です。

新たひまくら待ちえてかはす今宵こよひより世を隔へだてじと契るうれしさ〔逢恋〕宝曆十一年—一七六一
↓

まちにまつて契りをかはず新婚の喜びを大らかにうたはれてゐます。「世を隔てじ」——
この世もあの世も、二世をかけてともに生きようといふことでせう。

二首ともに実にすがすがしい愛の歌です。この作者の喜びが皆さんの心に響いてくれば、
それが福田先生の仰る過去を経験する第一歩だと思ひます。

二、天皇のお祈り

天皇の最も大事なお仕事は天照大御神あまてらすおほみかみを始めとする神々、ご祖先をおまつりし、国家・国民の平安を祈られることです。そのために皇室には多くのお祭りがあつて、そのご作法は昔から伝はつてゐたのですが、応仁の乱の頃、戦乱に巻き込まれて、皇居そのものも荒れ果ててしまひ、大事な儀式や祭事が一旦途絶えるのです。伊勢神宮のご遷宮もこの時期途切れてゐます。江戸時代、このお祭りの伝統を復興し、神々祖先のみ霊をお慰めするのが皇室の願

ひととなります。

そのお一人が櫻町天皇（第百十五代）です。十六歳で即位され、二十一歳の時に新嘗祭（にひなめさい）（その年にとれたお米を天照大御神に捧げられて天皇ご自身もともにお召し上がりになり、豊穰を感謝される、秋の大事なお祭り）を復興された天皇です。二十歳のときに次の御製があります。

おどろかす鳥の初音におきなれて夜深くいそぐ朝まつりごと（「暁天鷄」元文四年—一七三九—御年二十歳）

歌を読むといふのは歌を作るのと同様に難しいもので、そもそも唯一の正解があるといふものではありませんが、特にこの御製の解釈は難しい。辞書を引くと、「朝まつりごと」は朝廷の政務を意味する場合が多く、一方、「初音」は鶯の初音といふやうにその年最初の鳥の鳴き声を意味します。初音をさう解釈すると、朝まつりごととは正月元旦の未明に始まる四方拝・歳旦祭と続けて行はれる祭事のことになりさうです。「夜深くいそぐ」といふご表現に、一番鶏がなく未明の真つ暗な御所の中でお務めの場に急がれる青年天皇のご様子が偲ばれます。

この四方拝は白砂を敷き詰めた宮中の庭に薦・敷物を敷き、屏風で囲んだ中にお座りになって伊勢神宮や天地四方を拝される儀式、歳旦祭は宮中に祀られた神々に新年の国民の幸福と五穀豊穰、皇室のご繁栄を祈られる祭事ですが、このお祭りは今も続いてゐて、今上天皇にも次の御製があります。

明け初むる賢所かしこころの庭の面おもは雪積む中にかがり火赤し〔歳旦祭〕平成十七年—二〇〇五—御年七十二歳)

賢所は宮中三殿の一つで天照大御神をお祀りしてゐるところ。御製は、正月の早朝、暗闇から夜が明けそめ、濃紺から藍色へと空の色は移っていく、賢所の前庭には白く雪が積もり、かがり火が赤く輝いてゐる。この時の陛下の御召し物は黄櫨染御袍こうぜんのごぼうといふ黄土色のお着物です。色彩のコントラストが鮮やかで、冷氣厳しく、凜とした社殿前の空間に新しい年が明けていく様子が詠まれてゐます。毎年、元旦の朝、国民の多くはまだ寝静まってゐるころに、皇室ではかうした厳肅な神事が執り行はれてゐるのです。

櫻町天皇の御製をもう一首紹介します。

身の上はなにか思はむ朝なく國やすかれといのるころに〔述懐〕元文五年〕

自分の身の上のことは何を思ふことがあらうか。毎朝毎朝、日本の国の平安を祈る心であることよ、といふ御製です。僕らが神様に祈るのは大体自分の身の回りのことですが、「身の上は何か思はむ」と強く言ひ切つてをられます。二十一歳のときの御製で、この年にさきほど申し上げた宮中の最重要のお祭りである新嘗祭が復興されてゐます。

櫻町天皇のお子様が先ほど恋の歌を紹介した桃園天皇ですが、お二人とも若くして亡られ、その皇子様が小さかったので、桃園天皇のお姉さまにあたる後櫻町天皇（第一百七代）が皇位を継がれます。その御製です。

おろかなる心ながらに國民のなほやすかれとおもふあけくれ〔述懐〕明和六年―一七六九―
御年三十歳〕

自分はおろかな身だが、おろかながらに、ただ國民が平安に過ごすやう朝夕願ふことだ

といふ御製です。「おろか」とわが身を慎ましく省みられる歌は歴代天皇の歌に多く出てまゐります。

この後櫻町天皇の後の後桃園天皇がまた若く亡られ、皇位の継承が問題になりましたが、この時は四代前に遡って東山天皇の血筋の閑院宮家から光格天皇（第一百九代）が即位されます。ちなみに現在の皇位継承で占領下で民間に降りられた宮家の復活が大事なのもかういふ実例が示すところです。光格天皇はこのとき九歳で、後櫻町上皇がそのご教育に当られ、幼い天皇も学問、和歌、伝統儀式と取り組まれたやうで、お側仕への人たちと中国の古典の読書会を活発に行はれます。天皇二十九歳の時の後櫻町上皇あてのお手紙が残されてゐます。次はその一節です。

「仰おほせ之通のとおほり（後櫻町上皇が仰った通り）、身の欲なく天下万民をのみ慈悲仁恵じんけいに存候事ぞんこうじ（自分の身の上を欲することなく国民の幸福だけを思ひ慈しむことは）、人君ひとみ（君主）なるものの第一のおしへ、論語はじめあらゆる書物に皆々みな此道理書このかきのべ候事ぞんこうじ、則仰すなはちおほせと少しもちがひなき事、扱々さてさて忝かたじけなく忝かたじけなく……」

国民を思ふといふ皇室の伝統はかうして脈々と伝えられてゐたのです。天皇は論語をはじめあらゆる書物を君主のあり方、ご自分の生き方を学ぶといふ御覚悟で勉強なさつてゐた。

しかも注意すべきは君主といっても当時の政治権力は幕府の手にあったので、その中で黙々と君主としての学問と伝統の継承が行はれてゐたのです。

光格天皇の御世に七年に及ぶ天明の大飢饉が起ります。江戸や大坂でも打ち壊しが頻発し、天皇のお膝元の京都では庶民の「御所千度参り」が起きます。最初は十人規模だったのが、ピークには一日で七万人といふ庶民が御所に詣でてその周りを回って願ひ事をしたと言ひます。庶民にとって天皇は神様で、神社のお祭りのやうな状況だったらしく、御所では水を提供したりリングゴ三万個を配ったとのこと。幕府は苦々しく思ったが止め切れない。逆にこのとき天皇は幕府に対して飢饉で困窮した国民の救済を申し入れられました。「天下万民をのみ慈悲仁恵に存じ候事」を実行されたのです。政治向きに口を出されるのは徳川幕府下では前代未聞のことでしたが、幕府は町奉行に命じて米の放出を行つてゐます。そのころ、民間に伝へられた光格天皇の御製に

身のかひは何を祈らず朝な夕な民安かれと思ふばかりぞ

とあります。先ほどの櫻町天皇や後櫻町天皇の御製と一つのお心がそこに見られるのです。

光格天皇の御製をもう一首ご紹介しませう。

うづみ火のあたりは冬をわするにも忘るな賤がさむき夜床を（「向炉火」寛政九年—一七九七—御年二十七歳）

いろりのそばにゐると温かくて冬の寒さも忘れるが、忘れるでないぞ、庶民の冷たく寒い夜の床を、といふ御製です。忘るな、といふ命令形は側近の方への言葉でせうか。ご自身への御諫めでせうか。温かい埋火のそばにゐると、自づと国民は今頃どう過ごしてゐるだらうと天皇のお心は国民の生活に向かはれるのです。今上天皇の御製に、

被災地の冬の暮らしはいかならむ陽の暖かき東京にゐて（「皇居にて」平成二十五年）

とあります。平成二十三年の東日本大震災から二度目の冬が訪れようとしてゐる日に詠まれた御製ですが、光格天皇の御製に通ずる思ひがそこにあります。小春日の東京にいて、お心は自づと東北の寒い冬を暮らす被災者の身の上に向はれるのです。震災のときに陛下は、国

民に対して被災者に心を寄せ続けることの大切さを仰いましたが、この御製にそのお心が示されてゐます。

次は孝明天皇（第百二十一代）、明治天皇の御父上の御製です。

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異國ことくにの船（安政元年―一八五四―）

「あさゆふに民安かれとおもふ」といふ句はこれまでご紹介した御製と同様ですが、心にかかられたのは異國の船で、御年二十四歳、ペリー来航の翌年の御製です。このご懸念はその後現実のものになって、幕末の嵐を招いていくのです。孝明天皇は幕末の欧米列強の開国要求に対して、断固として日本の独立を守らうとされた天皇です。国内的には幕府と長州などの討幕の動きの中で国内分裂の危機を回避し、国家の統一を維持するために、大変なご苦勞をされました。ですからその後の御製には切迫した感情が示されてゐます。

神くわみごゝろいかにあらむと位山くらみやまおろかなる身の居をるもくるしき（「述懐」神宮御法楽・安政五年）

幕府が勝手に日米通商条約を締結した年の、神宮御法楽での御製です。法楽とは神仏に音楽や舞などを奉納することで、ここでは神宮、即ち伊勢神宮に奉納する歌会です。「位山」とは皇位のこと。自分のやうなおろかな者が現在の難局に皇位についていいものか、天照大御神のお心はどうであらうか、苦しいことだと、神前に真情を吐露されるのです。

わが命いのちあらむ限かぎはいのらめや遂には神のしるしをもみん（「祈恋」石清水八幡御法楽・安政六年）

自分の命のある限りは祈らう、最後には神もお応へ下さるはず、その証を見ようといふ激しいお心です。「祈恋」といふ題ですが、命がけて訴へられ祈られてゐる感じです。

此の春は花うぐひすも捨てにけりわがなす業わざぞ國民くにたみの事（「春人事」鴨社御法楽・文久三年一八六三）

御製が詠まれた文久三年は攘夷運動のピークです。花やうぐひすを愛でる時ではない。

自分の仕事は国民のことだと、具体的に政治に関与をなさるご覚悟がうたはれてゐます。

明治天皇（第二百二十二代）については昨年の講義で取り上げられ、お手持ちの「日本への回帰」に掲載されてをりますので今日は触れませんが、次の御製を紹介しておきます。

民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな（「述懐」明治三十七年—一九〇四—御年五十三歳）

民草とは国民のことで、国民の生命力をたたへた表現です。上の句は「民やすかれ」といふ孝明天皇の御製と似てゐますが、違ふのは下の句で孝明天皇の「異国船」に対し、明治天皇にとって「思はぬこと」とは、日露戦争のことです。明治天皇は心ならずも大國ロシアとの二年にわたる、国家の総力を挙げた戦ひに苦心されることになったのです。

昭和天皇（第二百二十四代）は昭和動乱の厳しい時代を歩まれました。

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を（「朝海」昭和八年—一九三三—御年

三十三歳）

昭和八年の歌会始での御製です。前年の昭和六年の満州事変に続いて、昭和七年には上海事変、国内では五・一五事件と荒波が立つ中で、朝なぎの海のやうな波立たぬ世を神々に祈られたのです。しかし、残念ながら、この年、満州問題を背景に日本は国際連盟を脱退し、国際的に孤立の道を進むことになります。昭和十六年には、大東亜戦争が勃発、国民の総力を挙げての勇戦敢闘、さらに決死の特攻もむなしく、戦局厳しく東京大空襲・原爆投下と被害が拡大します。ポツダム宣言による降伏勧告をのむか徹底抗戦か、最高戦争指導会議が真つ二つに分かれるのですが、天皇がご聖断を下される。国民を救ひ国家を維持するため、耐え難きを耐へて宣言を受諾され、終戦となります。導入講義で山口秀範先生も紹介されましたが、このとき天皇は次の御製を詠まれてゐます（「終戦時の御製」四首中三首）。

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

「いくさとめけり」とはこのご聖断のことです。占領軍のマッカーサー元帥のもとに赴

かれた昭和天皇は、責任の一切は自分にある、自分の身はあなたに委ねる、ただ国民を救ってほしいと仰った。「身はいかならむとも」のお言葉通りです。このご聖断がなければ当時の国民は最後まで戦ったことでせう。ご聖断のおかげで僕らは今生きてゐるのです。山口先生は「猛鳥の襲撃から雛鳥を守る親鳥の決死の姿」と紹介されましたが、その雛鳥とは祖母であり、両親であり、私たち自身に他ならないのです。日本人として忘れてはならぬ御製と思ひます。三首目には「国がら」を守らうと言はれてゐますが、このご聖断に示された捨身のお姿、この御製そのものが「天下万民をのみ慈悲仁恵に」といふ国柄が守られたあかしと言へると思ひます。

次は今上天皇の御製です。

波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ（「波」平成六年歌会始）

さきほどの昭和天皇の御製と同じく、今上天皇も波立たぬ世を祈られた。平成六年の歌会始の御製ですが、前年はバブル経済崩壊後の厳しい経済情勢が続く中、冷夏や集中豪雨やさらには能登や奥尻島の地震など自然災害が続いた年でした。残念ながらこの翌年には阪神

大震災が起き、さらに平成二十三年には先ほどの御製の通り東日本大震災が起きます。

以上に見てまゐりましたやうに、光格天皇の時の天明の大飢饉、孝明天皇の時の黒船来航、明治天皇の時の日清・日露の戦争、昭和天皇の時の昭和の動乱と大東亜戦争とその敗戦、今上天皇の相次ぐ震災・天災と、時代時代に我が国は大きな試練を受けてきました。そしてその国家的試練の只中で天皇は祈り、時に行動された。ただ「国民の上やすかれ」の一筋の願ひのもとにです。かうした皇室をいただいて、我が国は二千年に及ぶ世界最古の国として、生き続けてゐるのです。

三、偕楽—君民上下互に其の楽しみを楽しむ—

少し話を変へてこの皇室と国民が一つになる喜びの世界についてお話したいと思います。

水戸に偕楽園といふ日本三大庭園の一つがありますが、この偕楽園といふ名前は中国の『孟子』の「民と偕ともに楽しむ」といふ言葉から取られたものです。幕末の志士、吉田松陰が野山獄の中で囚人たちに孟子を教へた話は有名ですが、「民と偕に楽しむ」といふ一節を松陰は次のやうに説いてゐます。

「此の章に於ておひ樂しむことと云ふことを發明すべし。文王（中国の名君）の樂しむは臺池鳥獸たいちちようを樂しむに非ず、民の樂しむを樂しむなり（臺は「うてな」、高台）。民の樂しむも亦臺池鳥獸ちようを樂しむに非ず、乃ち文王の樂しむを樂しむなり。君民上下互に其の樂しむを樂しむ。是れを偕ともに樂しむと云ふ。桀（中国の暴君）の樂しむは是れに反す。其の樂しむこと臺池鳥獸ちようにありて、民と偕にせず。故に獨樂と云ふ。

今人、酒を樂しむ者あり。色を樂しむ者あり。奕えき（ばくち）を樂しむ者あり。茶を樂しむ者あり。其の他百千の樂しむ所、枚挙まいきよに暇いとまあらず。是れ皆桀の徒と（仲間）なり。苟も文王の樂しむを樂しまんとならば、父子相樂しむ、君臣相樂しむ、兄弟親族、朋友きゆうどう郷党相樂しむの境を自得せば、豈あに樂しからずや。

然れども今諸君と獄つなに繋がれ、此の樂しむ万々望みなし。但だ相共に斯この道（人の生きべき道）を研究し、縲るいせつろう紲けい牢らう（獄に繋がれてゐること）何物たるを知らざるに至らば、豈に樂しみの樂しみに非ずや。願はくば諸君と偕に是れを樂しまん。」

「偕に樂しむ」といふ豊かな樂しみの世界を、獄中にあつて皆を力づける言葉として見事に語つてゐますが、私は、この「君民上下互に其の樂しむを樂しむ…豈樂しからずや」といふ言葉は日本の皇室と国民との關係をよく示してゐるやうに思ふのです。この「偕に樂

しむ」といふ世界について、これも天皇の御製を見てみたいと思ひます。

孝明天皇の嘉永七年、内外情勢がまだ緊張の極には至つてゐない時期の御製です。

皆人のこゝろも花の紐とけてへだてぬ中の春のさかづき（「春懷」嘉永七年——一八五四——御年二十四歳）

臣下とともに花見をなさつてをられるのでせう。心の紐、緊張を解いて、心を隔てぬ中でお酒を酌み交はす。大らかで暖かな春の日差しと浮き立つやうな喜びが感じられ、明るい笑ひ声が響いてくるやうです。

次は明治天皇の御製二首です。

千万の民とともにまたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ（「楽」明治四十三年——一
九一〇——御年五十九歳）

國民の業わざにいそしむ世の中を見るにまされるたのしみはなし（「をりにふれて」明治四十五

年)

一首目は、国民とともに楽しむにます楽しみはあるまいと思ふ、といふ、いはば「偕に楽しむ」というテーマそのものを詠まれた御製です。二首目は国民が自分自分の仕事に張り合ひをもつて務めてゐる、それが日本の国の力になつてゐる、さういふ世の様を見るほどの楽しみはないことだ、といふ最晩年の御製です。それは平和で自由な世の中のあかしです。召集令状で戦地に赴いた日露戦争の時代には自分の仕事にいそしむことはできなかつたのです。

昭和天皇の戦後の御製には国民との直接的な交流の喜びが多く歌ひ上げられてゐます。

戦まかにやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

をちこちの民のまる来てうれしくぞ宮居みやゐのうちうちに今日もまたあふ

この二首は「皇居内の勤勞奉仕者」と題する御製です。昭和二十年の暮れ、占領後間もない時期で、共産党は天皇制打倒を叫ぶなど、不穏な動きが渦巻いてゐた時です。荒れ果て

た皇居前広場を清掃しようと宮城県の農村の青年男女六十名が奉仕に出向いた。当時は、集団で皇居の奉仕に伺ふのは相当の覚悟を要する時期であつたのですが、その志に打たれた宮内庁も青年たちを皇居内に招き入れて戦災で焼失した宮殿の後片付けを依頼します。陛下は大変に喜ばれ、奉仕団の青年たちと直接お言葉を交はされて、そこに深い感激の時が持たれた。この奉仕は関係者のみで行はれて報道もなされなかつたのですが、口コミで全国にこの奉仕の動きが広がります。御製は、「戦ひ」——多くの国民の生命を奪つた大変な「戦ひ」であり、陛下がその責めを一身に感じてをられた「戦ひ」——に敗れた今もなほ国民が皇居に寄つてくれて草取りに精を出してくれてゐる。二首目は、いろいろな所から国民がよりきでうれしくも皇居に会ふ、「今日もまた会ふ」といふお言葉には、次々と国民が奉仕に集ふ、そのうれしさがあふれた御歌だと思ひます。この天皇と国民の心が一つに和するといふ喜びは、敗戦直後の厳しい時代に生きて行く力そのものを生んだのです。

ひさしくも見ざりし相撲すまひひとびとと手をたたきつつ見るがたのしき（「相撲」昭和三十年）

昭和天皇は相撲が大好きでした。戦前は国技館や御殿で何度もご覧になつたのですが、

戦後十年初めて蔵前の国技館においでになった。陛下は観戦に熱中されて力士に合はせてお身体を揺らされ、熱戦には大きく拍手される。それで力士も力が入るし、観衆も大喜びで、取組が全て終はって退場されるときは館内万来の拍手で「陛下またおいでください」と声が上がったさうです。そのときの御製で、戦後初めて「ひさしくも」見なかつた相撲を「ひとびとと手をたたきつつ見る」のが楽しいことだ、といふ、まさに「偕に楽しむ」といふ言葉のまま、こちらまで楽しくなるやうな御製です。

次は、昭和天皇が七十歳を迎へられたときの御製の内の一首です。

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ（七十歳になりて）昭和四十五年）

年はすぎゆき、と過ぎ去つた年の色々な出来事を偲んでをられる。陛下にとつての最大の「よろこび」は何といつても今のやうな平和の中での国民とのお心の交流にあられたでせうし、「かなしみ」の最たるものは大東亜戦争とその敗戦であつたでありませう。一言申せば、それは「かなしみ」——皇室と国民がともに「悲劇」を経験したのであつて、今よく

言はれるやうな「あやまち」ではなかった、といふ点に注意すべきでせうが、それはそれとして、この御製に示された天皇と国民との共感の世界、それが日本の国柄であります。

四、「まごころ」、「まこと」、「すなほなるをさな心」——「しきしまの道」——

残された時間で、天皇が大切になさってきた世界を考へてみたいと思ひます。

昨日皆さんが作られた短歌、和歌の道は「しきしまの道」とも呼ばれます。「しきしま」とは日本のことですから、「しきしまの道」とは日本人の道といふことで、それは日本の文化の中核をなすものといつてもいいと思ひますし、皇室では神事に次いで大切に受け継がれてきたものです。中でも明治天皇は大変な短歌のご修行を積まれ、ご生涯で十万首に近い御製を残されてゐますが、晩年の御製で「歌」と題して

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり（明治四十一年——一九〇

八——御年五十七歳）

と詠んでをられます。まごころをうたひあげた言葉とは短歌のことで、中でもまごころを表
現しえた歌ということとせうが、さういふ歌は一度聞くと忘れないものだ、と詠んでをられ
る。まごころのこもった言葉、まことの歌を明治天皇は求められたといつていいと思ひます。

きくにまづ身にぞしみける誠よりいふ言の葉は長からねども（をりにふれたる）明治四十四
年）

人の誠からいふ言葉を聞くと身にしみる―身にしみるの反対は頭で理解するといふこと
とせう。短い言葉でも真心のこもった言葉はまづ身に響いてくると仰るのです。

言の葉の上にあふれてきこゆるは人のこころのまことなりけり（をりにふれたる）明治四十
五年）

言葉の上にあふれて聞えるのは人の心のまことです。言葉を越えて聞こえるものがある
と仰るのです。それは僕らも時をり経験することではないとせうか。皇后陛下に「北京オリ

ンピック」と題する御歌があります。

たはやすく勝利の言葉いでずして「なんもいへぬ」と言ふを肯うべなふ（平成二十年）

水泳平泳ぎ二種目で優勝した北島康介選手の勝利インタビューの時、マイクを差し出された北島選手が少し間をおいて「何もいえねえ」と言った、印象的なインタビューでした。当時の流行語にもなったこの言葉に、怪我とスランプを乗り越えた北島選手の万感の思ひを国民皆も感じたし、皇后様もきつと「何もいへぬ」といふ通りでせうと、肯はれた。肯ふとは、いかにももつともだと納得するといふことです。

次は「東日本大震災の被災者を見舞ひて」といふ今上天皇の御製です。

大いなるまがのいたみに耐へて生くる人の言葉に心打たるる（平成二十三年）

「まが」は災禍。陛下が震災直後に見舞ひに行かれ、被災者の方々がそれで大変な力を得てをられる様子を私たちはテレビで見ましたが、その時の御製でせう。大震災の痛みに耐

えて生きる人の言葉には、明治天皇の御製のやうに、言葉にあふれて聞える重みがあるのでせう。その言葉に込められた真実に陛下の御心が打たれたといふ御製でせう。

もう一首、震災の時の皇后陛下の「手紙」といふ言葉書きの御歌を紹介します。

「生きてゐるといいねママお元気ですか」文かみに項傾うなかみし幼な児眠る（平成二十三年）

この御歌は、「両親と妹を大津波にさらわれた四歳の少女が母に宛てた手紙を書きながら、その上にうつぶして寝てゐる写真をご覧になったときの歌」（宮内庁）で、その写真の手紙は全て覚えてのひらがなで「ままへ。いきるといいね。おげんきですか」と書かれてゐます。ママが生きてるといいね、とは周囲の人も言ったかもしれない、しかし、その後の「お元気ですか」といふ言葉の何と悲しいことでせう。大好きなママは少女の心に当然のやうに生きてゐるのです。その幼子のおさな心の真実を皇后さまはしっかりうけとめられた。御歌は客観的な描写にとどめられてゐますが、そこには温かい慈母のやうな皇后さまのお心が偲ばれます。

子どもが母を求める―そこには深い人間のまごころが宿つてゐると思ひます。次の今上

天皇御製は悠仁親王が皇居に虫捕りに来られた時の御製です。

遠くより我妹の姿目にしたるうまごの声の高く聞え来（「虫捕りに来し悠仁に会ひて」平成十二年）

「うまご」は孫、「わぎも」は「わが妹」で皇后さまを指します。初めての男子のお孫の悠仁様が「おばば様！」と、遠くから元気な高い声で呼ばれる。ここには、悠仁様と皇后様と天皇陛下との間に「偕に楽しむ」といふ世界が自づと生まれてゐるやうです。我々の身の回りにもある日常のワンショットですが、温かい、広がりのある世界です。

紀宮様が結婚された時に、皇后陛下はこれと似た光景を詠まれてゐます。

母吾を遠くに呼びて走り来し汝を抱きたるかの日恋ひしき（「紀宮」平成十七年）

娘を嫁がせた世の多くの母親が思ふ心ではないでせうか。母といふ最も大切な人を大きな声で呼んで走りかけてくる幼子。呼びかける声と走り寄る身体と母を思ふ心は一つに溶け

あつて、それは「まこと」といふべきものです。以下は明治天皇の御製です。

思ふことおもふがままに言ひいづるをさな心やまことなるらむ（二子）明治四十年—一九〇七
—御年五十六歳—

今申し上げた幼心の真実をよみあげられたものでせう。思ふことを思ふがままに——そこには表面をつくらつたり、飾つたしない、まことそのものがある。しかし、省みると、このをさな心に帰るといふことは、なかなか難しいことなのです。社会生活の中では、取り繕つたり、事務的になりがちです。

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな（二心）明治三十八年—

明治天皇もさういふ感懷をお持ちだった。をさな心をいつの間にか忘れてしまったのが惜しいと仰るのです。ただ、一方で次のやうな御製もあります。

手ならひをものうきことに思ひつるをさな心をいま悔ゆるかな（「手習」明治三十八年）

「手ならひ」といふのは習字のことです。習字がいやで真面目に取り組まなかつたをさな心を今悔いてゐると仰つてゐるのです。これもよくわかりますね。もうちよつと勉強してみればよかつたとか、小さいときのわがままをなげく人は多いでせう。橋本左内は「稚心を去る」といふことを武士として生きる上での第一に掲げてゐます。とはいひつつも、そのをさな心の本質、とりつくるはない、素直な心はかけがへのないものです。

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける（「歌」明治四十年）

思ふことを率直にいふ幼児の言葉はそのまま歌になつてゐると詠まれています。その言葉は五七五七七の音律ではないでせうが、しかし、明治天皇が求められた短歌はそこにあつたといふことだと思ひます。

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも（「をりにふれたる」明治

四十五年)

短歌について明治天皇が詠まれた最晩年の御製です。自分の思ふ真実を、つまりまごころを、うたはうではないか。歌のしらべとして整へられてゐるかどうかといふ前に――天皇が求められた「しきしまの道」とはそのやうなものだったと思ひます。

最初に恋の歌をご紹介した桃園天皇の十六歳の時の御製に

身の恥も忘れて人になにくれと問ひ聞くことぞさらにうれしき〔聴〕宝曆六年――一七五六――
御年十六歳)

とあります。こんなことを聞くと恥をかくかな、とよく考へがちですが、そんな自分をつくらふことも忘れて、何やかや人に聞いて新しい世界に目を見開いていく、そこに人と人との率直なつきあひが展開される、それが何とうれしいことかと仰るのです。実にまっすぐな青年らしい御歌ではないでせうか。

孝明天皇御製に

打なびく柳のいとすなほなる姿にならへ人の心は（「柳」安政元年—一八五四—御年二十四歳）

とありますが、歴代の天皇が歌を通して求められた世界がそこにあると思ひます。

最後に、『名歌でたどる日本の心』（本会刊）に紹介された、本会の道統の大先輩で戦没学徒の加藤信克氏の遺詠を紹介します。

すなほなる幼心を一すぢに守りて生きむと友よ思はずや

作者と同輩の方が書かれたその解説には、作者はさきほどの明治天皇の御製が心にあつたのだらう、とした上で、「すなほなるをさな心」と聞くだけで人生を共感する多くの友を私たちは友としてきた」と述べられてゐて、心惹かれます。

○

今日は歴代の天皇方の御製を拝誦し、そこに天皇方が祈つてこられたもの、楽しみとされたこと、大事にされてきた生き方について触れてまいりました。親子の情愛のやうな世界、

まごころを何より大事に共感してきた世界、それは今も生きて天皇陛下・皇后さまのお姿を拝することをありがたく思ふ次第です。

明治天皇に

すなほなるやまごころをのべよとて神やひらきし言の葉の道（「をりにふれたる」明治四十二年）

といふ御製があります。言の葉の道、短歌の道は、すなほなやまごころ、日本人の心を述べるやうに神さまがお開きになったのであらうか、と仰るのです。前半で述べた神事と短歌の世界はここに一つにつながるやうです。この「神のひらきし道」はまだ日本人の心に地下水脈のやうに流れてゐます。僕らの心の中にも流れてゐます。それをお互ひに大切に守り育てていきたいと思ひます。

講話

「花燃ゆ」と小田村伊之助

元皇宮警察本部長

小田村 初男



今年（平成二十七年）はNHKの大河ドラマ「花燃ゆ」で、吉田松陰の妹・文かみとのちに夫となる小田村伊之助を中心に取り上げてをりますので、当時の小田村伊之助の生き方をご紹介するのも、皆様のご参考になると思ひましてお話をいたします。

小田村伊之助については、最近いろいろな研究書が出てゐますが、そこに共通してゐるのは、吉田松陰の「至誠」を受け継いで、それを体現した人であったといふことです。

小田村家は大内氏に仕へて度々武勲をあげた小田村備前守某の末裔であり、三田尻の御船方（毛利水軍）に所属してゐました。

長州藩では藩校明倫館を設立（一七一八年）した際、三田尻で越氏塾を主催してゐた河野かわの養哲ようてつを招聘しようとしたが、河野養哲は断り、代りに弟子を推挙しました。その一人が小田村家に養子となつてゐた小田村伊助公望こうぼう（郷山先生）です。この郷山先生から萩の明倫館で教授を務める小田村家が始まり、代々（養子であつたり、実子であつたりしますが）明倫館の学頭を輩出してゐる家柄でありました。

小田村伊之助は、藩医である松嶋瑞蟠ずいばんの次男として文政十二年（一八二九）萩に生れ、数へ十二歳で、小田村家の養子となり、慶応三年（一八六七）には藩主の命により楫取素彦かとりもとひこと改名しました。

松嶋家は代々藩医を勤める家で、父瑞蟠は早くに亡くなり、母が内職しながら伊之助ら三人の兄弟を育て上げました。兄の剛蔵は家業の医学を修め、江戸に出て蘭方を学び、更に長崎で航海術を学びました。帰藩後は洋学所初代局長、洋式軍艦丙辰丸初代艦長、海軍局初代頭人（長官）となるなど洋学の第一人者でありました。弟小倉健作も学識に優れ、江戸に遊学し松陰と親しく、松陰の脱藩事件や下田踏海事件（とうかい）に際して松陰のために尽力しました。

文さんの実家杉家は、父百合之助、その長男梅太郎（明治）、次男が、叔父の吉田大助の養子となった寅次郎（松陰先生）、長女が児玉千代、次女が小田村寿（楫取寿子）、三女が夭逝した艶、四女が文（のち楫取美和子）、三男が敏三郎です。父百合之助の弟が、吉田大助と玉本文之進です。それぞれ養子に入つてをります。ドラマの中では、大組に所属するのかそれとも杉家のやうな無給通（知行地を持たない階級）に所属するのかわきな階級の差があるやうに描かれてをりますが、この時代の長州藩においては、そのやうな階級差は意識されてゐなかつたのではないかと思ひます。杉家から養子に行つた吉田家も玉木家も大組に所属する家柄です。大組といつても四、五十石取りから千数百石取りまで幅広く、長州藩では、既に百石以下の数十石の武士たちが、藩の要職に就く体制ができてをりました。幕末に藩中枢で活躍した村田清風や周布政之助などもさうです。椋梨藤太も藩の要職に就いてをりますが、



大組ですらなく遠近付といふ階級です。幕末に活躍した志士たちも高杉晋作の二百石が多い方で、みな中下級の武士や庶民です。

ドラマの主人公の文さんから見ると、ご主人の久坂玄瑞は、禁門の変で自刃し、兄の吉田松陰は安政の大獄で刑死、叔父の玉木文之進の長男彦助（文の従兄弟）は長州藩の内戦で戦死、兄民治の長男で、吉田家を嗣いだ吉田小太郎（文の甥）と民治の長女の夫で玉木文之進の養子となった玉木正誼（まきでよし乃木將軍の弟、文の姪の夫）は萩の乱で戦死、叔父の玉木文之進は萩の乱の責任を取って切腹するなど、多くの身内を幕末維新の動乱の中で命を失ってゐます。正に悲劇の人といつてよいと思ひます。

小田村伊之助は数へ二十二歳の時江戸藩邸勤務となり、江戸で安積良斎あさかこうさいや佐藤一斎に師事します。

一歳年少の吉田松陰も翌年江戸に出てきますので、江戸で親しくなります。今で言へばちょうど大学生の年代で、各藩からも有為の士が多く江戸に集まって来てをり、大いに交流を深めてをります。

その後帰藩した伊之助は松陰の妹寿と結婚します。そのことを知った松陰は兄梅太郎に

「寿妹儀 小田村氏へ嫁せられ候由 先々珍喜御同慶仕候 彼三兄弟 皆読書人 此一事尤も弟（松陰）が喜ぶ所也」と書き送り、学問を好む相手と結婚したことを喜んでゐます。

次に時代が飛びますが、松陰は下田踏海事件を起し囚^{とら}はれて、野山獄に入り、その後獄を出て松下村塾を主宰してゐたのですが、安政の大獄が始まると、安政五年十二月再び野山獄に投ぜられることとなりました。その時に弟子たちが集まり送別会を行ひ、お互ひに詩を賦したり、語り合ったり、酒を飲んだりしました。その翌朝松陰は伊之助宛の手紙に、「老兄の気力・詩力・酒力、皆僕の当る所に非ず」と書いてをり、更に同日弟子たちに「村塾来送の諸君に贈る」として、「吾を送る十三名、訣^{けつ}別^{べつ}なんぞ多情なる。松塾^{まつじゆ}当^{あた}りに隆^{りゆう}起^きすべし、村君^{むらぎみ}義盟^{ぎめい}を主^{しゅ}とる」と書き、松下村塾は小田村が主宰すると述べてゐます。

翌年五月いよいよ江戸へ送られることになったとき、「小田村伊之助に与ふ」として、

「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり

吾れ学問二十年、よはいまたじりつ 齡亦而立（三十歳）なり。然れども未だ能く斯の一語を解する能はず。今茲こゝに関左（関東）の行、願はくは身を以て之れを験ためさん。乃ち死生の大事の若きは、姑しばらくこれ置く。

己未五月

二十一回猛士

「此の語他日しるし験あらば、幸にこれを世に伝へ、湮滅いんめつを致すことなかれ。若し或は索然として蹟あとなくんば、又幸に之れを焚たき、醜しゆうを友朋ゆうほうに貽のこすことなかれ。渾すべて老兄の処分を仰ぐ。

五月十八日

辱愛友矩方再拜

彝堂いどう村君士毅しき足下

と書き送り、信頼する小田村伊之助に覚悟のほどを披瀝し、後事を託してゐます。

また、弟子たちから塾の今後について問はれたのに対し、「村塾、彝堂いどう先生（小田村伊之助）あり、何ぞ吾が言を待たん。塾政の大眼目は唯だ先生を尊奉するあるのみ」と答へ、小田村伊之助を後継者としてゐます。

その後長州藩は禁門の変に敗れ、藩政は俗論党の掌握する所となり、三家老四参謀を始め多くの正義派の人々が切腹や斬首されました。小田村伊之助も、兄の松嶋剛藏が野山獄で斬首された日に野山獄に投獄されました。この時、妻の寿に「申残候言の葉」といふ遺言

書を贈つてゐる。その中では、どのやうなことになるか分らないが、天地神明に対して恥づべき事はないので、松陰が残した歌に「かくあらんことは武夫ものふの常」とあるのはこの時だと思ひ二人の子供をしつかりと養育してほしいこと。誰も怨んではならないことなどが書かれてゐます。

小田村伊之助も処刑される所でしたが、高杉晋作の挙兵により、俗論党の政權は倒れ、出獄することができました。

その後、太宰府滞在中の五卿への使者として赴き、坂本龍馬と会ひ薩長同盟の端緒を開きました。

幕府の長州再征に際しては、広島に赴き、幕府との折衝に当り、遂には幕府によつて拘留されました。この頃遺訓ともいふべき書を残してゐます。

「張文節公曰く、人の常情は儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し。吾今日の俸豈能く常に有らんや。身豈能く常に存せん。一旦今日に異なれば家人奢に習ひて已に久しく頓とんに儉すること能はざらん。所を失ふに至る。

吾家素より寒微、事変に遭逢し、清要とうはんに叨班し、国家の重恩を担ふ。衣食の供、幸ひに乏しき無きを得たり。然れども切に恐る、吾位を去るの日、妻児奢に習ひて頓に儉す

ること能はざるを。因って此れを録し以て之れを警む。

歳次丙寅秋八月念日

小田村哲謹書

といふ家族に節約を求めめるものです。

その後維新に際しては、新政府の参与に任命されますが、藩主の要請により藩に帰り、藩主側近として仕へることとなりました。

明治になって、群馬県令を務めました。群馬県では教育と産業振興に力を入れました。教育では各地に学校を作り、下僚からの報告は、必ず教育の実情から行はせその後で、他の報告をさせたといふ。また、修身の教科書として、『修身説約』を編纂させました。明治維新後西洋化が進みましたが、文明開化にも弊害がありました。この弊害を抑へて自ら学ぶ子供の育成のための教科書として編纂されたもので、欧米、中国、日本の故事を取り上げてゐます。各学年毎全十巻でありました。明治天皇が群馬県に行幸されたときには、草稿を天覧に供しました。当時このやうな教科書がなかったので、群馬県で先進的に作ったこの本が全国の本ストセラーになったさうです。後の修身の教科書の原型です。

産業の振興で一つだけ紹介しておきたいのは、生糸が群馬県の重要な産業でしたが、横浜の外国商人を介して輸出してをり、利益は外国商人たちに握られてゐました。そこで日本

人の手で直接消費国へ輸出したいといふのが悲願でありました。生糸生産者の新井領一郎といふ青年がそのため渡米をしたいといふことで、楫取素彦は様々な援助をしましたが、出発に際し新井領一郎が楫取県令に挨拶のため訪れたとき、楫取の妻・寿が、奥から錦に包まれた短刀を持ってきて、これは兄松陰の形見の短刀ですが、是非アメリカへ持って行っていただきたい、アメリカへ行くことによって、兄の思ひが遂げられます、と言って領一郎に渡しました。領一郎は松陰の短刀を携へてアメリカに渡り、見事直輸出に成功しました。このことは、新井領一郎の孫であるハル・ライシャワー駐日米大使夫人がその著『絹と武士』に書いてゐます。

このやうに小田村伊之助（楫取素彦）は幕末維新の激動の中、誠実に生きて、正に松陰の「至誠」を体現した人でした。

学生体験発表

小林秀雄先生のお言葉から
学んだこと

日本大学法学部三年

名和長高



私は、月に一度、國武忠彦先生のご指導による小林秀雄先生のご著書『本居宣長』を読む勉強会に参加してゐます。参加して一年半ほどになる私は、この讀書会を通して、たくさんのお話を学びました。そこで本日は、過去に小林秀雄先生が本合宿にご出講されて、「本居宣長」についてご講演された際の記録をもとに、「歴史」といふものについて、改めて考へさせられ、勉強になった三つの事をお話いたします。なほ、小林先生のお言葉は、昨年、平成二十六年、出版された『小林秀雄「学生との対話」』（国民文化研究会・新潮社編）からのものです。

「歴史は決して出来事の連続ではありません。出来事を調べるのは科学です。けれども、歴史家は人間が出来事をどういう風に経験したか、その出来事にどのような意味あいを認めてきたかという、人間の精神なり、思想なりを扱うのです。歴史の過程はいつでも精神の過程です。だから、言葉とつながっているのです。言葉のないところに歴史はないのです。それを徹底して考えたのが宣長です。」

『古事記』は歴史の形式をとった、神話としては世界でも珍らしい神話ですが、古人はあのように考えたのです。あれが古人の思想であり、古意なのです。宣長はそれを信じた。それが迷信であったと言ってみるところで、歴史の上では意味のないことです。

それが昔の人々の迷信であったとしても、今はまた違った迷信を持っているかも知れないのが歴史の真相ではないか。

神を信じ、神を祀るといふコンディションの中に人間が生活をしていた。『古事記』はその正直な記録であり、宣長は『古事記』そのままを信じたのです。』

「歴史は出来事を調べることではない」

一つ目は、「歴史は決して出来事の連続ではありません。出来事を調べるのは科学です」といふところ です。

私たちが、これまで学校等で習ってきた「歴史」といふものは、「何年何月に誰が何をした」などといふ、ただ事実を羅列しただけのものではなかったでせうか。大量の歴史上の事実、つまり出来事を暗記するだけの「歴史」といふ科目に親しみを持つことは大変なことで、私の周りでも、歴史が嫌いな人がかなり見受けられました。しかし、小林先生は、そのやうなものとは本当の「歴史」ではないとおっしゃいます。この言葉で、私は、「歴史」とは何なのか、よく考へるやうになりました。



「言葉から過去を心に思い起こす」

それでは、小林先生が言はれた「歴史」とはどのやうなものか。それが二つ目の「歴史家は人間が出来事をどういう風に経験したか、その出来事にとどのような意味あいを認めてきたかという、人間の精神なり、思想なりを扱うのです。歴史の過程はいつでも精神の過程です。だから、言葉とつながっているのです。言葉のないところに歴史はないのです」といふところです。

小林先生はご著書『本居宣長』やご講演のお言葉の中で、「歴史」とは、過去を思ひ出すことであるとおっしゃいます。本や史料に残された昔の人の「言葉」をじっくりと味はひ、自分の心の内に思ひ

出すことが「歴史」である。さうおっしゃつてゐます。私は、初めのうち、よくこの事を理解できなかつたのですが、近頃、ある文章を読んで、ふと、これに近い経験をしたのでお話しします。

それは、吉田松陰先生についての文章を読んだときのことです。松下村塾において、松陰先生の下で学んだ中島靖九郎といふ人物がゐました。その人が当時の体験を回想した文章（「吉田松陰の松下村塾」）で、大正のはじめ頃のものです。

予（中島）の家は萩にあり、松陰先生の塾は、郊外の松本村にあつた。その間が大分遠かつたので、月に何遍か、日を極めて行くことにした。初めは近所の人から、「久坂さんが吉田の塾へ行くが、お前さんも行つたらどうだ」といはれて、てくてく歩いて行つたのであるが、その最初の日には誰もゐず、久坂さんも不在であつた。けれども上つて待つてゐたら、そこへ綿服の粗末ななりをした、目のきらきら光る人が出て来て、「お前は本を読むか」と問ふた。それがすなはち吉田松陰先生であつた。そして予が久坂をたよつて来たことを告げたら、「何、久坂を尋ねて来たのか。よし、わが輩が教へてやらう」と、すぐに歴史書を開いて、熱心に教へて下さつた。ところが先生は、字句のこ

となどは説明されず、文章の裏面の意味を語られる。知らぬ文字があっても、そんなこととは構はぬ、といふ風で、わづか十歳の鼻垂小僧の予に、国家の大事を説き聞かされる。予はあっけに取られて、この先生は、奇妙な教へ方をなさると思つたが、かれこれ半時あまりも、その講義を聴いてゐる内に、心は先生に吸ひ取られてしまったやうになつた。家に帰つても、本のことよりも、先生のきらきらした眼と、火のやうな弁舌とが頭の中を往来して、まるで夢心地であつた。先生の教育に熱心だつたことは非常なもので、十二三歳の子供に、『国史略』や『日本外史』を教へられて、楠公が湊川で討ち死する場面などにいたると、感極まつて、はらはらと涙を落された。先生が、和氣清麿や楠木正成、大石良雄の事蹟を語られる時には、自身が清麿や正成、良雄になつて語られる。それでその一語一語は、電気の如くに、門生の肺腑に透徹し、全身がふるへるやうな思ひをしたのである。

私は、この文章を読んだ時、吉田松陰先生といふ人がどのやうな方だつたのか、自然と想像ができ、まるでこの中島の目を通して、吉田松陰先生のお話を伺つてゐるやうな不思議な気持ちになりました。今、そのことを思ふと、自らに「歴史」が蘇るとは、このやうなことをいふのだなと感じました。しかし、小林先生がおっしゃつてゐるやうなことができてゐ

るとはまだ言へません。ただ言へることは、小林先生から学び、自分で考へるやうになるともっと「歴史」を学びたいと思ふやうになつたといふことです。

「昔の人の気持ちを知る」

最後の三つ目は、「昔の人々の迷信であつたとしても、今はまた違った迷信を持っているかも知れないのが歴史の真相ではないか」といふところです。

これはつまり、昔、生活をしてゐた人々の気持ちを知ることが「歴史」では大事なのであり、当時の人々が如何に感じ、如何に考へたのか。それが今を生きる私たちのものとかけ離れてゐたとしても構はない。そのやうに感じ、考へて実際に人々が生活をしてゐたといふことが、「歴史」の真実である。この箇所にも、今、私たちが忘れかけてゐるものが述べられてゐると私は感じます。今の「歴史」は、昔、実際に生活をしてゐた人々のこと、その人たちの気持ちなどがほとんど顧みられてゐないと思ふからです。近頃、盛んに議論されてゐる先の大東亜戦争についても、命を懸けて国のため、家族のために戦つた人たちの気持ちが顧みられず、ただ戦争は悪いといふことだけが取り上げられてゐます。ただ歴史上の出来事を

どうかういふのではなく、その当時の人々の思ひを推し量る。さうすると、これまでと何か違った思ひが私たちの中に生まれてくるはずです。

多くのことを学んで

小林先生のご著書『本居宣長』やご講演の記録から、本当に多くの感銘を受けました。そのどれもが、学校教育で教はってこなかったもので、もちろん、大学でも教はりません。國武先生の読書会で小林秀雄先生の文章に初めて接して以来、多くのものを得ることができて、私の学生生活は非常に有意義なものとなりました。皆さんもぜひ、この本を読んでみてください。必ず何か得られるものがあります。そして、それは生きた学問を教へてくれるのだと私は思ひます。

会員発表

国文研での友との付き合い

(株)ロゼッタ

高木雅史



私は大学一年生の時から卒業までこの国文研の夏合宿、合宿教室に毎年参加し、大学二年からは当時、国文研が運営してゐた「正大寮」といふ学生寮に入つて生活をしてをりました。このやうに言ひますと大変真面目に勉学に励んでゐたやうに聞えるかも知れませんが、どちらかと言へば私は国文研の諸先輩方に比べ不真面目な学生だったと思ひます。そんな私になぜ大学生の間ずっと国文研に関り続け、社会に出て十年経つたいま、この壇上に立つてゐるかといふことをお話ししたいと思ひます。

「こんな学びの世界があるのか」

大学一年の七月、当時のクラスメイトだった穴井宏明君（テレビ西日本勤務）の「高木君、能を見に行かん？」といふ一言から私と国文研との関りが始まりました。「タダで能を見ることのできるのに参加しないか」と誘はれ、一枚のチラシを渡されました。「国民文化研究会」とは書いてありましたので、古典芸能に関連するサークルであらうとの理解のもと、暇だし、かういふ機会でもないとな能を見ることなどないだらうと思つて、軽い気持ちで了承しました。

当日行くと私の他に数人の学生と社会人の方が数名いらつしやいました。古典芸能に関する学生サークルのイベントと勘違ひしてゐた私はちよつとびつくりしました。「このサークルは少し年配の人がゐるなあ」と思ひました。その中で一番よく話して、一番偉さうにしてゐる四十歳前後と思はれるの体の大きい人の話しぶり面白かったので印象に残りました。その人は今回のこの合宿教室の運営委員長を務めていらつしやる伊藤俊介さんです。あとから分りましたがその当時は二十五歳の社会人一年目といふことでした。ですから現在まだ三十歳代でありまして、とんだ勘違ひでした。

そこで夏合宿、合宿教室があるといふことを知らされ、参加するやうに勧められたことを覚えてゐます。穴井君は当時、正大寮に入寮してゐる唯ひとりの学生でした。私が声を掛けられた「能を見る会」は夏合宿に参加する学生を誘ふために企画されたらしいのです。ピラを渡されましたが、私はほとんど興味を覚え、すこし迷惑でもありました。

ともかく、わたしは結局その年合宿に参加しました。合宿にはあまり興味を覚えなかつたものの、穴井君の人柄には魅力を感じてゐたことと、「能を見る会」で出会つた伊藤さんを初めとする国文研究会の方々にも多少興味を覚えたからでした。

もう、十五年前になる大学一年目の夏、合宿に初めて参加して覚えてゐるのは、私の属



した学生班の班付であった社会人の方がおっしゃった言葉です。「自分が学生時代にこの合宿に参加した頃、当時の大学での友達との話と言ったら、単位の話、バイトの話、彼女の話、この三つしかなかった。それが物足りないと感じてゐる時にこの合宿に参加して、こんな学びの世界があるのかと感動した。それで社会人になった今も参加してゐる」といふお話でした。私の最初に参加した合宿で得た感想とても似てゐたので今でもよく覚えてゐます。

「こんな学び世界があるのかと感動した」とは、私の場合、強く印象深く残つてゐるのは短歌相互批評です。班別の相互批評の時間に、私が何となく作った短歌を、班付きの社会人の方を中心に、私がか何に感動し何を歌に詠もうとしたかったのか、そ

してその気持ちにはどの表現が適切かを、私から言葉を引き出しながら、真剣に話し合ってくれました。短歌の相互批評を通じて真剣に私の感動に向き合ってくれる班の方に接して、こちらもいい加減な態度では申し訳ない気持ちになり、課題として義務的に作った短歌でしたが、自分が歌に詠みたいと感じてゐたことは何だったのだらうかと、自分自身の本当の心の動きを見つめ直すといふ体験でありました。

班での短歌相互批評をリードするのは学生ではなく班付きの方や、各班を廻って指導される先生なのですが、当時の私から見ればかなり年上の大先輩が大学一年生の私のところまで降りてきて、真剣に付き合ってくださいる姿勢がとても印象に残りました。

学生生活を豊かなものにしてくれた寮生活

合宿に参加してからは、毎月渋谷の事務所で行はれてゐる輪読会に参加するやうになりました。読書会が終つた後の飲み会が楽しみでもありました。そして定期的に輪読会に参加する中で学生同士は徐々に親しくなつていき、わたしは当時荻窪にあつた正大寮にも頻繁に足を運ぶようになり、あれよあれよといふ間に大学二年の五月には入寮して穴井君と二人で

共同生活をするようになってゐました。秋にはさらに二人の学生が加はったことから、寮を東中野の一軒家に移し四人で共同生活を始めるやうになりました。

正大寮での生活で何をやってゐたかと言ひますと、週一回行ふ輪読会と毎朝全員で行ふ御製拝誦以外はあそらく他の学生寮と変りないと思ひます。輪読会の後のちよつとした飲み会は楽しいものでした。

寮にはいろんな学生が訪れました、真面目に毎週輪読会に来る者もゐれば、飲み会のほ
うが出席率の高い者、家賃を請求したくなるぐらゐ居座る者もゐました。寮に来るきっかけもさまざまでした。いはゆる保守的な思想を持つてゐることから寮に集まる学生もゐましたし、当時輪読会で小林秀雄先生の本を読んでゐましたので、どちらかと言へば文学的な関心からやって来た学生もゐました。親が国文研の会員で大学入学後に半強制的に来させられてゐる者もゐました。もちろんさしたる考へもなく、私のやうに友達があるから集まって来る者もゐました。社会人の諸先輩にもよくお顔を見せました。先輩方を迎へるため寮生は阿吽の呼吸で役割分担し、急いで掃除機をかけ、ゴミと空き缶をまとめて倉庫に片付け、神棚の神を買ひに商店街に奔りました。先輩方が見えた時の緊張感が我々の寮生活のよい刺激剤になつてゐたと思ひます。

真剣に議論して、時には口論の末に喧嘩になったこともありました。寮での共同生活で、私の学生生活は大変豊かなものになったと思つてゐます。今でもあの時「能を見る会」に参加して本当に良かったと思ひます。振り返つて思ふことは友達がいかに大事だといふことです。

私は寮といふ場所があり、そこでいつでも酒盛りができたから、それだけで学生が集まつて来てゐたとは決して思つてはゐません。寮に来る学生と真剣に付き合ふといふ姿勢を、当時の寮生が共通して持つてゐたからだと思つてゐます。真剣に付き合ふとは、短歌の相互批評の際に作り手の気持ちに真剣に寄り添はうするやうに相手に対することだと思ひます。

苦しい私を支へてくれた国文研で出会つた友

そんな私の学生時代も終つて、いよいよ、就職して社会に出る段となりました。私の就職先はある建材メーカーの総務部でした。

幾つかの業務を経験した後、私は株式事務の担当に落ち着きました。株式事務とは株主総会の事務全般を担当する仕事で、具体的には株主向けに会社法で定められた法定の書類の

作成や、総会での想定問答集の準備が主だったものです。株式事務の書類作成は法律に則った書類をミスなく作成し、表記に迷ふところは他社の事例を参照しつつ問題のない書類を作るといふ類のしごとでした。三年目になり、ある程度仕事ができるやうになると私はだんだんと仕事に飽きて来るやうになりました。

私は転職を考へるやうになり、会社が変わっても、他業種に移つても食べていける専門知識と資格を身に着けようと考へました。そこで会計士試験の勉強を勤務の後に始めるやうになりました。一年ほど仕事の後に勉強を続けましたが、私の能力では仕事しながらの勉強ではとても時間が足りず、試験には受からないといふことを痛感し、会社を退職して本格的に試験勉強に専念することにしました。多少の不安はありましたが自分で選んだ道です。私は受験勉強に邁進しました。

退職して二年間は勉強に専念しました、株式事務をしてゐた時に疑問に思つてゐても會計を本格的に勉強したことがないため、分らないことが山ほどありましたが、勉強をするにつれ疑問が氷解していきます。最初は楽しくて仕方がありませんでした。しかし働かずゐる無職の期間が一年、二年と積み重なるにつれてどんどん辛くなって来ました。試験に受からないのももちろん辛いのですが、同じくらゐに無職であることも気になりました。これ

は国文研での友人ではないですが、結婚式の案内をもらひながら行きづらかったので適当な理由をつけて欠席したこともありました。そんな自分にも嫌気がさしました。

ただ、そんな中でも継続して学生時代と同じやうに付き合いを続けられたのが学生時代に国文研でもにすぎした仲間たちです。私が正大寮で共同生活をしてゐた学生時代も、最初の会社に勤めてゐた時も、会社を辞めて資格試験の勉強に専念してゐた時も、資格試験をあきらめて現在の会社に就職した今にいたるまで学生時代と変わらず付き合いを続けて来られました。それが苦しいときの私にとってどれだけの支えになったか分りりません。

今回の合宿に来てゐる小柳雄平君（伊佐ホームズ勤務）は私から見れば大変な激務の会社に勤めてゐます。大袈裟に言へば昼も夜もなく働いてゐますが、彼と話して不思議に思ふのは、社会人になってから友人と会ふと必ず出る会社への愚痴が全く出ないことです。彼は建築家で物を作る「ものづくり」の仕事をしてゐるので、より良い家を建てる以外に興味がない「変人」ではないかと思ふことがあります。そんな訳はありません。他にも会社を辞めて自分の会社を立ち上げた人間もゐます。会社を退職して海外に留学し全く前職と関係のない仕事を始めた人間もゐます。もちろん新卒で入った会社で順調に実績を出して勤めてゐる人間もゐます。警察官として立派に務めてゐる人間もをります。

皆それぞれ全く違ふ職業に就いて十年の月日で環境も変つてゐるはずですが、縁が切れずに交流関係を保つてゐられるのは、学生時代に真剣に付き合いをしようとした経験があったからだと思つてゐます。本日参加されてゐる学生のみなさんも是非この合宿で真剣に語り合へる友達を見つけ下さい。良き友を得ることは一生の財産になるはずだとつくづくと思ひます。

短歌入門

短歌創作導入講義

三菱地所(株) 都市開発二部 専門調査役

青山直幸



一、短歌創作の意義

二、被災体験と鎮魂

—東日本大震災の歌

三、短歌創作の心得

四、短歌鑑賞

—人生表現としての短歌

五、終りに

一、短歌創作の意義

皆さん、いよいよ合宿教室の日程の中でも最も楽しい野外研修と短歌創作の時間が、やって来ました。短歌を作るのが初めてといふ方もいらつしやるやうですが、私の話を眠らずに聞いてゐれば、必ず歌ができるやうになりますので、ご安心下さい。

それでは、短歌創作の意義についてお話ししませう。日本人は、古代から短歌を歌ひ交はすことによつて、心を磨き情意を育んで来ました。歴代の天皇方から名も無い庶民まで身分階層を超えて歌ひ継がれて来た国民的文学なのです。又、短歌の題材・テーマですが、心動かされたことであれば、何でも良いのです。自然・風景、家族・友人・恋人との情愛、師弟・同僚への敬愛、思想・哲学、音楽・美術・文学などの芸術作品に触れた時の感動など。但し、体験に基づいた切実な感動を詠むことが重要で、体験に基づかない理屈や観念を詠んでも人の心を打つことはできません。さういふ意味で、短歌は人生体験に基づく情意の表白であり、心を豊かにする「人生表現のよるべ」であるといへるでせう。

二、被災体験と鎮魂——東日本大震災の歌（『震災三十一文字鎮魂と希望』より）

人生には、予想だにしないことが起るものです。平成二十三年（二〇一一）三月十一日、マグニチュード9の巨大地震と大津波、さらに福島原発事故と、人間生活のスケールをはるかに超えた災害が発生したのです。人々は、驚愕と呆然自失の状態からいかに立ち上がっていったのでせうか？ その被災体験と失った家族や友人への鎮魂の思ひを詠んだ短歌の中から四人の方の作品をご紹介します。

這ひ出でて唸る大地に蹲ひて瓦解の態に声さへあらず

（仙台市）阿部 堅市

（仙台市）海老塚 忠

大津波は町の全てを押し流し我が子の墓も瓦礫となりぬ
流されし息子の墓の見つかりて思はず叫び妻を呼びたり
砂まみれの吾子の遺骨を持ち帰り我が家の水で妻と洗ひぬ

（気仙沼市）後藤 義之

水底に瓦礫の下に友眠るつめたかろうにくるしかろうに

（気仙沼市 震災後、一関市に移住）大原 都芽子



高^{たか}処より波に吞まれし友の名を呼べば葉ざく
ら風^{かぜ}に泣くがに

一人目の阿部さんの歌の「唸る」は、地響きの音を表現してゐる言葉。「蹲ひて」は、這ひつくばるといふ意。気が動転して、声も出ない状況が赤裸々に表現されてゐます。二人目の海老塚さんの歌。大震災の八年前に亡くなった長男の墓が、大津波で流されてしまったのです。二首目の「思はず叫び妻を呼びたり」には、長男の墓を見つけた喜びが、三首目にはその遺骨を妻と水で洗ったといふ、息子をいとおしむ両親の愛情が切々と詠まれてゐます。三人目の後藤さんの歌。地域防災隊で共に働いた友人を大津波で亡くしてしまったのです。「冷たかろうに苦しかろうに」といふ語りかけるやうな口語体の

表現が痛切に胸に迫ります。最後の大原さんの歌。短歌会の親友が天津波にさらはれたことをその息子さんから聞きます。作者は、夢中で友の名を呼びます。葉ざくらの葉擦れの音が（その親友が）泣いてゐるやうに聞こえると詠んだのです。友を失った痛恨の悲しみを詠んだ絶唱とも言へる歌です。以上の短歌の作者は、いづれも専門歌人ではない一般の国民です。未曾有の被災体験や大切な人を失った悲しみと鎮魂の思ひをやむに已まれず短歌に表現したのです。被災地を今上陛下と共にご訪問された皇后陛下が、次のやうな短歌を詠まれました。

皇后陛下の御歌

今ひとたびたちあがりゆく村むらよ失せたるものの面影の上に

復興に向って立ち上る村々、その村人達の脳裏には亡くなった大切な人々の面影が浮かんでゐるのですねと、被災した民の鎮魂の思ひに皇后陛下は深く心を寄せられたのです。

三、短歌創作の心得

(一) 基本姿勢

・短歌を詠む際の基本的な姿勢としては、詠まうとする対象に焦点を絞って、正確に詠むこと。心に感ずるままに率直に詠むことが肝要です。

・私が短歌を詠む際に心掛けてゐることがあります。私は、「三ないの原則」と呼んでゐます。第一は、「偽らない」で、心に感じもしないことを歌に詠むなどいふこと。第二は、「飾らない」で、うまく詠まうとして技巧に走るなどいふこと。第三は、「欲張らない」で、あれもこれも一首の中に盛り込まないこと。明治天皇は、次のやうに詠まれてゐます。

明治天皇御製

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける

「やがて」は、そのままの意。幼子のやうに素直な心で詠むことが短歌の基本であることをご自身の体験に基づいて詠まれてゐるのです。

(二) 短歌創作の作法

イ、一首一文

・短歌は、五七五七七といふ音数律で構成される定型詩で、三十一文字がワンセンテンス

(一文)であることが原則です。

・「上の句」(五七五)と「下の句」(七七)が分かれ、二文になった歌を「腰折れ」と言つて避けて来ました。次の歌は、万葉の大歌人・柿本人麻呂の名歌です。

東の野にかぎろいの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ……………一首一文

東の野の曙光と西の空の月が壮大な天空の広がりの中に一体感を持つて表現されてゐます。見事な「一首一文」の歌です。ところが、「上の句」と「下の句」を分けて、二文にしてみませう。東の風景と西の風景がバラバラで別の世界に感じられるでせう。

東の野にかぎろいの立つ見えぬ。かへり見すれば月かたぶきぬ……………一首二文
口、字余り、字足らず

短歌は五七五七七に整へるのが基本ですが、思ひが溢れ、どうしても五音、七音に収まらない場合は、「調べ」が不自然でなければ「字余り」でも構ひません。

源 さむらひ
実朝

ものいはぬ四方よもの獸けだますらだにも哀れなるかなや親の子を思ふ

「四方の獸すらだにも」は、あらゆる獸類でさへもの意。「哀れなるかなや」は、強く心打たれるものだの意。動物に託して、人間の親の子に対する愛の深さを詠んだ歌です。

第四句と第五句がいずれも八音ですが、余情溢れる表現で自然な「調べ」となっています。一方、五音が四音以下に、七音が六音以下になる「字足らず」は、「調べ」が乱れるので極力避けて下さい。

ハ、用語

用語は、文語体を使ふことをお勧めしますが、馴れないうちは無理して難解な古語を使ったりせず、体験に基づいた感動を自然で平易な表現で詠むことが重要です。

(三) 作歌の手順

短歌を創作する手順をまとめてみると、次のやうになります。

題材を絞る

↓

スケッチをする

↓

言葉を丹念に選び、五七五七七に纏める

↓ 音読し、しらべを整へる

↓

不適切な表現を修正する

↓

完成

(四) 連作

・複雑な思ひや連続的な体験を一首の短歌に詠み込まうとすると、焦点の定まらない、概括的な歌になってしまひます。それを避ける為に、一つ一つの体験を具体的に何首にも分けて詠むとより正確な表現となり、感動がより伝はり易くなります。さて、次の歌は、誰が詠んだ歌でせう。実は、私が正岡子規の連作を無理やりに一首に詠み込んで、一首にしたのです。

さ庭辺のをちこちに咲く花々を今日を限りと惜しみ眺めぬ

死期の迫った作者が、庭に咲く花々を惜しみながら眺めてゐる情景が、浮かんできますが、何か焦点の定まらない漠然とした歌になってゐます。子規の連作は次の通りです。

しひて筆を取りて

正岡 子規

佐保神さほかみの別れかなしも来ん春にふたたび逢はむわれならなくに
いちはつの花咲出でて我が目には今年ばかりの春行かむとす

病む我をなくさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我が愛づる山吹の花散りにけるかも

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我がいのちかも
(十首中、以下四首略)

正岡子規は、明治を代表する歌人で、明治三十一年に『歌よみに与ふる書』を世に出し、短歌の革新に全力を注ぐのです。しかし、子規は、脊髄カリエスといふ重病にかかり、己の死期を覚ります。この連作には、自己の限られた生命への凝視が、庭に咲く花々の一つ一つへの愛ほしきと成りて発露してゐます。「体験に基づいた写生」を主張した子規の信念が見事に結実した作品といへませう。 ※佐保神……春の神の意。

四、短歌鑑賞——人生表現としての短歌

(一) 橘 曙覧

子規が、評価した歌人の一人に橘曙覧がゐます。江戸後期の越前の国学者・歌人。子規が

「採鉍溶鉍より運搬に至るまでの光景仔細に写し出して目観るが如し。」（正岡子規「曙覽の歌」）と見事な「写真」の作品として賛美した、銀山を詠んだ歌を紹介しませう。

日の光いたらぬ山の洞のうちに火ともし入てかね掘出す

赤裸の男子むれるて鉍のまろがり砕く鉗うち揮て

さひづるや碓たててきらきらとひかる塊つきて粉にする

箕かけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼれくる

黒けぶり群りたたせ手もすまに吹鑠かせばなだれ落るかね

鑠くれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る白銀の玉（八首中六首抄録）

一首目の「かね」は、金属の総称で、ここでは銀鉍石のこと。二首目の「まろがり」は丸くなった固まりのこと。「さひづるや」は、「から」にかかる枕詞で、「碓」は踏みうすのこと。採鉍した鉍石を砕き、溶かし精錬して銀を作り出す過程が実にリアルに詠まれてゐます。鉍夫達が、汗と土にまみれて働く姿が目には浮かぶやうな、躍動感に溢れた歌です。

（二）与謝野晶子

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君（「みだれ髪」より）

この歌は、明治の女流歌人・与謝野晶子が、雑誌『明星』に投稿した短歌で、当時の文学界に旋風を巻き起した歌です。相手の男性もさぞかしたじとしたであらうと思はれる奔放で官能的な歌です。晶子は、このやうな歌を詠む奔放な情熱的の歌人として世に持て囃され、又日露戦争に出征した弟を思ひ作った「君死にたまふなかれ」といふ一篇の詩をもって反戦詩人のレッテルが張られてしまひました。その晶子が、次のやうな鎮魂歌を詠んでゐるのです。

佐久間大尉を傷む歌

勇ましき佐久間大尉とその部下は海国の子にたがはずて死ぬ

瓦斯に酔ひ息苦しとも記しおく沈みし艇の司令塔にて

大君の潜航艇をかなしみぬ十尋の底の臨終にも猶

海底の水の明りに認めし永き別れのますら男の文

海底に死は今せまる夜の零時船の武夫ころも湿ふ

大君の御名は呼べどもあな苦し沈みし船に悪しき瓦斯吸ふ

いたましき艇長の文ますら男のむくろ載せたる船あがりきぬ

海に入り帰り来ぬ人十四人いまもかなしき武夫の道

（『定本与謝野晶子全集第二卷・歌集二』より十二首中八首抄録）

明治四十三年四月十五日傷ましい事故が起りました。山口県新湊沖で、佐久間艇長以下十四名が乗り組み訓練中の第6号潜水艇が沈没したのです。その潜水艇が後に引き上げられて、関係者は信じられない光景を目にしたのです。艇長以下乗組員全員が持ち場を離れず職務を全うし、見事な最期を迎へたのです。又艇長は、酸欠の中で最後の力を振り絞って、遺書を認めたのです。晶子は、この遺書を涙ながらに読み、この連作を詠んだのでした。晶子は、ほとぼしる私情を奔放に歌ひ上げる情熱的な歌人でしたが、我欲を超えた崇高な行為に、我が事のやうに共感できるスケールの大きい国民的歌人だったのでした。

五、終りに

人生には、予期せぬ様々な体験をし、苦しみ、悲しみ、喜びを味はふことがあります。そこで感じた心の動き、心の叫びを率直に、正確に詠むことで、己の心を磨き、心豊かな人

生を享受することができないのではないでせうか？ では皆さん、この合宿で知った学問の喜び、友との交流等をありのままに短歌に表現してみませう。

短歌入門

創作短歌全体批評

熊本市役所環境局主任技師

折田豊生



はじめに
批評と添削
をはりに

はじめに

昨日、皆さんが「短歌創作」をかねた秩父宮記念公園への野外研修の折にお作りになった短歌を、昨夜、ゆっくり読ませて頂きました。同じ場所を歩いて同じやうな物を見てお作りになった短歌ですが、色々な詠みぶりがあります。多くの目で見た事実確認の多様性と確かさが感じられて、一つの交響楽を聴く思ひがしました。

お手許の〈歌稿〉に目を通して頂きますと、お一人お一人の感性や表現の仕方の違ひがよく分ると思ひます。その違ひを見るだけでも、それは、独りで行ふ相互批評と言つていいかもしれません。そのやうな見方をすると、この〈歌稿〉は、他所では手に入れることのできない、得難い短歌学習のテキストなのですから、全体を丁寧に読んで頂きたいと思ひます。

この合宿でこれまで主として取り組んできた輪読は、客観的な理解力を養ふための訓練であり、短歌創作とこれから取り組む相互批評は、客観的な表現力を培ふための訓練です。この全体批評では、班別相互批評を行ふ際に必要なポイントをお話することになります。

また、必携書の『短歌のすすめ』は単なる短歌の手引きではなく、日本人として如何に生きるかを投げかけてくれる、謂はば、敷島の道の導入書です。ほかに類を見ない優れたテ

キストですから、是非、これも参考にしながら取り組んで下さい。そして、この研修を終へた後も、折々に繻ひもといて頂き、短歌学習に御活用頂くことをお勧めします。

批評と添削

○ ただ一人はるばるここへ友求め夜更け語らうみづからの道

見えぬものこの苦しみはわかるまいただひたすらに想い続ける

作者の真剣な思ひが感じられますが、「みづからの道」など、分り難い表現があります。また、三十一文字に収めることを優先するあまり、必要な言葉が省かれているため、一首一文となり切つてゐません。仮名遣ひの訂正も含めて、次のやうにしてみました。

ただ一人はるばる富士の合宿に我は来たりぬ友を求めて

夜更けまで友（ら）と語らひ我が進みゆくべき道を探し求むる

道見えぬこの苦しみは分るまじされどひたすら思ひ続けむ

○ この強い思ひがあれば、きつと、この合宿で心が通ひ合ふよき友が得られると思ひます。



山口秀範先生のご講義を受けて

日の本が大きく変わりし時にこそ「民族の記憶」を思ひ出したし

山口秀範先生は「よりよく生きるために『教育勅語』を思ひ出さう」と題してお話し下さいました。作者は、「国民の精神に内在してゐる伝統的価値観」を「民族の記憶」といふ言葉で表現したかったのでせうが、漠然としてゐます。むしろ「教育勅語」とした方が具体的で分り易いでせう。助詞「こそ」の係結びも完結してゐません。「日の本」と大きく振りかぶって詠み出したところにも力みを感じられます。

国のためよりよく生きむと我もまた教育勅語を学びゆきたし

のやうな詠み方ではどうでせうか。

戦後七十年を経て、やうやく憲法改正の論議ができるまでになりました。大きな転換期の訪れを思はされますが、平和ボケと評される今の世の中にあつて、作者が時代の動きに鋭敏に反応してゐることは大事なことです。国を守るすべを共に見出していききたいものです。

○
改めて過去の思いに鑑みて今を生きゆく富士の山麓

この歌を意図的に曲解するなら、「今までサラリーマンとして生きてきたが、過去を省みて、今、富士の山麓で樵きりとして生きてゐる」といった受け止め方も可能です。複数の解釈を許す作品は、客観性に乏しいのです。特に「過去の思い」は漠然としてゐて内容が掴み難く、「富士の山麓」がこの研修を指すことを理解させるには無理があります。

あらためて過ぎにし日々を振り返り生きむと思ふ学びの集ひに

或は、

来こし方を省みよりよく生きゆかむとあらためて思ふ合宿に来て

○
のやうに、普段から分り易いやさしい表現をするやうに心がけたらよいと思ひます。

○
富士の山白い衣を身にまとい富士の頂今日も見えず

「富士の山」と「富士の頂」は重複表現です。三十一文字しかない一文において重複があると表現の幅が狭められることになります。また、結句が字足らずで、音律が乱れてゐます。

雨雲の白き衣を身にまとひ富士の頂今日も見えざる

としてみました。「白き衣を身にまとひ」は「白き衣に包まれて」としてはどうでせうか。擬人化はお洒落な表現ですが、場合によっては不自然になりますので、気を付けませう。

なつかしく思い出すような学問を共にしたしと班長はいふ

古典をよみ味わふことは非常なる想像力の要ることなりと

真剣な思ひが感じられるいい歌です。「ような」は口語ですから文語にし、「いふ」はこの場合、敬語にすべきでせう。全体的に言葉が硬いのも気になります。仮名遣ひその他も含めて、次のやうにしてみました。

なつかしく思ひ出さるる学問を共にしたしと班長言はるる

古典をよみ味ははむには常ならぬ想像力の求めらるると

先達の「よりよく生きるために」とふ言の葉胸に突き刺さりけり

昭和天皇を仰ぎて我も学生に姿を示すリーダーとならむ

作者の緊張感が伝はつてきますが、「先達」も「突き刺さり」も少し仰々しい感じがします。「姿を示す」は逆に舌足らずの感があります。

先生の「よりよく生きるために」とふ言の葉胸に深く残れり

昭和天皇を仰ぎて我も学生の手本たるべきリーダーとならむ

としてみました。

なほ、「昭和天皇」を「すめろぎ」と読ませることににも注意が必要です。場合によって表現の限界の拡張を試みざるを得ないことがあります。通常は、詞書を添へるなどして、敢へて特別なルビを振らなくてもいいやうにする方がよいと思ひます。

○

うすびさしかすかにのぞむ富士山に同胞の声よろこびに満つ

友らとの一体感が主題ですが、「同胞」はオーバーな表現です。国家の大事に関するやうな主題だといひのでせうが、日常の出来事には不向きです。

うすびさしかすかに見えくる富士山に友らの声はよろこびに満つ
でどうでせうか。或は、

うすびさしかすかに見えくる富士山を友らと共に声上げ望む

といふやうな詠み方だと、幾らか一体感を強調できるやうに思ひます。

ここで、国民文化研究会の会員の歌をいくつか見てみませう。皆さんと同じやうな体験
がどのやうに詠まれてゐるかは、大いに参考になるであらうと思ひます。

秩父宮記念公園

往にし日に殿下妃殿下住み給ふ名を留めたる記念公園

止みたりと思へばかすかに小雨ふる小径を友らとそぞろ歩きぬ

茅葺の母屋に入れば終戦の放送（玉音放送）聴かれし部屋もありけり

秩父宮記念公園にて

うつさうと生ひたるひのきの森の果に茅葺屋根の見えて来りぬ

茅葺の母屋おほふがに生おひ立てるしだれざくらの姿優しき

胸のやまひいやさむが為十年余ととせよの月日過とさるる御殿場の地に

会津藩主の家系に生れし妃殿下となかむつまじく過としたまふ宮は

国民のスポーツ振興願ひつつ自ら山野を歩きたまひき

暗雲のたれこめゆきし世の様を憂うれひたまへる御心慰なぐさまひ

○

合宿教室開催

運営の大任を受けはや一年つひに開催初日を迎ふる

続々と集ふ友らや先輩の「お疲れ様」の言葉ぞ嬉し

ありがたき言葉嬉しと思ひつつ任の重さをあらためて感あず

参加者が「来て良かつた」と思へるやう運営諸事に心尽さむ

○

合宿第一日目

黒雲の天を覆おほへばまなかひに富士の高嶺たかねの見えずくやしき

北南西と東の師と友も朝夕思おもひを馳はせ給ふらむ

病ゆゑ集ひ得ざりし北の友と都の先輩ともらも祈りますすらむ
五十年を経て合宿に來たれりと友は語りぬ懐かしみつつ
幾十年いくそとせ会はざりし友と語り合ふ昨日きのふ会ひたる心地こそして

秩父宮記念公園散策

丈高たけきヒノキ並なみ立つ森中の小路こみち歩めば霧雨の降る
橙だいだいと黄色の花つけアフリカンマリーゴールド群れ咲くを見つ
三本のしだれ桜のかたはらに茅葺き平屋の美しく立つ



友

懐かしき友ら集ひぬ三人四人思ひがけざる顔も混じりて
外国とつくにの長き務めをねぎらひて語らふ一時ひととき心和むも

講義にて

友を得よ良き友持てと若きらへ講義の終りに訴へにけり
誇らしき我が友らありと告ぐるとき覚え胸のこみ上げて來ぬ
勅語なる「朋友相信じ」さながらに生くるは楽しみ国支へて

これらの連作短歌から、具体的に詠むことの大切さをよく理解して頂けたかと思ひます。また、この合宿に様々な事情で参加できなかった会員もゐます。この研修は、そのやうな人達の思ひにも支へられて営まれてゐることに心を向けて頂ければ有難いと思ひます。

上村和男前理事長からのお歌です。

まむかひに靈峰富士をあふぎみつつわれらのつどひおこなはれんとす
難き病につどひの庭にゆけぬ身をくやしくおもひかなしみに満つ

をはりに

野外研修に出発する前の短歌創作導入講義において創作上の幾つかの要点が示された訳ですが、その後、一所懸命になつて短歌を作つてみた今こそ、その意味が良く分るのではないでせうか。今一度、皆で導入講義の内容を確認してから相互批評に入つて頂きたいと思ひます。

相互批評を行ふに當つて最も大切なことは、作者の創作の意図をよく聴き取ることです。

その上で、皆の知恵を結集してより良い表現に仕上げていく。その過程で、批評をする人達も作者も自然と気持ちが一つに融け合っていく瞬間が訪れる筈です。それは即ち心の壁が消えてなくなる至福のときとなるでせう。そのやうな素晴らしい交流の時間に恵まれることを期待してゐます。

最後に、いい歌といふのは、頭の中で言葉を捏ね回すことによつて生れるものではなく、皆のスリッパを揃へて上げるやうな心持ちがその創出の原点であることを申し添へておきたいと思ひます。

一年のあゆみ
—第六十回合宿教室までの一年—

第六十回合宿運営委員長
FTIコンサルティング

伊藤 俊介



一 運営体制の発足

第五十九回全国学生青年合宿教室は平成二十六年九月五日から九月八日まで、兵庫県南あわじ市で開催されたが、その期間中に次回の第六十回合宿教室の運営委員長を引き受けることになり、その後、運営委員長から各地区の運営委員を委嘱した。

〈運営委員長〉 伊藤俊介 〈副運営委員長〉 蔭山武志

東京地区 澤部和道、松村希一、高橋俊太郎、小柳雄平〈指揮班員兼任〉、高木雅史

関西地区 武田有朋

福岡地区 横畑雄基〈指揮班員兼任〉

熊本地区 久保田真

なほ、第六十回合宿教室の運営委員体制においては、指揮班長は運営委員とは兼務しないこととなり、左の各氏に指揮班長と指揮班員をお願いすることとした。

〈指揮班長〉 内海勝彦 〈指揮班員〉 原川猛雄、池松伸典

二 基本方針の確認と協議

平成二十六年十月十八日（土）、国文研東京事務所にて第一回運営委員会が開かれた。先づ研修のテーマとして、「時代の転換期に生きる私たちは、どうあるべきか。日本は、どうあるべきか！」を考へる合宿を目指すことを確認した上で、次の各項にそって話し合った。

- 合宿日程の素案と内部講師・招聘講師候補者の選定
- 合宿開催地の検討ならびに協議
- 各地区サポートメンバーの選任（地区サポートメンバーとは、各地区に運営委員のサポートを行ふメンバー）
 - ・ 関西地区―濱崎武人
 - ・ 福岡地区―小林国平
- その他

三 合宿地の選定

第一回運営委員会での検討協議を受けて、十月二十一日（火）、第六十回合宿教室の開催場所の候補として、奥富修一事務局長ならびに伊藤俊介運営委員長が、静岡県熱海市の民間施設を視察し、施設側との協議を行った。施設の設備状況は合宿教室の開催に適してをり、また施設側も合宿教室の開催趣旨ならびに実施内容について十分な理解を示した。

しかしながらその後の検討の結果、費用面において合宿教室開催予算の範囲に収まらないことが判明したため、奥富修一事務局長が中心となり、静岡県御殿場市にある「国立中央青少年交流の家」との協議を進めた結果、第六十回合宿教室は、平成二十七年八月二十九日（土）から九月一日（火）までの日程で、同所にて開催されることが決定した。なほ、「国立中央青少年交流の家」での合宿教室開催は、平成十五年以来十二年ぶりのこととなった。

四 国民文化講座の開催

平成二十七年六月十三日（土）午後、靖国会館の於いて第十八期第二十七回の国民文化講座が開催された。講師は明治大学教授で演出家の福田逸先生であった。演題は「父、福田恆

存を語る―戦後思潮の中にあつて―」であつた。本会の顧問であり合宿教室にも四回ご登壇いただいた恆存先生の思想家としての内面が、御子息の眼を通して語られた。聴講者は百十名であつた。途中の休憩時を活用して、第六十回の合宿教室への参加の呼び掛けも行はれた。

五 各地区の動き

関東地区

輪読会などの他に、小合宿が営まれ、また広く参加者を募つた研究会が実施された。

平成二十七年二月二十八日(土)から三月一日(日)にかけて神奈川県川崎市宮前区の「青少年の家」にて関東地区学生・社会人合宿が開催され、学生五名、社会人九名が参加した。

この地区合宿は、小柳志乃夫氏による導入講義に始まり、学生から社会人の順に各自発表を行ひ、最後に北浜道氏による吉田松陰「戊午幽室文稿」の講義および輪読を行つた。学生および社会人の発表では、各自自由にテーマを決めて三十分を目処に発表を行ひ、発表の内容について参加者との間で質問応答が活発に行はれた。

また三月二十九日(土)から三十日(日)にかけて、神奈川県箱根にて、関東地区の会員

による小合宿が持たれた。参加者十七名。今後の活動についての討議がなされるとともに、坂東一男氏（元アサヒ飲料近畿圏支社長）による「阪神淡路大震災時の企業活動」に関する体験発表が行はれ、さらに岩越豊雄氏の「『論語』の学習指導体験」や、大岡弘氏の「皇位継承についての考察」が発表された。それを受けて活発な質疑応答がなされた。

さらに七月四日（土）には、神奈川県教育問題研究会（主宰・國武忠彦氏）の第九回研究会が「フォーラム」（横浜市戸塚区上倉田町）で開かれ、四十余名の参加者が小田村初男氏による「小田村伊之助―吉田松陰投獄後の松下村塾―」に耳を傾けた。

北陸地区

岸本弘会員が中心となって「かたかごの会」及び「古事記を読む会」の例会が継続してゐる。両会の主催による講演会が富山県の小矢部市文化スポーツセンターにおいて行はれた。音楽を取り入れたり、懇談会を取り入れたりとし新しいことが試みられた。

① 第六回古典セミナー 平成二十七年五月十七日（日）

演題及び演者 「俱利伽羅の八重桜に想ふ―松尾春郎氏」

「古事記・神武天皇―岸本 弘氏」

② 第七回古典セミナー 平成二十七年十一月十五日（日）

演題及び演者 「昭和天皇と今上天皇のお歌に思ふ―岸本 弘氏」

「安倍総理の戦後七〇年談話をめぐつて―鳩澤善郎氏」

福岡地区

後記のやうに、福岡大学での学内サークル活動や講演会、さらには女子学生による研究会など多様な活動が展開された。これらは山口秀範常務理事、廣木寧会委員らが指導に当たった。さらに並行して、社会人会員相互の啓発のための研究発表会、読書会（輪読会）など定例的な研修活動が実施された。

六 各地区での定例的な研修活動

〈学生を中心としたもの〉

【関東地区】

小林秀雄著『本居宣長』読書会

日時 毎月第二日曜日十四時～十六時

場所 国文研東京事務所

内容 当該テキストの國武忠彦参与（会員）による講読

世話人 北濱 道

【関西地区】

吹田輪読会

日時 月二回金曜日十九時～二十一時

場所 大阪府吹田市勤労者会館

内容 吉田松陰『講孟劄記』輪読

世話人 北村公一

【福岡地区】

福岡地区の学生の活動は、主に福岡大学の学内サークル福大寺子屋塾の学生メンバーを中心として行はれた。先づ福岡大学に関するものを記す。

学内の定例輪読会については、リーダー学生が小林拓海君（経済学部四年）から岡部智哉君（経済学部三年）に交代し、毎週木曜日の十八時～二十時半を定例会開催日と定め、福岡大学二号館六階L教室にて、の書物を読み進めた。参加者は毎回約十名であった。

新渡戸稲造著『武士道』

内村鑑三著『代表的日本人』

平泉 澄著『物語日本史』

さらに、地域の偉人を発掘・研究するため、平成二十六年十一月二十九日に福岡市偉人探訪を実施した。また、この探訪を「偉人探訪冊子」として作成した。

平成二十七年三月二十五日には、福大寺子屋塾学生発表として、卒業を控へた前リーダー学生小林拓海君による研究発表会を、国文研福岡事務所で行った。

福大寺子屋塾主催の学内講演会として、六月十八日、第九回福大文化講演会を企画し、十数名の参加者を得た。具体的には次の通りである

第九回福大文化講演会

講師・寺子屋モデル取締役講師頭 廣木 寧氏（本会会員）

演題・「好きなことをやって生きる」―芭蕉・小林秀雄を中心に―

会場・福岡大学八一一教室

時間・十八時～二十時

また、(株)寺子屋モデルが隔月で実施してゐる「福岡縣護国神社の寺子屋」へ積極的に参加し、我が国の歴史上の英雄偉人の生き方を、その言葉を通じて学んでゐる。

福岡大学以外の学生の動きとしては、(株)寺子屋モデルにインターン研修生として参加した女子学生達が呼びかけ合ひ、月に一度、十九時～二十一時に時間を合はせ、自主的に山口秀範社長(本会常務理事、福岡事務所長)の下に集ふ学習会が始まった。名称を「女子大生会」と決め、『日本の偉人100人』(寺子屋モデル編)の中から一人を選び、参加学生が分担してその人物について研究発表をした後、山口氏の解説・指導をするといふ形式で進められた。参加人数は八名程である。

また、九州大学の学生は、理事の廣木寧氏が指導する「九大会」が続けられた。廣木氏宅及び寺子屋モデル会議室を利用して、月に二回程度、十九時から二十一時の時間を使って、小林秀雄氏の著作の輪読を重ねた。

〈社会人を中心としたもの〉

【関東地区】

短歌の会

日時 毎月第四土曜日十時～十二時

場所 国文研東京事務所

内容 各自創作の短歌についての相互批評
世話人 佐野宣志

四十会

日時 毎月第四土曜日十四時～十七時
場所 国文研東京事務所
内容 黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』輪読
主宰 内海勝彦

柴田会（葦牙の会）

日時 毎月第三土曜日十四時～十八時
場所 国文研東京事務所
内容 小林秀雄著『本居宣長』輪読
主宰 柴田悌輔

日本の国柄と皇室に関する研究会

日時 隔月一回土曜日九時半～十二時半
場所 国文研東京事務所

内容 御製・詔勅の輪読及び日本の国柄と皇室に関する研究発表

主宰 大岡 弘

北鎌倉輪読会

日時 ①毎月第四日曜日十三時～十五時半

②奇数月の第三日曜日十三時～十五時半

場所 鎌倉芸術館（又は鎌倉円覚寺伝宗庵）

内容 ①小林秀雄著『本居宣長』輪読

②小柳陽太郎先生他編著『名歌でたどる日本の心』輪読

主宰 関口靖枝

神奈川県教育問題研究会

日時 年に三回から四回（広く参加者を募って開催）

場所 神奈川労働プラザ（横浜市中区）、又はフォーラム（横浜市戸塚区）

内容 「あるべき日本の教育とは何か」についての研究発表と意見交換

主宰 國武忠彦

湘南会

日時 毎月一回（第三土曜日）

場所 平塚市中央図書館

内容 新潮日本古典集成『本居宣長集』の「紫文要領」輪読
主宰 小幡道男

つき
調の会

日時 毎月一回（不定）十九時～二十一時

場所 さいたま市浦和区岸町公民館

内容 本居宣長著『古事記伝』輪読

主宰 飯島隆史、岸野克己

興風会

日時 月一回日曜日十時～十二時

場所 国文研東京事務所

内容 小田村寅二郎先生著『昭和史に刻むわれらが道統』輪読
主宰 伊藤俊介

【関西地区】

関西信和会

(現在休会中)

日時 毎月最終日曜日十四時～十七時

場所 西宮市市民交流センター

内容 桑原暁一先生著『国史の地熱』輪読と短歌の会

【北陸地区】

かたかこの会

日時 毎月第二日曜日

場所 高志の国文学館

内容 黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』、岸本弘編『朗読

のための古訓古事記』輪読

主宰 岸本 弘

『古事記』を読む会

日時 毎月第二水曜日

場所 小矢部市文化スポーツセンター

内容 岸本弘編『朗読のための古訓古事記』輪読

主宰 岸本 弘

【福岡地区】

福岡国民文化懇話会

日時 毎月第三土曜日十六時半から十九時

場所 国文研福岡事務所

内容 本会会員講師による講義形式の研修

主宰 中島繁樹

太子会

日時 毎月第一日曜日八時から十一時

場所 国文研福岡事務所

内容 黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』および、『黒上正

一郎先生のうたと消息』輪読

主宰 藤新成信

小柳陽太郎先生を囲む勉強会

日時 毎月第二火曜日十九時から

場所 石村萬盛堂本店

内容 小柳陽太郎先生他編著『名家でたどる日本の心』

世話役 石村僭悟 山口秀範

眞木和泉守研究会

日時 毎月一回不定期 十三時から十六時

場所 全国総本宮水天宮 社務所（久留米市）

内容 眞木和泉守直筆『南遷日録』の読み合わせ

世話役 志賀建一郎

古典輪読会

日時 毎月一回土曜日 十四時から十七時

場所 熊野神社（大牟田市）

内容 『日本書紀』の通読

主宰 志賀建一郎

古義會

日時 毎月第一土曜日十六時から

場所 寺子屋モデル会議室

内容 会沢正志斎著『新論』輪読

主宰 廣木 寧

鳥の郷古典素読会

日時 毎月一回木曜日十九時から二十一時

場所 鳥栖北まちづくり推進センター

内容 日本古典の素読

主宰 西山八郎

皐月會

日時 年一回の研修会（平成二十七年十一月二十一日を予定）

場所 熊本

内容 皐月會会員による研究発表

主宰 廣木 寧

【熊本地区】

三十会

日時 毎月第三土曜日

場所 崇城大学市民ホール研修室

内容 黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』通読

世話人 久保田 真

【社会人の勉強会】

日時 毎月一回（曜日不定）

場所 崇城大学市民ホール研修室

内容 『字盤子』ほかの輪読

世話人 久保田 真

【鹿児島地区】

【輪読と昭和史研究会】

日時 毎月一回（曜日不定）

場所 鹿児島市勤労会館

内容 夜久正雄先生著『白村江の戦ひ』の輪読、歴史教科書の比較検討

世話人 野間口俊行

七 富士へ

例年、運営委員会は運営委員全員が年数回集ひ、開催されてきた。しかし今回の合宿運営委員会は種々の事情により、全員が集ふ運営委員会は平成二十六年十月に開かれた一回のみであつた。そのため、合宿開催に向けた各種事項の検討・準備は主に合宿地に近い関東地区の運営委員を中心に進めて、決定された方針・事項を各地区の運営委員と共有しつつ、各地区での勧誘活動を進めてもらふ体制をとつた。また、各地区では運営委員のほかに地区サポートメンバーならびに全国の国文研会員、学生の協力を得ながら、合宿教室直前まで研修活動と並行して勧誘活動が続けられた。

また、四月十一日（土）に奥富修一事務局長、伊藤俊介運営委員長、蔭山武志副運営委員長ならびに内海勝彦指揮班長の四名にて合宿地への現地訪問ならびに施設側との折衝や野外研修（散策）予定地の下見等を行ひ、八月一日（土）にも上記四名に池松伸典指揮班員を加へた五名にて現地への再訪問を行い、合宿開催に向けた諸準備を進めた。そして、平成二十七年八月二十九日（土）の開会式を迎へたのである。

合宿教室のあらし



第一日目

(八月二十九日・土曜日)

第六十回全国学生青年合宿教室は、霊峰・富士山のふもと、静岡県御殿場市の「国立中央青少年交流の家」にて開催された。全国から集った参加者はそれぞれの思ひを胸に受付を済ませ、午後二時三十分からの開会式に臨んだ。

開会式では、まづ福岡大学聴講生の小林拓海君が合宿教室の開会を宣言した。主催者を代表して今林賢郁理事長は「戦争には何ら関りのない、私たちの子や孫、その先の世代の子供たちに、謝罪を続ける宿命を背負はせてはならない云々の安倍首相の戦後七十年談話を二十歳代、三十歳代の若者の多くが評価する一方で、八月十五日^がが何の日かを知らない若者も多いといふ世論調査をどう見たらいいのか。自分らの世代、ひいては自分だけ良ければいいと考へてゐることの現れだとしたら寒心に堪へない。この合宿では、日常から一歩踏み出して、国のことに思ひを馳せ心を働かせて、何かを掴んで欲しい」と挨拶した。続くオリエンテーションで、伊藤俊介合宿運営委員長は「日本人としての自分自身を知らないが故に、他の文化に対し自信を持ってないでゐるのではないか。国の伝統と日本人の生きてきた姿を学

び、自分を見つめ直す切っ掛けとして欲しい」と呼びかけた。内海勝彦指揮班長からは、日程の滞りない進行に当たっての諸注意が伝達された。

その後、各参加者は班室にもどって、お互ひに自己紹介をし、必携者「日本への回帰」第五十集の輪読を行った。夕食、休憩の後、山口秀範先生（株）寺子屋モデル代表世話役）による合宿導入講義「よりよく生きるために―『教育勅語』を思ひ出さう―」が行われた。「古今の名家に「家訓」があるやうに、我が国にはかつて「国訓」とも呼べるものがあった。それは『教育勅語』で、明治二十三年から昭和二十三年まで、日本人がよりよく生きるための指針となつてゐた」と講義を始められ、教育勅語を学ぶ格好の手引きとして、大正三年、當時満十三歳の皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）と五人のご学友に、杉浦重剛が「倫理」を授業した記録『倫理御進講草案』を紹介された。そして「父母に孝に」「朋友相信じ」「徳器を成就し」などの教育勅語の文章についての杉浦重剛の魅力あふれた授業を再現するべく解説を加へられた。

「倫理を御進講するに當つて杉浦重剛は、①三種の神器と天壤無窮の神勅への理解②五箇条の御誓文を将来の標準とする③教育勅語を深く学ぶといふ三大方針を立てて皇太子のご人格形成に多大の影響を及ぼした」と語り、昭和二十一年年頭の「新日本建設に関する詔

書」に触れられた。詔書の冒頭には「明治天皇明治ノ初国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ」とあり、その後に御誓文の五箇条全文が引用されてゐる。「この趣旨は、昭和天皇が占領下の国民に『自信を失ふな。わが国は輝かしい歴史を持つてゐるのだよ』と諭されたものだと思ふ。しかもこの勅語には聖徳太子の十七条憲法のご精神が反映してゐる」と千四百年もの前から続く国柄にも言及され、最後に「よりよく生きようとするには、縦につながる日本の精神の中にそれを求めることが大切だ」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、その上で各々の思ふことを論じ合った。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせるか、始めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

第二日目

(八月三十日・日曜日)

合宿の一日は「朝の集ひ」から始まる。本合宿では全日程を通し生憎の雨模様と霧で、

朝日に映える美しい富士の山容を仰ぐことが叶はなかつたため、「朝の集ひ」は講義室（四日目は講義棟下部の戸外）にて行はれた。簡単な体操の後、森田仁士氏（北九州市立医療センター勤務）による歌唱指導があつて、一同で唱和した。採り上げられた唱歌は次の通りである。

二日目（八月三十日）「ふじの山」「箱根八里」

三日目（八月三十一日）「われは海の子」「冬の夜」

四日目（九月一日）「虫の声」「紅葉」「村の鍛冶屋」

午前は、招聘講師の埼玉大学名誉教授・長谷川三千子先生による「三種の神器の謎を解かう！」と題する講義を聴講した。

先生はまづ「神話」の特質に関して「歴史は史料に即して確かめることが出来なければならぬが、神話はそれが出来ない。小説は一人の作者が創作するもので神話には作者はゐない。あるとすれば民族全体である。昔話や伝説は神話と似てはゐるが、昔話には色々なエピソードは語られてゐても、神話のやうにこの世の秩序がどのやうにして形成されたかは語られてゐない。旧約聖書を神話といふ人もゐるが、教義の書であるからその内容を疑ふ信者はゐない。神話は我々を縛るものではなく、その内容を自由に楽しむことが出来る」と説

明された。

続いて『古事記』と『日本書紀』の伝へる神話の特色と共通点について、「両書とも大筋では同じ物語になってゐて漢字が使はれてゐるが、『古事記』は日本語の音を漢字を使って表し、『日本書紀』は中国語としての漢字（漢文）で書かれてゐる」。そして、この両書の内容をどう読んでいったらいいのかについて、高森明勅著『はじめて読む「日本の神話」』に述べられてゐる「どのような部分にも、全体を貫くテーマは響き渡つてゐる」旨の言葉を引用され、日本の神話のテーマは何かについて具体的に『古事記』の文章に触れながら説明された。「西洋の神は宇宙が創造される以前から存在し永遠に存在してゆくが、日本の神々は次々に生成して、みなむらがみ並独神と成り坐して身を隠したまひき」と『古事記』は伝へてゐる。その冒頭に



天地初めて発けし時」とあるやうに、天と地といった空間的な区別があつて、それがいかにして統合されてゆくかが大事なテーマである。天照大神は自らの御孫に三種の神器を授けて地上に送り出されたが、それらの神器がいかなる意味を担つてゐるのか」と述べられて、勾玉と鏡が登場する天の石屋戸の物語のくだりを説明された。劍については、高天原を追はれた須佐之男命が大蛇を退治しその中から取り出して、天照大神に献上されたものであるが、「このことは天と地の統合、和解が成立したことを意味してゐる」と話された。

特に鏡については「天照大神はこれの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拝くが如き奉れ」と言はれたが、わが身を見る度に、いつも天照大神のお顔を思ひ浮かべ、清明で正しいことを正しいとされた厳かな大神の御心を仰ぎつつ、日々を過すべしとの意味合ひがある」と説かれた。わが国の神話は皇室の最も大切な「原核」を映し出し、表現してゐると話されて講義を終へられた。

午後は、短歌創作を兼ねた野外研修を前に、青山直幸先生（三菱地所（株）都市開発二部専門調査役）による短歌創作導入講義がなされた。まづ「日本人は、古代から短歌を歌ひ交すことによつて、心を磨き、情意を育んで来た。短歌は心を豊かにする。人生表現のよるべである」と述べられた。続いて、東日本大震災で被災した人々の短歌を紹介され、「未曾有

の被災体験と亡くなった大切な方々への鎮魂の思ひや叫びが赤裸々に表現されてゐる」と語られた。そして、復興に立ち上がった人々の思ひに心を寄せて詠まれた皇后陛下の御歌「今ひとたび立ちあがりゆく村むらよ失せたるものの面影の上に」を拝誦された。

次に、短歌創作の基本姿勢として、「詠まうとする対象に焦点を絞って、正確に心に感ずるままに詠むことが肝要」と説き、一首一文、字余り・字足らず、連作等について例示しながら、わかり易く説明された。

野外研修は、御殿場の地にご縁のあった大正天皇第二皇子の秩父宮雍仁親王殿下（昭和二十八年薨去）のご別邸跡地である「秩父宮記念公園」で行はれた。この公園は、昭和十六年九月から約十年間、秩父宮同妃両殿下がお過しになったご別邸を、勢津子妃殿下が平成七年八月に薨去された際のご遺言により御殿場市に遺贈され、その後整備し平成十五年に開園してゐる。

貸切バスを降りた参加者は、小雨が時折ちらつく中、地元ガイドの案内で園内を巡った後、思ひ思ひに散策しながら、短歌の創作に打ち込んだ。園内には、茅葺のご別邸が残されてゐて、宮様が大東亜戦争終結（昭和二十年八月十五日）の玉音放送をお聴きになったといふお部屋なども公開されてゐた。近くには防空壕もあって、緊迫した当時の様子を拝察する

こととなった。

夜の講義の開始までに参加者それぞれが詠んだ短歌が提出された。

夜は、國武忠彦先生（昭和音楽大学名誉教授）の古典講義「古典は楽しい 小林秀雄」「本居宣長」が行はれた。「小林秀雄は、多様で複雑な人間を、科学的な客観的な分析的方法で捉へようとする現代思想から抜け出すことは容易ではないと言った。感動と観察を切り離す不自然な事はしないとも言った」と講義を始められた。「古典は、ある時代にあったがままで長生きするのではない、私たちが読んで回復しようと努力しなければ甦らない」と語られた。

次に、宣長の物まなびの力は「楽しむ」にあった。大好きな桜に真向ふやうに対象と完全に融合することにあつた。また、「江戸時代の中江藤樹、契沖、荻生徂徠、賀茂真淵たちは学問界の豪傑だと小林秀雄は言ったが、彼らを取り組んだことは、古典への信を新たにする」ことで、宣長は「源氏物語」に、物のあはれを発見し、「古事記」を甦らせた」と言はれ、「古典の完璧な価値を信じ、新たな感動を付与した」と説かれた。「伊藤仁斎は、『論語』『孟子』を沈潜反復して読み、孔孟の咳払ひを聞き、心の底を見た。宣長は契沖によつて、目ガサメタ。古言は、その当時の人々の古意と離すことが出来ない。古歌や古書に當時のあつたがままの姿を直にみなければならぬ」と語られた。

最後に「和歌も物語も、アハレノ一言二帰ス」といふ。あはれとは、ああといふ感動の言葉である。感ずるとは、動也うごく、すなはち感動である。ああとゆれ動く人の心の発見である。小林秀雄は、知る事と感ずる事が同じであるやうな全的認識を説いた」と述べられた。

第三日目

(八月三十一日・月曜日)

午前は、「御製に仰ぐ天皇のお心と日本の国柄」と題する講義が、小柳志乃夫先生（興銀リース(株)執行役員）によって行はれた。初めに、「歴史の連続性への認識」が危ふくなくなつてゐるとの福田恆存先生のお言葉を紹介され、百二十五代に及ぶ「歴代天皇の歴史」の図表を掲げて、連綿たる御系譜に意を向けるべきと語られた。次いで江戸時代の櫻町天皇から今上天皇に至る歴代御製を取り上げて、時代毎に国家的試練の内容は区々まちまちなもの、「国安かれ、民安かれ」と一心に神々に祈られるお心が一貫してゐることを指摘された。それは、光格天皇の後櫻町上皇あてのお手紙の「身の欲なく天下万民をのみ慈悲仁恵じんけいに存候事ぞんこうじ、人君なるもの第一のおしへ」といふお言葉の通りであり、中でも列強が開国を迫つて国論が分裂し

た幕末の孝明天皇の悲痛な祈りと、身を顧みず国民を守らんとされた昭和天皇の終戦時のお心とを御製にたどられた。また、わが国の皇室と国民の關係に相応しい言葉として「民と偕に樂しむ」といふ孟子の言葉を吉田松陰の『講孟余話』から引いて紹介され、明治天皇の「國民の業にいそしむ世の中を見るにまされる樂はなし」、昭和天皇の終戦直後の皇居勤勞奉仕者を詠まれた「をちこちの民のまる来てうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ」などの御製をエピソードを交へて紹介され、「この天皇と國民との共感の世界こそ日本の国柄である」と語られた。

最後に、神事と共に皇室が大事にされた和歌の世界、所謂「しきしまの道」について、明治天皇の御製を手掛かりにしてたどられ、それが「まごころをうたひあげたる言葉」や「言葉の上にあふれる人の心のまこと」をかけがへのないものとみる道であり、それはまた、「おもふことうちつけにいふ」「すなほなるをさな心」に通ずるものであることを説かれた。そして、歴代天皇のお歌に拝される世界は、神に向つて祈られるまごころと照応するものであることを示され、講義を結ばれた。

午後は、まづ学生と国文研会員による学生体験発表および会員発表が行はれた。最初に登壇した日本大学法学部三年の名和長高君は、昨年から参加してゐる國武忠彦先生のご指

導の小林秀雄著『本居宣長』の読書会において感じ学んだことについて語った。「歴史とは、ただ出来事を調べるものではなく、出来事を経験した人間の精神や思想を残された言葉によって、自らの心に思ひ出すことだといふことを学んだ」と語った。次いで高木雅史氏（株）ロゼッタ勤務）は、初めて参加した合宿の短歌相互批評の際、「年上の大先輩が一年生の私に対して、真剣に付き合ってくださいと姿勢が強く印象に残った」と述べ、「真剣に付き合ふとは、短歌の作り手の気持ちにより添はうとすることだと思ふが、この体験が寮生活でも役立つ」と学生時代の正大寮での寮生活を振り返った。「社会人となって十年が経った現在も、この付き合ひが続いてみて苦しい時の支へになつてゐる」と語り、「合宿で心底からつき合へる友を見つけ下さい」と語った。

前日の野外研修の折に詠まれた短歌についての創作短歌全体批評が、折田豊生先生（熊本市役所環境局主任技師）によって行はれた。冒頭、「昨夜、『歌稿』（全参加者の短歌が各人一首以上印刷されて綴じ込まれた冊子）を交響曲を聴く思ひで読んだ。夫々の素材について多くの人が様々な思ひを詠んでをり、多くの目で見ることの事実確認の多様さと確かさに改めて気づかされた。この『歌稿』は、他の人の歌と自分の歌を比べて、独りでも相互批評ができる最良のテキストである」と述べられた。そして、参加者全員に配布された『歌稿』の中から幾

つかを取り上げながら、思ひを正確に伝えるためにはどのやうな表現が適切か等々、添削例を示し、「再度自ら推敲し自分自身を見詰め直してほしい」と語られた。最後に「相互批評の要点は作者の思ひをよく聴くことであり、この後の班別相互批評では互ひに知恵を出し合って、作者の気持ちに添ふ表現に近付けていくとき、互ひの心が自づと一つに溶け合ふ瞬間が訪れると思ふ。そのやうな素晴らしい交流の時間となることを願つてゐる」と結ばれた。

このあと、**班別短歌相互批評**が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にするため尽力し、時間を超過してしまふ班もあったが、その分自分の心、相手の



心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

夜は、小田村初男先生（元皇宮警察本部長）によって、「『花燃ゆ』と小田村伊之助」と題する講話が行はれた。NHKテレビで放映中の大河ドラマ『花燃ゆ』に登場する小田村伊之助について、至誠の人といはれる生き方を紹介された。「伊之助は、安政の大獄で江戸へ送られることになった吉田松陰から『孟子』の『至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり』を験あましてくるとの言葉を託され、以後の松下村塾を任された。そして明治維新後、群馬県令となり、教育と産業振興に尽力し、名県令と讃へられてゐる。特に欧化思想に侵され真の教育がなされてゐないことに憂慮し、道德の教科書『修身説約』全十巻を編纂発行した。これは全国のベストセラーになった」と語られた。

夜は、先人のみ霊をお祭りする慰霊祭がしめやかに行はれた。齋行に先立ち寶邊矢太郎先生（元山口県立高校教諭）から、慰霊祭齋行の趣旨と祭儀の手順が説明された。慰霊祭の趣旨について、「この祭儀は慰霊祭といふ一つの儀式を通して私達の心をととのへ、戦時平時を問はず国のために尊いいのちを捧げられた全ての祖先のみ霊をお迎へし、その方々が後の世の人に遺されたお気持ちをお偲びし、私達もまた受け継いでゆきたいとの思ひをこめた祭儀である」と説かれた。

慰靈祭は祓詞はらひことばに代へて山口秀範常務理事による三井甲之の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の朗詠に始まり、小柳雄平会員による御製拝誦、池松伸典会員による祭文奏上とつづき、次いで参加者一同で「海ゆかば」を奉唱した。
左は拝誦された御製と、奏上された祭文である。

明治天皇

をりにふれたる（明治三十七年）

たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして

をりにふれたる（明治三十七年）

世とともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

鏡（明治三十八年）

國のためののちをすてしものふの魂や鏡にいまうつるらむ

馬（明治四十年）

人ならばほまれさつのしるし授けましいくさのにはにたちしあらこま

天（明治三十七年）

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

昭和天皇

松上雪（昭和二十一年）

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

戦災地視察（昭和二十一年）

国をおこすもとゐとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

東北地方視察（昭和二十二年）

あつさつよき磐城の里の炭山にはたらく人ををしとぞ見し

広島（昭和二十二年）

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

光（昭和三十五年）

さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさむぞわがねがひなる

今上天皇

沖繩平和祈念堂前（平成五年）

激しかりし戦場いくさばの跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

姿（平成九年）

うち続く田は豊かなる緑にて実る稲穂の姿うれしき

月（平成十九年）

務め終へ歩み速めて帰るみち月の光は白く照らせり

静（平成二十六年）

慰霊碑の先に広がる水俣の海青くして静かなりけり

本（平成二十七年）

夕やみのせまる田に入り稔りたる稲の根本に鎌をあてがふ

祭文

美しき富士の裾野に広たかされる高原の中「御殿場国立中央青少年交流の家」に打ち集ひ

公益社団法人国民文化研究会理事長 今林賢郁はじめ百十余名 第六十回全国学生青年合宿

教室を営みて はや三日目の夜を迎へぬ

今し天あまつ日はかくろひ さやかなる涼風すずかぜに秋の気配を感じる 今宵 平成二十七年八月

三十一日 「多目的室」を齋庭ゆにはと定めまつり 祓はらひ清きよめまつりて とこしへにみ国守ります

遠つみ祖^{おや}たちをはじめ み国のために尊きみのちを捧げ給ひし あまたのはらから達
亡き師 亡き友らの御霊をお迎へして みたまなごめのみ祭り 仕へまつらむとす

顧みれば昭和天皇の御聖断によつて 先のみ戦^{いくさ}は収められし後 占領政策による日本文

化伝統の破壊に やまとしまねの危ふきことを憂ひつつ 明治天皇はじめ歴代天皇の御製に

また聖徳太子のみ教へに われらの行くべき指標を求め 営みきたりし合宿教室も はや
六十年の歳月^{とじつき}を重ねり

しかれども我が国の政治・教育・マスコミ各界の混迷は いよいよ深まり 自虐史観は全
国津々浦々の国民にまではびこり み祖らの尊きみ教へも 解りがたく見えがたくなりゆき
にけり

今ここにわれらは 長谷川三千子先生をはじめ 諸先生のご講義に耳を傾け 班別研修・
古典輪読 はたまた短歌創作に 友らと心を開き語り合ひ 残されしみ言葉を心込めたどり
て われらのいのちは み祖^{おや}らのいのちにつらなりてあるを覚ゆ 老いも若きももろとも
に 心を鍛へ言葉を修め 祖国日本を とことはに栄えゆかしめんと誓ひまつらむ

天にますみ祖のみ霊よ 願はくは我らのゆくてをまもらせたまへと 第六十回全国学生
青年合宿教室参加者一同に代り 池松伸典 謹み敬^{かしこ}ひ恐^{かしこ}み恐^{かしこ}みも曰^{まう}す

第四日目

(九月一日・火曜日)

合宿の最終日を迎へて、大学や職場での日常生活に戻る前に、合宿での研修の意味を確かめるべく、今林賢郁理事長による合宿を顧みてが行はれた。初日の導入講義から、長谷川三千子先生の御講義、短歌創作、古典講義、御製を仰ぐ講義までの全日程に触れて、「そこに共通するものは、この日本といふ国は一体どういふ国なのか?といふ問ひかけではなかつたか。各人においては反発もあつたかも知れない。そこを学びの出発点にして欲しい。ただし、知識だけではなく、自分の身に浸み入るやうな勉強をして貰ひたいと強く思ふ。自分自身の言葉で語れる学問に取り組まうではないか。かうした勉強を続けることによつて「自信」といふものが生れてくる。この自信はこの日本の国に愛着を持つことと同じことである」と語りかけた。また、「今年年頭の感想で今上陛下がおっしゃったやうに、近現代史、特に満州事変以後の日本の歴史を学んで欲しい。謝罪などといふことを跳ね返すやうに歴史を自分自身のこととして学んで欲しい」と語り、「自立」すること、自分の足で立つといふ自信を作り上げよう。その意思と気概が大事で、この合宿で皆様の心に少しでも届いたものがあれば、ありがたい」と言葉を結んだ。

ついで、参加者が思ひ思ひに胸の内を語る全体感想自由発表が行はれ、「この合宿で学んだことは何か、気づかされたことは何か。これからどう学ぼうとしてゐるか」等々についての思ひが次々に発表された。

「初参加で緊張したが、皆に溶け込め大変勉強になった」「長谷川三千子先生の神話の話に感動した。これからも学んで行きたい」「御製を通して、天皇のご存在の意義を知った」「人に寄り添ひ、おほらかで、素朴な宣長の心を垣間見た」「短歌の相互批評で一人一人の歌を皆で考へ、心を通はせ合ふ体験が出来た」「国や歴史について学び、日本人としての幸せの根底は何かを感じた」「熱意ある講義を通して、古典に触れる共感の力を学んだ」「祖父や先達から学び、日本をもっと深く知りたい」「御製を通して民の喜びを喜びとする、君民一体の国柄を学び、日々の仕事に真剣に取り組むことがそれに繋がることを学んだ」「戦後、見失ったものに改めて気づかされた、是非この体験を世に広げて行きたい」「十七条憲法から教育勅語へとつながる縦の流れとそれを生かす横の関係を学んだ」「友とのつながりを続けたい」「古典が歩み寄ってくるやうな、輪読をしてみたい」など様々な感想が率直に発表された。

開会の時から続いてゐた雨雲がやうやく晴れゆく中、閉会式は始まり、主催者を代表し

て澤部壽孫副理事長が「友と共に心を働かせながら学問を重ねて、真っ直ぐに生きて行つて欲しい」と挨拶し、続いて伊藤俊介合宿運営委員長は「自分から何かを発信し周りの人から意見をもらふことが、自分の姿を写す鏡となる」と前向きに生きようではないかと訴へた。参加学生を代表してニューヨーク大学アブダビ校教養学部二年の鈴木茉莉菜さんは「日本で日本のことを悪く言はれても反論出来なくて悔しかった。日本の歴史や思想を正しく身に付けて、自分が選んだ道を進みたい」と決意を語った。最後に皇學館大学文学部二年の江崎義訓君が声高らかな閉会宣言を行つて、第六十回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

参加者

(学生班) (算用数字は参加学生数)

- 早稲田大学 1 日本大学 1 専修大学 1 國學院大学 2 明星大学 1
 - 皇學館大学 1 埼玉大学 1 立命館大学 1 京都産業大学 1
 - 甲南大学 1 広島大学 1 福岡大学 4 九州工業大学 1
 - 中村学園大学 2 九州産業大学 2 福岡教育大学 1 佐賀大学 2
 - ニューヨーク大学 1 予備校生 1
- 計二十六名 (うち女子五名)

(社会人参加者) 十五名(うち女子九名)

(招聘講師) 一名

(国民文化研究会) 六十九名

(事務局) 一名

(見学者・慰霊祭協力) 三名

総計 一一五名

第六十回(平成二十七年)全国学生青年合宿教室「日程表」

8月31日(月)	9月1日(火)
起床(6:00)	起床(6:00)
朝の集ひ	朝の集ひ
朝食	朝食
講義 小柳志乃夫先生	清掃
	合宿をかへりみて 理事長 今林賢郁
班別研修	全体感想自由発表
	地区別懇談
	感想文執筆 第二回短歌創作
	閉会式 (挨拶) 主催者代表 副理事長 澤部壽孫 合宿運営委員長 伊藤俊介
昼食	昼食
学生体験発表 名和長高君 会員発表 高木雅史氏	解散
創作短歌全体批評 折田豊生先生	
班別短歌相互批評	
夕べの集ひ	
夕食 入浴 休憩	
講話 小田村初男先生	
慰霊祭説明 寶邊矢太郎先生	
慰霊祭	
班別研修	
就寝	

合宿教室のあらまし

	8月29日(土)	8月30日(日)
6:00		起床(6:00)
7:00		朝の集ひ
8:00		朝食
9:00		講義 長谷川三千子先生
10:00		質疑応答
11:00		写真撮影
12:00	受付:13:00 開始	班別研修
13:00	開会式 理事長 今林賢郁	昼食
14:00	オリエンテーション 合宿運営委員長 伊藤俊介 合宿指揮班長 内海勝彦	短歌導入講義 青山直幸先生
15:00		野外研修・短歌創作 〔秩父宮記念公園〕 散策
16:00	自己紹介及び班別研修 〔日本への回帰 第50集〕 輪読	(短歌提出)
17:00	夕べの集ひ	夕べの集ひ
18:00	夕食 入浴	夕食 入浴
19:00	休憩	休憩
20:00	合宿導入講義 山口 秀範先生	古典講義 國武忠彦先生
21:00		
22:00	班別研修	班別研修
23:00	就寝	就寝

合宿詠草抄



講義

合宿導入講義を聞きて

専修大 経営四 芦田和久

明治天皇おほきみの定めおかれし国訓みとしへ（教育勅語）に聖徳太子たいていしの憲のりが生きてゐるなり

合宿導入講義

全日本学生文化会議 清川信彦

自らが如何に生きるか問はずして日々を送りし我に気づきぬ

長谷川三千子先生の御講義を拝聴して 中村学園大学職員 内場真一

鏡玉剣に込められし意味合ひを尋ねゆかむとの思ひおこりぬ

長谷川三千子先生 内山慶子

編かむまれたる古事記ふることぶみはそのままに古心いにしへを今に伝へり

つぎつぎに成る神たちの御心を説きしお姿心魅かるる

短歌創作導入講義を聞きて 福岡大 聴講生 小林拓海

大津波に吾子の墓まで流されし親に想ひを馳せればつらし

「砂まみれの吾子の遺骨を持ち帰る」御親の上を想へば苦し

秩父宮記念公園

宮様の功をいさをしのお人々のおもひこもれる記念公園

国学院大 大学院二 島岡昇平

宮様と妃殿下の防空壕を拝見して

皇学館大 文二 江崎義訓

爆撃に備へし壕は黒々と霧雨に濡れ光りて見ゆる

(株)まるぶん 高山広宣

目を閉ぢてひのきの森にたたずめば鳥のさへづりに心安まる

甲南大 経三 富山晴希

静寂な防空壕に入りみて戦時の人に思ひをはせき

福岡大 経四 福岡潤

夕暮れて静寂しじまの森を一人行けば冷気迫りて秋近みかも

熊谷拓也

公園のしだれ桜は堂々と枝を広げて美しく立つ

日本大 法三 名和長高

宮さまの開き給ひし窯かまは今石で閉ざあるじさる主無くして

合宿の日々

中村学園大 流通科学二 梅崎理恵

はるばると静岡の地に足はこび祖先のことを改め考ふ

チャンネルAJER 佐藤和夫

東富士の演習場で汗流す若き日のこと思ひださるる

福岡大 経一 匹田己晶

知識なく参加してみる研修に皆の声にて理解深まる

早稲田大 政経四 北林裕教

我が想ひを知らむとすなる班友のあくなき努力有難きかな

国学院大 神道文化三 横川翔

垂れこめし雲にかくれし富士ヶ嶺うまし御姿明日こそ見たし

佐賀大 聴講生 吉岡勝也

雨傘を忘れた僕は合宿中ずっと誰かと相合傘なり

慰霊祭の和歌朗詠をききて
明星大 教四 江崎真穂

ますらをの悲しきいのちをこれほどにつよく思ひ入る呼びごゑしらじ

宗教学人太成殿本宮 高見澤玉江

神話より続く国柄守りたる名もなき民と我もなりたし

九州工業大 工三 高野真里

我が祖先伝へたきことあるけれど聞く耳もたぬわれ恥づかしき

埼玉大 経三 佐藤勇氣

連綿とつづく歴史のただ中で過去とつながる自己に気付けり

福岡中小企業経営者協会 福元晶子

御製にて詠みたまひたるみ心に初めて触れて心打たるる

早朝、隣接の米軍基地流れ来る米国歌を聞いて
農業 猪部敬彦

大富士の裾野に響く米国歌御父祖みおやの御霊如何にぞ思ほす

合宿終る

感動を己の言葉で語らるる先生うしの姿を心に刻まむ

福岡教育大 聴講生 前川大基

我が国の国民としてやるべきは自国のことを学ぶことかな

ニューヨーク大 アブダビ校 教養二 鈴木茉莉菜

自らの心をつかむ古典のり求め狂ふがごとく本を読みまし

佐賀大 文化教育二 藤近晃久

御殿場の地で見つけたりし友たちよ再び会はむ合宿教室

京都産業大 経営一 船岡龍一

富士の山雲がかかりて見えねども私の心は晴れわたりけり

福岡大 経四 福岡潤

班友と合宿で学びし体験を我が人生に生かしてゆかむ

九州産業大 経三 八巻憲郎

国民文化研究会理事長

今林賢郁

若きらにわれらが願ひ届けんと歩み努めて六十年経ちぬ

時により緩むところを打ち払ひ友らと励みし日々にてありき

とことはのみ国の弥栄念じつつこの年月を生きて来たりぬ

「極まればまた蘇る道」ありと思ひて進まんわれらが務めに

秩父宮記念公園散策

元日商岩井(株)

澤部壽孫

丈高きヒノキ並み立つ森中の小路歩めば霧雨の降る

橙だいたいと黄色の花つけアフリカンマリーゴールド群れ咲くを見つ

三本のしだれ桜のかたはらに茅葺き平屋の美しく立つ

秩父宮記念公園にて

拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内健生

朴とつなガイドの案内を聞きをれば雨の上がりて吹く風冷涼し

雨もよひの木立を抜くれば鮮やかなマリーゴールドの花の目に入る

家族連れの人らも歩む宮様をしのぶ公園静かなりけり

講義にて

(株)寺子屋モデル

山口秀範

友を得よ良き友持てと若きらへ講義の終りに訴へにけり

誇らしき我が友らありと告ぐるとき覚え胸のこみ上げて来ぬ

勅語なる「朋友相信じ」さながらに生くるは楽しみ国支へて

長谷川三千子先生のご講義

国民文化研究会事務局長

奥富修一

丁寧に解きほぐすこと語り給ふ師のみ言葉に時を忘れき

神代より伝はり来たる言の葉に包まれ生なまきる幸をしぞ思ふ

心とは鏡なりとのみ教へのわが身に沁みて胸熱くなる

長谷川三千子先生の御講義をお聴きして

元新潟工科大学教授

大岡弘

我らいま神話をなほも生くるべき民族なるを示し給ひぬ

山口秀範先輩のご講義を聴きて

興銀リース(株)

小柳志乃夫

信ずべき友吾にありと心熱く語りたまへる御言葉強し

万感の思ひを込めて若きらに友持つべしと訴へたまふ

昭和音楽大学名誉教授

國武忠彦

風吹けばゆらぐ木の葉も楽しげに白雲光り流れゆくかな

杉の木はひとときは高くそびえ立ち風にゆらぎて美しきかな

山口秀範兄の講義を聞きて

元川崎重工業(株)

山本博資

伝へたき思ひあふるる言の葉はしらべとなりて胸に迫りく

長谷川三千子先生の御講義を聞きて

いにしへゆ語りきたりしくさぐさを文字にてのこせしいとなみたふとし

古事ふることの記かみはこの世のたからなり思ひとどめてゆめ忘るまじ

師の君は「三種の神器」をとき給ふこれを生きるがわれらのつとめと

元(株)講談社

磯貝保博

久びさに動かぬ雲の流れ出し青空みえて心あからむ

山裾をおほひし雲も払はれて雄々しき富士のあらはれにけり

山口秀範先生の御講義を拝聴して

元(株)三菱重工業

島津正數

熱き思ひを語り給へる師の君の御顔を撮らむとシャッターを押す

目頭を熱くされつつ語らるる講師の思ひひたに伝はる

元富山県立富山工業高校教諭

岸本弘

この雲の彼方に富士の峰ありと心に描き過ごせり四日を

隠るる日しるく見ゆる日我らゆく道も御山の姿に似たり

秩父宮記念公園散策

熊本市役所
折田豊生

大檜並み立つ園は千万の草木群れ生ひ緑豊けし

ユ一モアにあふるるガイドの説明に笑みを浮かべて聴き入る友らと

茅葺きの邸宅前の大桜春の盛りを想ひつつ見る

若き日の宮の銅像向き給ふ彼方に富士の望まるとふ

元神奈川県立小田原高校教諭
原川猛雄

友どちと語らひつつも合宿の資料づくりにも励む楽しさ

なつかしき友らと会ひて相共に資料をつくる作業も楽し

小柳志乃夫兄の講義を聞きて

三菱地所(株)
青山直幸

しづかにも心を込めてあまたなる御製読みゆく友は気高し

世の中は移りゆけども歴代の天皇方の御心変らず

神に祈り民思はるる御心を仰ぐ国柄守りゆきなむ

一筋に連なる君と民の信を思へば胸の熱くなりゆく

秩父宮記念公園にて

東京大学客員教授
伊藤哲朗

霧雨に煙りし庭の雨上がり霧霽れ渡り薄日射し来ぬ

霧晴れて遠き雲居ゆ光射し流るる雲間に富士山の見ゆ

聳え立つ富士の山塊雲湧きて嶺にかかれる雲流れをり

秩父宮記念公園の防空壕

日本大学名誉教授

夜久竹夫

備へ無き国に残りし防空壕の備への重さ今に伝へる

班別短歌相互批評

(株)ファイン

大島啓子

一人一人の心に寄り添ひ歌なほすことの楽しも心打ち解け

恋の歌詠みにし女にその心詳しく問ひて言葉正しゆく

歌詠みし人の気付かぬ胸の内見えてくるかも相互批評に

(株)ライフプラザパートナーズ

河崎由紀夫

うすびさしかすかに見える富士山に友どちの声よろこびに満つ

元福岡県公立小学校教諭

久米由美子

すなほなる思ひを述ぶる若人の顔いきいきと輝きてあり

御殿場での合宿に初めて参加して

医療法人IMSグループ本部

最知浩一

若きよりとともに学びし友達と今年も集ひぬ富士の裾野に

六十年の長きにわたり続き来し学びの道のありがたきかな

慰霊祭

ハローワーク福岡南 古川 広治

みおやらのみたまところをかよはすとふみことばむねにみまつりにのぞむ

合宿教室開催

FTIコンサルティング 伊藤 俊介

運営の重任を受けはや一年つひに開催初日を迎ふる

続々と集ふ友らや先輩の「お疲れ様」の言葉ぞ嬉し

ありがたき言葉嬉しと思ひつつ任の重さをあらためて感ず

合宿を終へ参加者を見送りし折

四日間共に学びし仲間らと別れを惜しみ手握り交す

満員の参加者を乗せ路線バスは御殿場駅へと走り始むる

振り返り我に手を振る仲間らの皆笑み給ふを見るぞ嬉しき

長谷川三千子先生の講義を聴講して

西松建設(株) 蔭 山 武志

神々の時代より連なる我が国の伝統をここで改めて思ふ

合宿本部の仕事を初めて経験して

裏方の仕事は大事と知りつつも班別研修をうらやましく思ふ

合宿地に寄せられし歌

御殿場合宿へ（八月三十一日）

富士を仰ぎ新しき御代に生きむとす学びの友らさきくあれかし
戦ひと平和と一貫つながりて生きむとしたりああ合宿六十年

下関市 寶邊正久

千葉市 上村和男

まむかひに靈峰富士をあふぎみつわれらのつどひおこなはれんとす
難き病につどひの庭にゆけぬ身をくやしくおもひ悲しみに満つ

東京都 坂東一男

学生の数は少なくなりたれと思ひの深さに合宿はなる

函館市 大町憲朗

國のため命ささげし先達をみ祭る集ひの近づきにけり
友どちの集ふ力は祖先みおやらのみ魂に通ひ國守るらむ

夏の日の集ひに我も山河越え北の里より加はる心地す

あとがき

第六十回「合宿教室」は、昨年八月二十九日から九月一日まで、静岡県御殿場市の「国立中央青少年交流の家」において開催され、大学生をはじめ多様な職種にわたる社会人も加はり計百十五名によって、学問・人生・祖国の一体的把握のための真剣な研鑽が行はれた。本冊子は、その折なされた各講義を中心に研修の要旨を収録したものである。合宿参加者各位には、この合宿記録をあらためて味読いただいて、研修の日々を思ひ起していただくとともに、人生の槩として、また日本の国のあるべき姿を求めるための学びの指針として活用されんことを願ふ次第である。

今年の第六十一回の「合宿教室」は、「東」と「西」に分けての開催となる。東日本合宿は九月二日（金）から三泊四日の日程（於・御殿場市「国立中央青少年交流の家」）で、西日本合宿は八月十九日（金）から二泊三日（於・福岡市「さわやかトレーニンゲセンター福岡」）の日程で、それぞれ開催される。

今年も例年と同様の、それ以上の稔ある研修合宿にしたいものと準備してゐる。全国各地からの学生、青年諸氏多数のご参加を願ひつつ「あとがき」とする。

平成二十八年二月

編集委員

山内 健生

磯貝 保博

——日本への回帰——
(第51集)
〈60周年記念出版〉

平成二十八年三月二十日発行

定価 九〇〇円

送料 二一五円

編者 大学教官有志協議会

公益社団法人国民文化研究会

編集委員代表 今 林 賢 郁

発行所 公益社団法人国民文化研究会

〒二五〇—〇〇二 東京都渋谷区東

一—一三一—一四〇二

TEL (〇三)五四六八—六二三〇

振替〇〇一七〇—一六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

大学教官有志協議会 編
公益社団法人 国民文化研究会

